
その男が行く道は

戦場ヶ原 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その男が行く道は

【Nコード】

N09030

【作者名】

戦場ヶ原 戦

【あらすじ】

知らない内に身を呈して世界を救った夜刀砌神にお礼としてチートな能力を貰い、ネギまの世界に転生する

基本原作沿いです 原作ブレイクが好きな方は申し訳ありませんが期待しないで下さい

プロローグ（前書き）

よろしくお願ひします

今回は結構スタンダードなネギまに挑戦します

プロローグ

私の名前は夜刀砌^{よがたなみぎり}

年は17歳

なんか格好いい名前だけど、実際は顔は普通だし（本人はそう言っているが実は結構イケメンなのである）

ちよつと頭がいいだけ（全国模試の順位は一桁レベル）でも運動は得意だ（全国レベル）

しかも何を隠そう私はオタクの分類に入る人間なんだ
現在私は車に轆かれそうになった少年を突き飛ばした

少年は向こう側に行き着いて助かったようだが、車は私を目掛けて猛スピードで突っ込んでくる

私の人生も此処で終わるか…
まだ高校生活終わってないのに…

まあ、私より先が長い少年を助けられたんだから、ダラダラして自然死するよりも全然いいよね
そう思っていると

ドンッ！

その音と共に、私は気を失った

…此処は何処だろう？
何も無い真っ白な空間
そこに、髭を生やした如何にも神様ですと言わんばかりの老人が現れた

「君が夜刀君かの？」

「あ、はい

あなたは誰ですか？」

「僕はゼウスじゃ」

ええ！？

ゼウスって確かどっかの最高神じゃなかったっけ！？

「その通りじゃ」

こゝ、心を読んだ！

「僕はこれでも神じゃからな

人の心を読むくらい造作もないのじゃ

さて、まずは君のことを話さねばならん

単刀直入に言う

君は死んだ」

「そう…ですか」

「そして、儂から礼を言わせてくれ

ありがとう」

「え？何故礼を？」

「君が助けた少年は、将来起こる第二次世界大戦を解決へと導く、
言わば救世主なのじゃよ

「じゃが、儂の部下のせいで、彼は手違いで死んでしまっただ
たのじゃ

「しかし、それは君が身を持って修正してくれたのじゃ」

「そうなんですか…」

「そのお礼に、君に好きな能力をつけて好きな世界に転生させたい
と思う」

「え？」

「いいんですか？そんな事しちゃって」

「構わん

「そもそも転生させる許可を出すのは儂じゃからな」

「へえ」

「で、どんな能力をつける？」

「何でもいいぞ

「わしは最高神じゃからな

「幾らでも出来るぞ」

「そうですか

「それじゃあ、まずは Fate / stay night のアーチャー
の投影魔術とギルガメッシュゲイト・オブ・バビロンの王の財宝、全部の宝具が真名解放

可能で

次は五右衛門の斬鉄剣とブリーチの斬魄刀を全部とナルトの写輪眼後は身体能力と気をジャック・ラカンの50倍くらい、魔力を木乃香の50倍くらいで、魔法の才能も下さい」

「うむ、分かった」

「自分で言っというて何ですけど、本当にいいんですか？かなり無茶な要望したと思ってるんですけど」

「ふおつふおつふお、わしは最高神じゃからな問題無い」

「はあ、そういうもんですか」

「さて、能力も決まった事じゃ、行きたい世界を言いなさい」

「それでは、魔法先生ネギまの世界で時代は紅き翼が活躍し始める頃に」

「分かった、その時代に送ろう」

「何から何までありがとございます」

「いや、気にすることは無い

元々こちらの不手際じゃ

これくらいは当然

それでは送るぞ」

「はい、ありがとございました」

「うむ

では、さうばじゃ」

目の前が真っ暗になった

そして再び明るくなると森の中にいた

今は夜のようだ

私はその場に寝っ転がり爆睡した

転生1日目、終了

プロローグ（後書き）

ありがとうございました

主人公設定……………今更！？（前書き）

今更です

主人公設定……………今更！？

名前：夜刀 砌

性別：男

二つ名：「剣聖」・「光弓の破壊者」・「音速の魔法剣士」・「
ジェノサイド
大虐殺」

発動キー：ギル・ガ・ジル・ガン・グジル・ガ・ゼル

容姿：黒髪のパニーテールで右目が紺色、左目が紫色のドット

アイ

女顔でしかも美人のため、よく女に間違えられる
見た目は細身だがかなり筋肉がある

性格：基本的に温厚な優男

だがキレる、もしくは本気になると口調が変わり、容赦
が無くなる（殺気駄々漏れ）

ステータス

筋力：A（EX） 耐久：A（A）

敏捷：EX+（EX+） 幸運：A（A）

魔力：EX（EX） 宝具：S（EX）

気：EX（EX）

（ ）内はアーティファクト使用時の能力値

固有スキル

写輪眼（EX）

視力が低下しない永遠の万華鏡写輪眼

・天照

・月詠

・須佐能乎（とつかのつるぎ十拳剣とやたのかがみ八咫鏡とサスケの弓矢を装備）

・炎遁・加具土命

・イザナギ（しかも失明せず、時間は無制限）

・魔幻・枷杭の術

・魔幻・鏡天地転

・神威

fate（EX）

・投影魔術

・王の財宝ゲイト・オブ・バビロン

斬鉄剣（S）

切れ味やら硬度やらがあり得ないほど強化されている

全ての斬魄刀（A）

才能（S）

あらゆる魔法、技術を極められる

身体年齢の変化

無銘流（EX）

・無銘流 硬刀

自分の刀を気で強化して斬るといふ単純な技

だがそれ故に使いやすく、技と技の繋ぎにも使えるので結構便利

・無銘流 斬波

斬戟を真空波にして飛ばす技

上記の硬刀と同じく使いやすいため技と技の繋ぎによく使う

・無銘流奥義 千錐

超高速で動き短時間で何百人も斬る事が出来る

雑魚一掃に使う

・無銘流奥義 一刀両断

敵を真っ二つに斬る

これは切断能力に特化した技であり、如何なる鎧、障壁、障害物があろうとそれもろとも斬る

・無銘流奥義 残影羅刹剣

相手一人を斬る、斬る、とにかく斬る

相手は駒切れとなる（ジャックがなぜ助かったのかは「そんなの気合に決まってるんだろ！」だそうだ」

・無銘流奥義 修羅乱絶剣

周りにいる敵を斬りまくる

上記の残影羅刹剣と似ているが残影羅刹剣は対象が一人なのに対し、修羅乱絶剣は周りにいれば何人でも対象に出来る

・無銘流奥義 迎居合切構むかえいあいぎりのかまえ

居合い切りの構えのまま状態で静止

相手が近付いてくれば神速の一閃を持って相手を斬る

全方位に対応できるため、万能の防御の構え

・無銘流究極最終奥義 天照大神剣 終焉斬むめいりゅうきゅうきょくさいしゅうおうちょうあまてらすだいしんけん しゅうえんざん

刀を膨大な気で限界まで強化させ、光速の速さで一刀両断並みの切れ味でラカンの斬艦剣並の威力の斬撃を一秒で百回も相手に叩き込む斬鉄剣で無いと気で強化させた時点で耐え切れなくなり刀が壊れる

・神々の黄昏（S）
ラグナロク

呪文は

全ての神々よ 断罪せよ 肅清の光よ その力を持って 我に仇名
す全ての敵を滅ぼせ！

属性は光

白い光の塊だが、その威力はナギの千の雷を凌ぐほど
色々なバリエーションがあり、

複数の光の矢（任意で追尾能力を付けられる）

集束型の光線

拡散型の広範囲殲滅用

棒状の剣（振ると「ヴォーン」と音が鳴るため、ライトセーバーもど
きだ）

投擲型の槍

連射型のマシンガン

狙撃型の弓矢（弓と矢が両方あるもの）

時間差で爆発する爆弾がある

・この世全ての悪（S）
アンリ・マユ

呪文は

邪悪なる神々よ 横暴と妄想の正義を砕き その深淵なる闇を 偽
善者共に刻み込め！

属性は闇

黒い波動の塊

その他は神々の黄昏と同じ
ラグナロク

傀儡

・風影

見た目は三代目風影、魔力を磁力に変える術式が組んである
至る所に砂鉄を忍ばせている

・火影

見た目は波風ミナト、特製のクナイの元へ瞬間移動できる飛雷神の術の術式が組んである
至る所に特製クナイを装備
螺旋玉も使用可能、と言うより本人とスペックは同じ

バクティオーカード
仮契約

主 テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

名前表記 ヨガタナ ミギリ

称号 全てを超越する剣士

色調 青紫色

徳性 深淵

方位 中央

星辰性 冥王星

アーティファクト（s）

・対極したる光闇の腕

アデアットと唱えると右腕が白く神々しいオーラ、左腕が黒く禍々しいオーラを纏う

身体能力強化に加え、右腕で持った場合は聖剣、左腕で持った場合は魔剣となる

ラグナロク 神々の黄昏・この世全ての悪で作った剣とて例外ではない

聖剣は魔除けなどの様々な加護を受けられ、魔剣は再生不可、寿命短縮など様々な呪いを斬った相手に負わせる

尚、右手で神々の黄昏ラグナロク、左腕でこの世全ての悪を撃つと、威力が爆発的に上がる

主人公設定……………今更！？（後書き）

無銘流についてはあまり突っ込まないで下さい
ノリで考えた流派です

紅き翼と顔合わせ

朝、目が覚めると直ぐ傍に手紙が置いてあった

『これを読んでいるということは無事に着いたようじゃな

君が頼んだ武器等は全て王の財宝ゲートオブパヒロンに入っておる

中の物は念じれば出て来る

汝の人生に幸あらんことを願う

ついでに、お主を不老にして置いた

まあ、アフターサービスというものじゃ

ゼウスより』

なるほど、じゃあ出始めに斬鉄剣を…

私は斬鉄剣が出て来るように念じると、腰に斬鉄剣があった
しかし…

「私、よく考えれば学生服のままなんだよね」

私は黒い服に黒いズボン、更に黒いコートを頭に思い浮かべる
そしたら服が真っ黒な服装に変わっていた

「うん、これでいい」

すると、直ぐ近くで強大な魔力を感じた

「これは…多分ナギだな」

私は飛んでいこうと考えたが

「どつやってやるんだろっ!」

試しに魔力を体に流し浮くように調整する
と言っても、感覚的なものなので何とも言えない
後は慣れだな

そうこうしている内に着いた

そこでは紅き翼と盗賊が戦っていた

盗賊の数は大体50人程

私は適当な場所に降りる

「はああ!」

燃える天空!」

ズガアアアアン!

盗賊の半分が消滅した

「おい!誰だてめえ!」

「詳しい事はこの盗賊たちを倒してからにしよう」

「絶対だぞ!」

その後、紅き翼と共闘し盗賊たちを殲滅した

「それじゃあ、簡単な自己紹介をさせて貰おうかな

私は夜刀砌

得意な事をは敵の殲滅」

「お前が使ってる刀は何なんだ？」

「ああ、これは斬鉄剣と言ってね

私のお気に入りになんだ

切れ味はかなり良いよ

次は？」

「貴方は最初燃える天空を使っていたましたが、他の魔法も使えるのですか？」

「うん、大体の魔法は使えるよ」

「はあ、貴方もバグキャラでしたか…」

「あはは…」

「なあ砌、俺達と一緒に来ないか？」

「うん、いいよ

ここでなら私も全力を出せそうだし」

「それじゃ、砌が仲間になった記念に飯でも食おうぜ！」

「うむ、確かに少し腹が空いたしの」

「じゃあ早く町に行こう」

「そうしよつが」

そして、町に着いた

「町だー！」

「よつやく付きましたね」

「お、あそこに定食屋があるじゃねーか
中に入るうぜ」

20分後

「いやー、食った食った」

「なかなか美味かったの」

「ところで、今夜はどこで寝るの?」

野宿は流石に勘弁だよ

「どこか宿でも探しましょう」

流石に宿屋が無いという事は無いでしょうから

「そうか」

「じゃあ手分けして探そうぜ」

そして暫く

あ、宿屋あった

ナギたちに連絡しよう

私はナギたちに念話で連絡した

（おーい、宿屋あったよ）

（場所は何処だ?）

（○○○の角を右に曲がったところ）

（結構近いのう）

（そこで良いじゃろ）

結局、私が見つけた宿屋で寝ることにした

オリジナル魔法（前書き）

主人公の発動キーが登場です

オリジナル魔法

私が紅き翼に入って数日

魔法は大方無詠唱で発動できるようになったから

今はオリジナル魔法を考えている

というより完成目前だ

「うん、とりあえず拡散も出来た方がいいから……

やっぱり術式はこうした方がいいよねー

あーでも曲がるようにもしなきゃいけないから……「」を「」
して……

出来たあ!」

「お、やっと出来たのか」

「うん、実際に発動して見ないと分からないけどね」

「じゃあ早速やってみるよ」

「うん

ギル・ガ・ジル・ガン・ゲジル・ガ・ゼル

全ての神々よ 断罪せよ 粛清の光よ その力を持って 我に仇

名す全ての敵を滅ぼせ!

『ラクナログ神々の黄昏』!」

私の手に白い光が集まり、そこから一つの光りの矢が放たれる
その放射線にある物を全て壊して何処かへ飛んで行った

「スゲー！」

「確かに凄いですか？
これだけなのですか？」

「いや、違うよ

先ずこの光、神々の黄昏ラグナロクはいろんな形状に出来る

複数の矢にして拡散させて広範囲を攻撃したりその複数の矢を操
つて一斉攻撃もできるし

集束させて光線みたいにして放つ事も出来るし

こうやって棒状にして剣の代わりにすることもできる

結構万能なんだ」

「なるほど、確かに対人戦でも対軍戦でも使えるのう」

「因みに本気でやると拡散させた矢の一発一発がナギの雷の暴風並
みの威力になる」

「…この本来の威力はお主しか出せんじやろうな」

「でしようね」

結局、この魔法を使えるのは私だけだった

こんな複雑な術式と大量の魔力を必要とする魔法は私だからこそ出
来るようだ

大戦勃発とジャック・ラカン

私が紅き翼に入って数カ月後

原作通り帝国対連合の戦争が始まり、紅き翼は連合軍についた
そんなこんなで紅き翼は大戦にて有名になっていき、最早知らぬ者
無しとなった

今私達紅き翼は、帝国の大軍隊を相手に戦っている

「はあああああ！

無銘流 千錐せんぎり！」

私が使っているこの無銘流はその名からも分かるように、本来名前
は無い流派だ

しかもその流派の基本となる型も無い

その太刀筋や技に統一性は無く、その動きは予測することがほぼで
きない

しかもこの流派は教えて分かるものではなく、歴代の使い手が独自
にアレンジしていったため予測不能な動きや奥義が出来上がった
よって滅多に人目につく事は無く

誰かが見ていたとしてもその姿は素人にしか見えないためだという
この流派を継ぐためには先ずこの流派の存在を知り、さらにその動
きを見極めなければならぬ（という設定）

本当は自分で勝手に考えたものだ

だがやっている内に楽しくなってしまう、技もかなり考えた

こんな設定をつけた理由は私が剣術の練習をしているときに、詠春が

「そんなに凄い刀を使っているという事は何かの流派を継いでるん
だろ？」

と言ってきたのだ

最初は何の流派も継いでないと言おうとしたのだが他のメンバーが

「砌、何の流派使ってたんだ？」

もったいぶらずに早く言えよ」

「確かに気になるのう」

「私も詳しく聞きたいですね」

と食いついてきたんだ

流石にそんな中で何も継いでないとは言えずこんな設定をでっちあげてしまった

くそお！何故こんな事をでっちあげてしまったんだ！

「ナギ、下がって！

一気に殲滅する

ガスイケル・ベイ
串刺城塞！」

ズガガガガガ！

帝国軍の兵の足元から槍が現れ、敵を串刺しにする

「見る！

また砌殿が帝国軍を殲滅したぞ

我々の勝ちだ！」

「オオオオオオオオ！！！！！！」

「相変わらずスゲーな」

「まあ、伝説の武器だからね」

「やはりあなたはナギ以上のバグでしたか…」

あ、それと私にも二つ名がついた

「剣聖」と「光弓の破壊者」

いやー、やっぱり二つ名がつくと嬉しいよね

「おーい、そろそろ飯食うぞ」

「ああ、今行くよ」

そこには詠春が持ってきたと思われる鍋が置いてあり、その中にお湯が入っていた

「んっふっふっ」

こいつが旧世界、日本の鍋料理って奴かあ」

今日の晩飯は詠春提案の鍋料理だ

「じゃ、早速肉を」

「あっ、ナギ、おまつ……」

何、肉を先に入れてんだよ」

「トカゲ肉でも旨いかのう？」

「いやトカゲ肉はどうかと思うけど」

「いいじゃねえか」

「旨いもんから先でよ、ホラホラ」

「バツバカ、火の通る時間差というものがあってだな……」

「あーうつせ、うつせーぞ、えーしゅん」

「フフ…詠春、知ってますよ。日本では貴方のよつた者を『鍋將軍』
…と呼び習わすそうですね」

いや、鍋奉行の間違いでしょ

「つ…強そうじゃな」

「わかったよ…詠春、俺の負けだ
今日からお前が鍋將軍だ」

「鍋奉行じゃ……？」

んー、嬉しくないな」

「全て任す。好きにするがよい」

あれ？

このシーンって、確かジャック・ラカンが来るところじゃ

ドカァン

早速来た

まだ肉は少ししか食べてなかったのに（涙）

「食事中失礼〜ッ、俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン〜！
いっちょやるっぜっ！」

本来奇襲のはずなのに何で大声で自己紹介なんてしてるんだろ？

「何じゃ？あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな。えいしゅ…おお！？」

詠春は、飛んできた鍋を頭から被っていた

「フ…フフフフ…フ…食べ物を粗末にする者は……」

あ、詠春がキレてる

「どーした、来ねーのかあー、来ねーならこっちからいッ……」

詠春は大剣を投げたジャックを目掛け切り掛かり、大剣を真っ二つに斬る

「おほ」

「斬る」

詠春とジャックが戦い始めた

ナギside

「普段怒らん者ほど怒ると何をするか分からんぞ」

「アーツハツハツハツハア！！」

鍋の恨みイイイイ！！

魔法の射手・連弾・混沌の1000矢！！

「え、ちよつ、待て！」

待てつて！おい！止めるオ！

止めて、ギアアアアアアアア！！」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

「まだまだア！」

無銘流奥義 残影羅刹剣！！」

ザザザザザザザ！！

「「「（砌は絶対に怒らせないようにしよう！）」」」

ナギ・アル・ゼクトは心の底からそう思ったという

ナギsideout

その後、気絶していたジャックが起きると、ナギに勝負を挑み丸二日間戦い続けた

結果、ジャックは紅き翼に入る事になった

グレートブリッジ奪還作戦とタカミチの初恋と失恋

今日は原作でも有名なグレートブリッジ奪還作戦

「にしても多いねえ」

「敵もここを奪われる訳にはいかないんじゃろ」

「何にしても、俺ら紅き翼に敗北はねえな」

「それじゃあ、一番手は私が貰うよ」

ギル・ガ・ジル・ガン・グジル・ガ・ゼル

全ての神々よ 断罪せよ 粛清の光よ その力を持って 我に仇
名す全ての敵を滅ぼせ！

『ラグナロク神々の黄昏』！（広範囲拡散ver）

ドドドドドドド！

「よし、そんじゃ行くぜ野郎共！」

「「「「「おう（はい）！！」「」「」「」

「ハアアアアア！」

無銘流奥義 一刀両断 連撃！！」

私は、鬼神兵を次々に真つ二つにしていく

「慌てるな！」

敵は一人だ、困め！」

なるほど、確かに正解だよ
だけど、残念ながら私は普通じゃない

「万象一切灰燼と為せ、龍刃若火！」

ゴオオオオオ！

龍刃若火を鞘から引き抜いた瞬間、辺りが文字通り火の海になった

「ぐあああああ！」

グレート＝ブリッジ奪還作戦は成功した
あ、後ガトウとタカミチが仲間に加わった

ある日

「あの、砌さん！」

「ん？どうしたの、タカミチ」

「あ、あの…その…えっと…」

「僕、砌さんのことが好きなんです！」

「だから、付き合ってください！」

タカミチに告白された…
そんなに女っぽいのかなあ…？
でも、思ってみると確かにそうかも
私の容姿は黒の長髪を下の方で纏めてポニーテールにしており、紫
と紺のドットアイ
しかも細身で顔は中性的だし
……うん、十分女っぽいね
とりあえず誤解を解いておこう

「えーと…タカミチ」

「は、はい」

「じ、実は私…
男なんだよね…」

「……………」

「お、おい
タカミチー…」

「う…」

「う？」

「嘘だあああああ！……！！……？……？……？」

この日、タカミチの淡い初恋は終わった
その日から、タカミチは更に体術の特訓に集中し始めたそうだ

アリカ姫との顔合わせ

そして、ついにアリカ姫との顔合わせのイベントの日が来た

「なんだよガトウ

わざわざ本国首都まで呼び出して」

「会ってほしい人が居る
協力者だ」

「協力者？」

「そうだ。」

低い声の誰かが答える
その声の主は

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう

主賓はあちらのお方だ」

カッカッカッ

足音を響かせながら入ってくる白いローブを着た女性

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女様だ」

うーん、やっぱり大人Verのエヴァと似てると思うのは私だけ？

自己紹介しようとおもったら

「気安く話しかけるな下衆が」
って言われた（涙）

原作通りナギはアリカ姫に惚れたようだ
何かラカンにからかわれてた

どうやらアリカ姫は自ら調停役となって戦争を終わらせようとして
いたらしい

そこで私達は、独自に「完全なる世界」の調査を開始した
ジャックとナギは肉体労働組、それ以外は頭脳労働組だった

私とガトウは部屋の一室で、集めてきたファイルの整理・確認をし
ている

基本的に私とガトウは情報整理だ

「ガトウ、これを」

そんな中で私は重要な情報を見つけた

「な！まさか…こんな…」

ガチャ

「よお、どうした砌、ガトウ
そんな深刻な顔してよお」

私達が唸っているとラカンがプールから帰ってきた

「ああラカン

実は遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが…」

「ちょっと……いや、かなり信じたくない情報でね」

「ヤバいのか？」

「これがどうにも信じがたい内容でな
情報のソースは確かなんだが……」

「ただこのファイル通りだと奴らの行動も納得できる部分があるん
だよ

正直信じたくないけどね…」

「もつとはつきり言えやお前ら」

「これを見て」

「なっ！こいつは今の執政官じゃねーか！

メガロメセンブリアのナンバー2まで奴らの手先なのか!？」

あ、ジャックでも驚くん

「とにかく、これについては全員が集まってから話そう」

その時

ズン！

「なんだ!？」

「これは…」

ナギとアリカ姫が出かけている方向からだ」

ナギ side

「無事か姫さん」

「うむ」

姫さんと買い物してたらいきなり攻撃魔法が襲ってきた
もちろん姫さんには傷1つ付いていない
オレが守ったからな

「くそっこんなでけえ魔法街中で使いやがって
死人出てねえだろうな」

「やはり今のは…」

「十中八九奴らの手下だな
俺とあんたのどちらが狙いかわかんねえがな」
この威力だとあわよくば両方ともってどこか…

「ようやく尻尾出しやがった
追跡魔法かけてやったぜ
ぜってー逃がさねえ

姫さんは皆の所戻ってる
俺は奴らを追って本拠地ぶっ壊し…」

ガシッ

グイッ

「ぐえっ」

首が…

「……………私も行く」

「ああ？」

危ねえのに何言ってるやがる

「私をここに一人にしておくほうが危険だとわからぬのか愚か者が
それに私の魔法は役に立つぞ？
忘れたか鳥頭」

ふう、全くしゃーねーな

「いいぜ姫さん ついてきなー!!」

「……………で お前は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句、そ
の敵本拠地とやらを壊滅させて来たっていうのか!」

今、詠春から説教受けてる
他のやつらはガン無視してる
ここまで無視されるとムカつくな

「何のために秘密裏に調査してると思ってるんだ！」

「まあまあ、それ位にしておいたら？」

これで完全なる世界の戦力がまた少し減ったんだから」

そーそー

砌の言う通りだぜ

「だが、万が一殿下に怪我でも負わせたらどうする気だ！！」

「姫さんノリノリだったぜー？」

楽しかったーっつってたし」

「嘘をつけ！

どうせ貴様が……」

あゝうるせえ

本当だっつつの

詠春は真面目すぎんだよ

「詠春さーん」

おっタカミチにお師匠

「今あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリって…

確かに笑いましたよね？」

「うむ」

あれには驚いたのじゃ」

「あ、そう言えば」

なんかナギさんにお礼を伝えてって」

「な？そつだろ？」

「……っ」

オレの言った通りじゃねえか

「それに…ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

どうよこの執政官の会話映像

このあと姫さんは帝国第三皇女と接触しに行った

ナギsideout

英雄から犯罪者へ

今回はアーウェルンクスが変装したマクギル元老院議員に会いに行く所

「マクギル元老院議員」

「よく来たね 証拠品はオリジナルかね？」

「はい…法務官はまだいらっしやいませんか？」

「法務官は……来られぬことになった」

正確には来たところを殺されたってところかな

「あれから少し考えたのだがね…」

せっかくの勝ち戦をここにきて水を差すのもどつかと思っただね」

「つまり、この件からは手を引けと？」

「いや…私の意見ではない

そう考える者も多いと言っただ

時期が悪い

君達も無念だろうが今回は手を引いてだな…」

もういいかな？

私は投影した剣をマクギル元老院議員（アーウェルンクス）に投げ

「ブロークファンタズム
壊れた幻想！」

ドゴオン

「「な…」」

「砌よくやった

おら！」

ボンッ

「ちょーっ！？砌、ナギおまえらなにやってんだよ！」

「議員のこと燃やしてどうすんだ」

「違うよガトウ

こいつはマクギル元老院議員じゃない！」

「砌の言う通りだぜオッサン」

炎の中から現れたのは、のちのネギの宿敵となるフェイト・アーウエルンクス…

あれ？でもなんか三人目とか言ってたからどうなんだろう？

「…よくわかったね剣聖、千の呪文の男

こんなに簡単に見破られるとは…

もう少し研究が必要なようだ」

「残念だったね

マクギル元老院議員と君の僅かな魔力の違いまでは誤魔化せられない

それに、私の魔眼、写輪眼は偽物を見抜く」

まあてきとうだけどね

「なるほどね

少し君たちを侮っていたようだ

本物のマクギル元老院議員はメガロ湾の底だよ」

「てめえ」

ダンッ

「させませんよ」

ズバシャン

ナギが突っ込んでったけど炎を操る奴と水を操る奴に阻まれて戻ってきた

「強いぞ奴ら！」

「はっ！けど生身だ

政治家とかより万倍！やりやすいぜ！」

ラカンが剣を担ぎながら言うが……室内でそんな大きい剣ださない
でよ

「フッ」

あ、まずい

連絡される

「わ、儂だ！マクギルだ
「反逆者だ、救援を頼む！
うむ、暗殺されかけた
うおっ！」

スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ、夜刀
奴らは帝国のスパイだった
奴らの仲間もだ」

あーあ

これで私もこれで犯罪者になっちゃった

「げっ」

「やられたね」

「とにかくこいつら倒すぞ！」

原作どつり逃げられました

仕方なく海へ飛び込んで逃げ出した

「げほっげほ！」

「それにしてもタカミチ君達は無事かな？」

「にしてもさっきまで英雄で今や犯罪者か

いいね〜人生波瀾万丈こつでなくつちや」

「そんな呑気なこと言ってる場合じゃないでしょ」

「姫さんがやべえな」

結果、連合軍から追われる身となりました

姫様救出、そして最終決戦（前書き）

すみません

交錯する絶望と希望分かつ運命の裁断から天地乖離す開闢の星に書

スパイラル・フェイユアワリマカシユ

き換えました

申し訳ありませんでした

姫様救出、そして最終決戦

少し調べたら、アリカ王女とテオドラ皇女が捕まっているのは夜の迷宮だと言う事が分かった

私達は早速そこへ向かい、二人の救出の為に突入した
歯向かってくる敵を斬鉄剣や宝具で倒していく
あっという間に二人の牢屋まで辿り着いた

「よお、来たぜ、姫さん」

「遅いぞ我が騎士

私を暇死にさせたかったのか？」

「うつせーな。俺たちも逃げるのに忙しかったんだよ！」

「まあ、よい

さっさとここから連れ出せ

いつまでもこんな辛気くさい場所にいたくはない」

ふむ、アリカは無事みたいだ

もう一人のテオドラ皇女は牢屋の奥か

まだ子供だ

今は捕われて心細かっただろう、皇女を安心させないと

「テオドラ様

もう大丈夫です

さ、早く逃げますよ」

背を向けているテオドラ様に話しかける。

「む？」

「助けが来たのか？」

「ええ、だから逃げますよ」

「分かったのじゃ」

こうして私達はアリカ姫とテオドラ様を連れて、紅き翼の隠れ家に行き、ひとまず身を潜めることにした

「なんだ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！

どんなところかと思えば…掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ、このジャリはよ」

まあ、確かに逃亡者にそんな豪華な隠れ家を期待されても困る

「何だ貴様無礼であろう！」

「へっへ〜ん、こちとら生憎ヘラスの皇族には貸しはあっても借りはないんでね！」

「こらジャック！」

「じゃあ、後は頼んだぜー砌」

と言いながらどっか行つた

「はあ、全く…」

すみませんテオドラ様

ジャックはああいう奴なので」

「まあいい

ところでお主、何という名前じゃ？」

「夜刀砌と言います」

「何!？」

ではお主がああ光弓の破壊者か!？」

「はい、そう言われています」

「そ、それでは二つ名の由来の光の矢は?！」

「ああ、ラグナロク神々の黄昏ですね

撃てますよ」

「では今やってみるのじゃ」

いや、撃てって言われましても

「今そんなのを撃つたら、わざわざ敵に見つけて下さいと言ってる
ようなものですよ」

「むうー」

ナギside

「あのやけに元気な少女が…」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫と交渉の為出向いたところを一緒に敵組織に捕縛されていたのです。」

「さーて姫さん。助けてやったはいいけど、こつからは大変だ
連合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねえ。」

「恐れながら事実です、王女殿下
殿下のオスティアも似たような状況で…最新の調査ではオスティ
アの上層部が最も「黒い」…という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか…我が騎士よ。」

「だから！

その「我が騎士」って何だよ！姫さん！？
クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「じゃがもう連合の兵ではないのじゃろ？
ならばお主は最早私のものじゃ。」

「な…っ」

「連合に帝国…そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という
訳じゃな。」

「ま、そういうことだ」

「じゃが…主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

「「「っ！」「」」

そつだ、俺たち「紅き翼」は誰にも負けやしねえ！！

「世界全てが敵……」

良いではないか、こちらの兵はたったの8人

だが最強の8人じゃ

ならば……

我らが世界を救おう！

我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ！」

「やれやれ。相変わらずおつかねえ姫さんだぜ

いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう！」

そこから、俺達の猛反撃が始まった

ナギside out

砌side

そして映画なら三部作、単行本なら14巻分くらいはいくであろう
六ヶ月の死闘の後、ついに奴らの本拠地を突き止め追いつめる

そこは世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部、墓守り人の
宮殿

私達は帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備とタカミチやガトウ
等の連絡を待っていた

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

「油断してると、そのうち不意打ちされるかもよ」

「へっ、わーってるよ」

「大丈夫なのかな…」

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました」

「おう」

この頃のセラスはまだ若いね

「それでナギ殿、砌殿

もしよければ…その…

サインを貰え無いでしょうか…？」

「ああ、別にいいぜ」

「私も構わないよ」

「あ、ありがとうございますー！」

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだよ」

「ええ、彼らはもう始めています…」

世界を無に帰す儀式を

世界の鍵、黄昏の姫御子は今、彼等の手にあるのです」

「世界を無に……か

そんな事をしても意味無いのに」

「ああ」

「それじゃあ、少し数を減らしておこうかな

ラグナロク
神々の黄昏！」

最近無詠唱で本来の威力を出せるようになった

ズドオオオオオン

「よおし、行くぜ野郎共！」

「おう（はい）！」

セラズ side

紅き翼と帝国・連合・アリアドネーの混成部隊はこの戦争を操る真の敵、完全なる世界を倒す為に王都オスティア空中王宮最奥部、墓守り人の宮殿にやって来た
まず最初に驚いたのは敵の数。空中を飛びまるで1つの雲のように

なっている

「なんて数なの…」

そう呟いたのは誰にも聞こえてなかったみたいだと、とりあえずナギ殿に準備完了したことを伝えなくては

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました」

「おう」

いつも温和な雰囲気を纏っていると言われる砌殿から少し殺気が漏れている

アルビレオ殿曰くナギを超える最強だそうだ

「それじゃあ、少し数を減らしておこうかな」

確かに紅き翼のメンバーは皆最強と言ってもおかしくないだが、これだけの大軍勢にどこまで通用するのか…

「ラゲナロク神々の黄昏！」

砌殿の二つ名、光弓の破壊者の由来の魔法、ラゲナロク神々の黄昏

それを始めてみた私は啞然とした

何故なら、砌殿の手に集まった光が無数の矢となって敵に襲いかかったのだ

その矢の数は百、千、いや数え切れないほどの量だった

しかもその矢一つの威力も決して軽いものではない

そんな攻撃をいきなり食らったおかげで、敵の半分近くは消滅していた

「すごい……」

「よおし、行くぜ野郎共！」

ハッ！？

いけない

つい放心状態になってしまった

だがこの戦いは、なんとしても勝つ！！

セラス side out

詠春を前に置き楽々墓守り人の宮殿に進入した私達

外では混合部隊が激滅した敵を蹴散らしていることだろう

「酷いな

いきなり大技の連発かい？」

「生憎と、負ける訳にはいかないからね」

「それはこちらも同じだよ」

「ここでお前達をぶつつぶして終わらしてやるぞ

このサウザントマスターがな！」

ここからアーウェルンクスが引き連れていた奴らと各々一対一になった

しかしどうやら私ははハブられたらしい

敵の数は原作通りなので、誰かがあぶれるのだ

仕方が無いので、私は後ろから神々の黄昏ラグナロクで援護射撃をしていた

「その強力な魔法は君か」

「言った筈だよ？」

「負ける訳にはいかないよ」

いつの間にかナギがアーウェルンクスの首根っこ掴んでいる
確かここでライフメイカーの大きな一撃がくる筈

「ナギ！危ない！」

「なんだ？砌？……！？」

ナギの腹が貫かれた

「くそ！」

「来い、アヴァロン全て遠き理想郷！」

これは並行世界からの干渉すら防ぐ宝具
これで大丈夫な筈だ

ピキピキ

なっ！？

二発までは防いでいたのだが三発目でとうとう破られてしまった
紅き翼全員に奴の波動があたり吹っ飛ば
ジャックとかはもう腕が無い
詠春もナギを庇って重傷、アルとゼクトも大なり小なりの怪我を負
っていた

「までコラてめえ!!」

「任せなジャック」

ザンツ

「いけませんナギ!その身体では・・・」

「わしも行こう。他の奴らに比べて傷も浅いしの」

「アル、お前の残りの全魔力で俺の傷を直してくれ」

「しかし、そんな無茶な治癒では!」

「30分持てばいい」

「・・・分かりました」

そして文字通り、すっからかになるまでアルはナギを治療した

「よし、行かせ師匠」

「待て、私も行く」

「砌!」

「私もゼクトと同じく傷は浅い方だ」

「分かった。それじゃ行こうぜ!」

「」「」「おっ」「」

「待て、ナギ！ 奴はまずい！ ここは一旦退くべきだ！」

「珍しく弱気じゃねえか、ジャック

心配するな。俺たちを誰だと思っている？

無敵の『紅き翼』だぜ！ 負けるわけねえだろ！

じゃあな。ちよっくら片付けてすぐに戻る」

「ナギ。ジャックにはああ言ったけど、何か作戦でも？

あれは確かにアーウェルンクスとは次元が違う」

「作戦？ 別にねえ！」

ちよっとお気楽すぎるんじゃない？

「ま、なんとかなるだろ？」

「ま、それもそうか」

少し進み、私達の前にはラスボスのライフメイカーがたたずんでいる
そして奥にはクリスタルの中に捕われたアスナ

「俺が奴に千の雷を叩き込む

それまで時間稼ぎは頼むぜ」

「任せろ」

「分かった」

そしてナギは千の雷の詠唱を始める

「行くぞ、砌！」

「ああ！」

「ハアアアア！！」

燃える天空！！」

ゲイト・オブ・バヒロン
「王の財宝！！！」

ズガガガガガガガガガ！！

ドオオオオオン！

「まだだ！

エルキドゥ
天の鎖！！」

ジャラララララ

エルキドゥ
天の鎖がライフメイカーの動きを封じる

「何だこれは！？」

やはり思った通りライフメイカーは神性が高いようで、エルキトウ天の鎖を振りほどけずにいる

「ナギ！今じゃ！」

「おう！」

千の雷！！」

「駄目押しだあ！」

そういつて取りだすのは、かつて天と地を一撃で分けたと言われる
宝具

乖離剣エア

「ハアアアアアアア！……！！！！
エヌマ・エリシュ
天地乖離す開闢の星！！！」

その威力は王の財宝のバックアップを受け跳ね上がる
ゲート・オブ・バビロン

「おのれ……」

だが、これで世界が救われたと思うな
いずれお前達にはこれ以上の絶望を感じる時が必ず来る！
それまでの僅かな平和を精々楽しむがいい！」

そう言つてライフメイカーは消滅した

「はあああああ！」

ナギはアスナが閉じ込められているクリスタルを殴る

ピキピキ……パリーン！

クリスタルが碎け、アスナが助けられた

「終わったな……」

「ああ

さあ、帰るぞ」

「早く帰つてジャック達を安心させてあげなきゃね」

「そうじゃな」

こうして私達は、魔法世界の危機を救った

大戦編、完結

姫様救出、そして最終決戦（後書き）

ゼクトが消えるのはなんか納得できなかったのでもちよっとした原作
ブレイクしました

番外編 その1 (前書き)

ドラマCD「さらば愛しき紅き翼」の前半のストーリーです
時期はアリカとテオドラを助け出した日の夜のお話です

番外編 その1

アリカ姫とテオドラ姫を助けたその夜

「にしても、アリカ王女も俺達も本気で連合と帝国の両方を敵に回してしまっただな…」

「僕達に、勝ち目はあるんでしょうか？」

確かに、世界全てを敵に回しているから、そう思うのも無理は無いね

「へっ！」

勝ち目も何も、俺達紅き翼は無敵だろ！」

「フッフ

流石はナギですね

しかし、今度の戦いばかりは我々も苦戦を強いられるでしょう」

「何せ黒幕には、完全なる世界が控えてるからね

こうして穏やかな夜を過ごせるのも、これが最後かもしれないよ
「？」

「辛気臭えこと言ってるじゃねえよ！

…けど、お前ら

もし明日死ぬとしたら、最後に何してえんだ？」

「はあ？」

何言ってるんだお前」

「いやー、俺なら何するかなーと思ってな」

「……確かに、明日死ぬとしたら最後に何をしたいでしょう？」

「……………うん……………」

「という訳で！」

「もしも明日死ぬとしたら、最後に何をしたいですか？」
「コーナー！」

パフパフパフパフ
ドドドドドドドド

何か幻聴が…

「小学生かお前はっ！」

「というか、コーナーってなんだコーナーって」

「いいんだよ、楽しけりゃ！」

「んじゃ、まずは詠春からな」

「えっ？」

「さーて、もし明日死ぬとしたらお前は何しますか？」

「ハイ答えた！」

「ああ、ええと、そうだな」

「俺ならきつと、最後の瞬間まで剣の腕を磨いているだろうな」

「マジかよ〜」

「これだから生真面目剣士はよ……」

「つまらん男じゃのう」

「もう少しユーモアを持とうよ……」

「じゃ、じゃあお前らは何すんだよ!」

「アル、お前は？」

「そうですねえ、私なら……フフフフ……
……秘密です」

「って意味分かんねえ」

「というか気になる……」

「気になるね……」

「気になりますね……」

「というか砌、あなたも他人事ではありませんよ？」

「お、そうだ砌

お前だったら何がしたいんだ？」

「私、か……」

そうだな…

まあはつきり言ってもう一度死んじゃってるし

うん

やっぱり死んじゃったからなあ

「…家族に会いたい、かな」

「家族、ですか…」

「うん

私の家族は、父親が居て、母親が居て、妹が居たんだ」

「砌sideout」

「ナギside」

「お前だったら何がしたいんだ？」

砌は強えけどそれ以外の事はあまり知らねえよな

流石に詠春みたいな答えは止めるよな…

砌は暫く悩んだ末

「家族に会いたい、かな」

へっ、砌らしいな

「家族、ですか…」

「うん

私の家族は、父親が居て、母親が居て、妹が居たんだ」

「そうですね」

「砌の家族ですから、とても強かったのでは？」

「そこら辺の犯罪者には負けなかっただろうね」

「フフフ、そうですね」

「今はどちらに？」

「…日本だよ」

「そうですね」

「今でも会いたいですか？」

「そりゃあね」

「でも今ではもう会えないし…」

「そうですね」

「世界を敵に回した今、ゲートを使うことは難しいでしょうし」

「いや、居ないんだこの世界にも、旧世界にも」

「先に（私が）死んじゃったからね」

「……………」

「…」

「…」

「…」

「「「「「「「「………「「「「「「「「

何かしんみりした空気になっちまった…

「（おい！何か話題出せよ！）」

「（無茶言つな！）」

あんな話の後で明るい話が出るか！」

「（…気まずい）」

あ〜！

この空気苦手だぜ

くそっ！誰か話題を！何か明るい話題出せ！

「因みに俺は、ナギとどっちが強えか決着付けてえな

（これで繋げろ！）」

「（ナイスだジャック！）」

へっ、どうせ俺が勝つに決まってんだろ！」

〈ナギside out〉

〈砌side〉

「因みに俺は、ナギとどっちが強えか決着付けてえな」

「へっ、どうせ俺が勝つに決まってんだろ！」

「このガキイ！」

「だったら今すぐ決着付けるか!？」

「望む所だ!」

この二人が戦いだしたら辺りは焼け野原になるけど…それはまずい!

「ちょっと、ちょっと待って下さい!」

「ナイスタカミチ!

「?どうしたタカミチ?」

「その…ハッ! 因みに、ナギさんだったら何がしたいですか?」

「え?」

「そうじゃな

聞きたいのう」

「言い出しっぺは答えなきや」

「ほら、何すんだよナギ」

「ん、うん……」

「フッフ、言わずとも顔に書いてありますよ?

ズバリ、あなたは死ぬ前にアリカ王女とデートがしたいんですね?

……あの時の約束のように」

「な!?! テメーなんでその事を!

「つーかどこで聞いたんだよ!」

「ハハハハハハ!」

「やっぱお前、お姫様の事が好きなのか」

「ありやイイ女だからな」

「確かにあんなに筋の通った女性は滅多にいないからね」

「ナギにはあれ位が合ってるんじゃない?」

「普通はあんなにはつきりと言わないからね」

「ん?エヴァンジェリン?」

「いやあれは長年生きてるから」

「因みにナギは、姫と姫子ちゃんを連れて三人で京都に行くつもりらしいぞ?」

「そうそう……っってお師匠まで!」

「何で知ってたんだよ!」

「京都か……なるほど」

「それで俺に京都の見どころを色々聞いてたのか」

「お前がお寺に興味を持つなんて、おかしいとは思ってたんだ」

「ナギ、私達の耳が節穴だと思った大間違いですよ?」

「くっ……ち、ちげーよ!」

「俺はただ……」

「何だナギ?」

「いい訳か?」

「俺は姫さんも姫子ちゃんもずっとしか知らなくて、窮屈な生活を送ってっから…なんつーか……」

「偶には外の世界も見せてやりてえと思ったただけだ！」

「……………」

「愛、じゃのう……」

「そっだねえ」

「ええ、ナギさんって実は優しいんですねえ」

「るせー！」

「大人をからかうんじゃないわねえ！」

「このー！」

「あ、ちょ、ちよっと！」

「止めてくださいよナギさん！」

「やめて、ギブ！ギブ！」

「フフフ」

「まあでも、誘ってあげれば喜ぶと思いますよ？アリカ姫」

「えっ？」

「ホントに京都に来るなら、案内してやるぜ？」

「お、おう」

何だかんだ言って、優しいのはみんな同じだよね

「でもよ、万が一お前が死んだら、お姫様悲しむだろうな」

「…どうだかな」

あのあの気の強い女の事だ、涙一つ流さねえんじゃ……」

「いや、ああ見えて意外と泣いたり……」

「誰が気の強い女じゃと？」

「って、うおおおおおおおおい！！！！？？？？」

「噂をすれば……」

「アリカ姫のお出ました！」

「何てタイミング……」

「はあ……」

大体お主たちは何を下らぬ話をしておるのじゃ！
そんな暇があったら、少しは体を休めぬか！」

「て言うか、今の話聞いてたのか？」

「聞こえたのじゃ」

「聞いてたんだろっが！」

「聞こえてしまったのだと言っている！」

「きたねーぞ、盗み聞きは！」

「盗み聞きなどしておらぬ！」

「…また始まったのう」

「お二人は本当に仲良しですね」

「ハア、寝るか………」

「そうしましょう………」

「明日から大変だからね………」

アーティファクト（前書き）

今回は主人公が仮契約します

アーティファクト

あの最終決戦から数時間後、世界中はお祭り騒ぎだった

元老院はついこの間まで犯罪者扱いだったのに手の平返して世界を救った英雄扱い

まあ、元老院なんてそんなもんだからね

「砌！怪我は大丈夫なのか！？」

「ああ、テオドラ様

大丈夫ですよ」

「そうか、よかった

それと、様と敬語は使わんでよい」

「え？しかし…」

「よいと言っておるじゃろ！」

「ふう、分かったよテオドラ

これでいい？」

「う、うむ／＼／＼」

「ん？どうしたの？」

「な、なんでもない！／＼／＼／」

式典に出た際に古龍・龍樹が私を暫くじっと見た後、何か頭を下げてきた
周りには

「見る！あの龍樹が頭を下げたぞ！」

「まさか龍樹が格上と認める存在が出るとは…」

と、かなり驚いていた

今は立派な魔法使いとして働いて、テオドラの護衛という事で帝国の城でお世話になっている

「な、なあ砌…」

「何？」

「妾と…^{バクテイオー}仮契約するのじゃ！／／／／／／／／／」

「え、あ、ああ、うん

ちょっと待って

今魔法陣書くから」

「キスではないのか？／／／／／」

「キ、キスをするの？」

「(コクン) / / / /」

「で、主は…」

「勿論妾じゃ / / / /」

「わ、分かった / / / /」

チュッ

パアアア

「こ、これでお主は妾の従者じゃ / / / /」

「うん / / /」

あ、アーティファクトは何だろう？」

話をそらす私

主 テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

名前表記 ヨガタナ ミギリ

称号 全てを超越する剣士

色調 青紫色

徳性 深淵

方位 中央

星辰性 冥王星

アーティファクト 対極したる光闇の腕

「とにかく、出してみたらどうじゃ？」

「そうだね
アデアット」

すると、私の右腕が神々しい白いオーラ、左腕が禍々しい黒いオーラを纏った

「……ああ、なるほどね」

「何か分かったのか？」

「うん、これは凄い

私にぴったりのアーティファクトだよ」

「どづいう事じゃ？」

「これを纏った状態だと普通に身体能力が上がる

さらに、この状態で武器を持つと持った方の属性がその武器に追加される」

「？」

「つまり、どんな武器でも右腕で持てば聖剣、左腕で持てば魔剣になるってことだよ

持っている間だけだね」

「そ、それは凄いのう」

「しかも、この能力でなった聖剣を持つている間は色々な加護を受けられ、魔剣は斬りつけた相手に色々な呪いを与える」

「最早無敵じゃな……」

「あはは……」

とりあえず、この力を制御するために暫く別荘に引きこもるから」

「分かった」

そうして私は別荘で訓練に勤しんだ

アーティファクト（後書き）

ありがとうございました

アリカ姫救出

あれから数日（と言っても別荘内だから外ではまだ数時間しか経ってない）、アーティファクトの能力は完全に制御できるようになった
接近戦にも強くなるために武術もやった

今ならジャックと身体強化なしでも接近戦で勝てると思う

今はあらゆる武器を使いこなすために頑張っている

因みに中国の武器中心だ

何故かと言うと、元々力はあるので速さを鍛えようと思い、中国は連続で攻撃するものが多いからだ

そして外の時間で一年半ほど訓練して外に出た

そしたら、アリカ姫が捕まっていた

処刑まであと半年だそうだ

「ナギ、助けにいかなくてもいいのか!？」

詠春が吠える。

「……………」

しかし、ナギはなにも答えない。

「あと1年もないんですよ」

「わかってるよ、アル」

「わかってるってお前…」

「今はまだその時じゃない」

「「砌か（ですか）」」

ナギはこの意味がわかったようなのか目には決意が浮かんでいる

「今までどこいってたんじゃない？」

「すまない」

「少し特訓してたんだ」

「なあ、砌…」

「何？」

「正義つてのは一体何なんだろうな…」

「それは一概に決める事は出来ないよ」

「少しでも悪事を働いた者には罰を与えることも正義だし
どんな悪人にも手を差し伸べることも正義だ」

「そうか…」

「よく言うでしょ？」

正義の反対は悪とは限らないって」

「あまり気にし無さそうなあなたでもそんな事を言っんですね」

「まあね」

「今日は解散だ」

砌の言ったとおりだ

まだその時じゃない」

「ナギ！」

本当にお前はそれでいいのか！」

ナギはそれには答えずに出て行った

そして半年後

アリカ姫処刑の日

「そういえばナギは何処行ったんじゃ？」

「別の場所で待機してる
行こう」

「「「「おう（はい）」」」」

処刑場に着くと今にも戦争を始められそうなくらいの大軍隊がいた

「これより、重戦争犯罪人アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの処刑を開始する！」

ウオオオオオオオオオオ！！！！

そしてアリカ姫が落とされる

「よろ…「よおーっしこんなモンだろ」なっ！」

ラカン、早いよ

「撮れたか？撮ったな？ご苦労さん

お〜いおっさんこれ生中継じゃないよな？」

「ぶ、無礼者！

何者だ貴様！」

「録画はここで終わりだ

つまり、今から起こることは無かったことになる」

「き、貴様は！」

ガシャンっ！

筋肉だけで甲冑を内側から壊すって、ジャック…

「せ、千の刃のジャック・ラカン！」

ザシュッ！

「青山…詠春！」

フワリ！

「アルビレオ・イマ！」

ザッ！

「ガトウ…！」

スタツ

「フィリウス・ゼクト！」

次々と飛び出してきた紅き翼の面々に周りは驚いている。

ズシャツ！

「夜刀砌！」

私の登場にますます慌しくなる。

「紅き翼…では谷底の王女は…！」

バカな、いくら千の呪文の男でもあの谷からはとても！」

「それはどうかな？」

「魔法が使えないだけであいつが死ぬかよ！」

議員の疑問に私とラカンが答える。

「ぐ、反逆者だ！

捕らえよ！

谷底の二人も逃がすな！」

議員の命令で兵士が戦闘態勢にはいる。

「やるのか？いいのかその程度の戦力で？」

ラカンが挑発すると議員が反論してきた。

「ふっその程度だと？愚か者が

警備はここに見える数だけではないのだぞ

周囲数十キロ二個艦隊と精鋭三千名が包囲している
いくら貴様らだ、だからその程度でいいかって言ってるんだよ！」

なっ！」

「暴れるぞお前等！」

「「「「おっ！（ええ！）」「」「」

ラカンの号令で戦闘を開始するみんな

「ハアアアア！」

無銘流奥義 千錐！」

周囲に兵がいなくなったので俺は斬鉄剣を鞘に戻し、脱力する

「ふっ、ようやく諦めたか

者共、止めをさせ」

諦めた？違うね

「無銘流究極奥義 修羅乱絶剣！」

この奥義は両手に持った刀を音速と変わらない速度で周囲をやたら滅多ら斬りまくるので手が三対あるように見えるからこつこつという名前が付いた

ちなみに今使っている刀は中国刀の苗刀と言われるもの（詳しくはwikiで）

（砌、ナギが無事救出したので退却しますよ）

アルから念話が来た

（分かった）

ナギは無事アリカ姫を救出したようだ

私達紅き翼は、無事に退却した

詠春の故郷、京都

私達は今、詠春の故郷である旧世界の京都に来ている

「しかしいいところですね」

「落ち着くのう」

「おおー！すげえ眺めだ！お前等何してんだよ！さっさとこいよ！」

「ナ、ナギ、あの石ころが一杯あるところはなんだ？」

「ああ、アリカ様。あれは枯山水といって…」

「お前にはきいとらん！」

うわぁ、詠春ドンマイ

「詠春、まあ元気だして
ね？」

「うっつ、ありがとう」

「それにしてもチンケなところだなあ、もっと派手なのはないんか
い？」

「何を行ってるんじゃ

この物静かな所がいいんじゃろ」

「そうかあ〜？」

「あ、やっとアジトが見えてきた」

「なつかしいですねえ」

「ああなつかしい」

「詠春なんかフケたなお前
ハハツ」

「お前達のせいだ」

「ですつてよ、ナギ、ジャック」

「「なんで俺も？」」

「「自覚してないんだ…」」

「凄いやつつか何というか」

「姫子ちゃんも楽しそうだね」

「連れてきてよかったな」

「そうですね」

相手をしなくて楽ちんですね」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツツ！！！！！！！！！！」

「詠春・・・これなに？」

いやどうみてもスクナだけだね
詠春の家で飯を食べた後に詠春の部下？が走り込んできて「鬼神の封印が！」ってきたから来たんだけど、この面子（私、ナギ、ラカ
ン、詠春、アル、ゼクト、ガトウ）だと単なるリンチにしかならな
い気がする

「あれは『リヨウメンスクナノカミ』と言って千六百年前に封印さ
れた飛騨の大鬼神だ」

「で？なんで復活してんだ？」

「恐らくは単に封印が限界を超えたんじゃないやろ？
封印したのは千六百年も前なんじゃし」

まあ、それだけ封印してたんだから封印した術者は優秀だったんだ
ろっな

「で、どうする？」

「俺はやるぜ」

「俺もだ」

「私も」

「私は必要なさそうなので見学で」

「儂もじゃ」

「俺も見学でいい」

「俺は封印の準備するよ」

上からナギ、ラカン、私、アル、ゼクト、ガトウ、詠春だ

「いや、ここはじゃんけんで決めない？」

「お、いいぜ」

「へっ、負けねーぞ！」

「じゃあ行くよ…」

「「「じゃんけんぽん！」」」

私
パー

ナギ・ラカン　グー

「私の勝ちだね」

「負けたあ！」

「チクシヨー！」

「それじゃあ、行ってくる」

私はスクナの前に立つ

「封印が解けたタイミングが悪かったね

こんな最強集団が集まってる日に解けるなんて

悪いけど、新しい魔法の実験台になってもらうよ

写輪眼！」

ぶつつけ本番だけど、神々の黄昏ラゲナロクと同じ原理だから大丈夫でしょ

「ギル・ガ・ジル・ガン・グジル・ガ・ゼル

邪悪なる神々よ　横暴と妄想の正義を砕き　その深淵なる闇を

偽善者共に刻み込め

この世全ての悪（アンリ・マユ）！」

私の手に黒い波動が集まり嵐が吹き荒ぶ

その黒い波動を集束して黒い光線をスクナに当てる

…原作のスクナイイベントが無くなる事はないよね
スクナは無事封印された

次の日

「これで紅き翼は一時解散だな」

「最後にみんな写真撮ろうぜ」

「なあ、この写真はみんなで持っておこうぜ」

「なるほど、仲間の証じゃな」

「そうそう」

「まあ、紅き翼の写真位はここに飾って置いてもいいんじゃない？」

「そうですね」

「そういや、この後お前らはどうすんだ？」

「俺とアリカはここに残るぜ」

とナギ

「なんだあ〜？」

早速新婚旅行かあ〜？」

「なっ！？」

バツバカヤロー！

そんなんじゃないよー！」

ラカンにからかわれてた

「アルは？」

「私はどこかで隠居でもしますよ」

「ゼクトは？」

「俺も隠居じゃな

ただし、旧世界は性に合わんから魔法世界でじゃな」

「そうなんだ」

「俺は魔法世界で旅でもするさ」

とラカン

「ガトウは…働くの？」

「ああ、暫くは立派な魔法使いとして働くつもりだ
砌はどうするんだ？」

「私は旧世界の観光でもするよ」

「そうか」

「そう言えば、タカミチはどうするの？」

「僕はガトウさんと一緒に行きます」

「そっか」

「頑張つてね」

「はい！」

「アスナはガトウ達と？」

「ああ、連れて行くつもりだ」

「ふうん」

「それじゃ、そろそろ行こうか」

「おう」

「じゃあな！」

こうして私達紅き翼は解散し、それぞれが別の道を歩み始めた

エヴァンジェリンとの顔合わせ

紅き翼が解散した後、私は旧世界を放浪していた
今日は近くに宿屋が無いので野宿という事になる
暫く木の上で寝ていると誰かが近付いてくる気配がしたので注意し
ていると

何と近くの崖に落ちた

「ええ！？

何で落ちるの！？」

私は急いで鎖付きクナイで助け出す

（モデルはハヤテのごとくに出てくる鷺ノ宮伊澄の曾祖母の鷺ノ宮
銀華のような感じ）

「ふう、危なかったね」

どうやら見た感じは少女のようだ

「おい、何故私を助けた？」

「こらこら、女の子がそんな威圧的な態度で喋っちゃダメでしょ」

「誰が女の子だ！

貴様、私が闇の福音であると知っているのか！」

「嘘お！？

君がエヴァンジェリン！？」

「そうだ」

私があのでヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「賞金600万ドルの吸血鬼か…」

「そうだ」

「ふうん」

「こういふときには、成敗してくれる！とか言った方がいいのかな？」

「貴様は私が怖くないのか？」

「幾ら吸血鬼の真祖と言っても所詮は十歳の女の子だからね」

「貴様、名前は？」

「私は夜刀砌」

「な！？」

貴様があの剣聖だと！」

「うん」

「そうだけど」

「くっ」

「ああ、安心して

別に捕まえたりとかしないから

別に立派な魔法使いだってなりたくてなったものじゃないしね」

「ふん

そんなの信用できるか！

行くぞチャチャゼロ！

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

「はいはい

ラックナロク
神々の黄昏（威力最小）」

ドゴオン

「くっ

やはりその実力は本物と言う事か」

「悪いけどこれで終わりだ

卍解、天鎖斬月」

「な、なんだその姿は

それに魔力量も尋常じゃないぞ」

「まあ、私は普通じゃないからね

月牙天衝」

ズドオオン

どうやらエヴァンジェリンは気絶したようだ
近くにナギいるかな

（もしもしナギ？）

(ん？何だ砌)

(今私の目の前で闇の福音が気絶してるんだけど見に来る？)

(マジか！？)

(今から行くぜ！)

よし、これで押しつけは完了
旅に付き纏われても困るしね

木乃香、刹那との顔合わせと悪魔強襲

今私は京都の詠春の下に来ている

「いやー、久しぶりだね詠春」

「ええ、久しぶりですね」

詠春にはいま五歳の子供

つまり近衛木乃香だ

「遅れたけど

子ども生まれたんだってね

おめでとう」

「ははは

ありがとうございます

実はその事で頼みがあるんですが」

「何？」

「木乃香の遊び相手になってもらえませんか？」

「でも年の差が…」

「それでも構いません

今木乃香の遊び相手は刹那君しかいないのです」

「なるほどね

最近分かった事なんだけど私は肉体年齢を変えられるようなんだ」

「それでは！」

「木乃香ちゃんと同じ肉体年齢にして遊ぶよ」

「ありがとうございます」

後、木乃香には魔法のことは内緒にしてもらいたいです」

やっぱり

「でも見た感じ

明らかにナギよりも魔力量多いよね？」

「はい

無茶は承知の事です」

「はあ

分かったよ」

「助かります」

「木乃香、こっちへ来なさい」

「ほえ？

なあに？お父様」

「今日からこのしばらくこの家で預かる事になった夜刀砌君だ
仲良くしなさい」

「夜刀砌です」

「はじめまして」

「うちは木乃香っていうんよ
このちゃんって呼んでな
みぎちゃん」

「うん」

「よろしくね木乃香ちゃん」

「むう」

「このちゃんってよんでな」

「いや…あの…」

「いらいら、あまり夜刀君を困らせてはいけないよ」

「ぶう」

「あはは」

「あ、剎那もよろしくね」

「さし」

それから木乃香と刹那と私の三人で遊ぶのが普通になった

今日は何故か詠春に呼ばれている
なんだろう？

「詠春、何？」

「ああ、来ましたか
いや、暫く実践をしていないので剣の腕が鈍くなっていると思っ
ましてね

そこであなたに相手をお願いしたいのです」

「神鳴流の剣士じゃ駄目なの？」

「神鳴流の剣士だと私が関西呪術協会の長ということだ……」

「ああ、なるほど
遠慮がちになると」

「ええ、だから盟友であるあなたなら私に遠慮することなくやって
くれると思ひまして」
「分かった
なら早速始めよう」

「久々に腕がなりますね」

そして剣道場に移動する

「手加減無しですよ」

「そつちこそ」

私は大人Verに戻って鞘付きの木刀を二本使って二刀流の構えをとる

詠春は神鳴流の構えをとる

「それでは、近衛詠春対夜刀砌の試合を始めます

互いに、礼！」

「よろしくおねがいます」

「それでは…初め！」

「はああああ！」

ダン

合図と共に詠春に斬りかかる

それを詠春は受け流す

しかし私は二刀流であることをいかし連続して追撃する

私は自分を回転させて何度も斬りつける

流石に詠春は辛くなってきたのか苦しい表情をするようになる

そして

ガタン

詠春が木刀を落とした

恐らく手が痺れたんだろう

「そこまで！」

この試合、夜刀砌の勝ち

お互いに、礼！」

「「ありがとうございます」

「やっぱり鈍くなったね」

「そうですね…」

「まあ、年には勝てないからね」

「長！大変です！」

「どうしましたか？」

「今桜咲が来て、お嬢様が川に落ちたそうです！」

クソッ！

あのイベントは今日だったか！

詠春は

「木乃香あああああ！……！」

衰えを感じさせないほど速く走っていた

「詠春、私は先に行く」

「木乃香を頼みます！」

「木乃香！」

「今助けるから！」

「じぼっ、み、みぎちゃん」

木乃香は無事助け出した

「大丈夫？」

「うん、大丈夫や

「ありがとうなあ、みぎちゃん」

「このちゃん！」

「どうしたん？せつちゃん」

「うち、もっと強くなるから

「このちゃんを守るくらい強くなるから」

「せつちゃん…」

ああ

原作通りの関係になっちゃったよ
ハア、まあなっちゃったものはしょうがない

「みぎちゃんもう行っちゃうん？」

「うん、

そろそろ家に帰らないといけないから

刹那も元気だね」

「はい」

私は京都を後にした

その後、魔法世界のテオドラの下で暫くお世話になってから魔法世界の旅に出た

その時の格好はナルトに出てくるうちはマダラの格好そのまま
お面には認識障害魔法をかけてあるので自分が夜刀砌だとバレる事は無い

ちなみにこの頃、ナギが死んだと正式発表された

まあ、ナギなら間違いないで死んでないだろうけど

魔法世界を旅している途中、ジャックとゼクトにあった

ジャックは拳闘士として現役で活躍しているようでその人気は凄かった

ゼクトは砂漠にあるオアシスでのんびり暮らしていた
と言っても、久しぶりに戦ってみたが衰えは感じられなかった

ゲートを通って旧世界に帰ってきた直後に近くから大量の悪魔の気配が感じられた
そうか、ネギの村が悪魔に襲われるところか

悪魔を倒しているとナギがいた

「ナギ！」

「誰だ！？」

「砌だ」

「嘘だろ！」

「いやほんとだから」

私はお面を取る

「ああ、すまねえ」

「いや、構わない

それにしても、この量は異常だよ

そういえば、ナギの息子のネギ君は大丈夫なの？」

「ああ、それだったら心配ねえ」

そう話している内に、悪魔たちは全滅したようだ

「じゃあ私はもう行くよ」

「おう、助かったぜ」

「構わないよ」

「じゃあね」

「おう」

もうすぐ原作始まるなあ〜

麻帆良学園来日

私は今麻帆良に来ている

「ふおっふおっふおっ

よく来たの夜刀君」

「いえ

私もここに用がありますから」

「いやはや

夜刀君が来るとなれば、ここの者たちも指揮が上がるじゃろって
それで、仕事の件なんじゃが…」

「ええ

警護の件ですよ

心配せずとも、ちゃんと働きますよ」

「助かる

なにぶん前から人員不足が問題になっておっつての」

「まあ、これだけ広い土地ですからね

大変でしょう」

「うむ

それでなんじゃが

夜刀君にはここの生徒として麻帆良に通ってもらっつ」

「……女子中等部に、ではないですよね？」

「ふおっふおっふおっ

なあに、共学化のテストケースとして入れれば問題なからう」

「権力乱用ですね」

「権力とは使うためにあるのじゃよ」

「そうですか…」

では月給と住居ですけど…」

「ふおっ!?!」

「当然でしょう?」

私だって人ですからね

まさかタダ働きさせていいように使える駒とでも思っていましたか?

ソナニアマクナイデスヨ?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!」

「い、いや待つんじゃ夜刀君!

月給は200万円で女子寮で暮らしてもらおう!」

「はあ、分かりました

それで構いませんよ」

「ふう

では、一学期から通ってもらおう

それと今夜十二時に世界樹前の広場に来てくれんか」

「顔合わせですか？」

「まあ、そういうもんじゃ」

「分かりました」

そして今はエヴァンジェリン邸を訪れている

「すみませ〜ん

エヴァンジェリンさんはいますか〜？」

「マスターに何か御用でしょうか？」

お、茶々丸だ

「ああ、夜刀砌が来たと言ってもらえるかな？」

「夜刀砌

まほネットで検索……………」

紅き翼の最強格として有名であり、二つ名は「剣聖」「光弓の破壊者」

その剣術は近衛詠春を凌ぎ、その他の戦闘能力・魔力・気においても紅き翼最強と言われる

その夜刀砌様で間違いないですか？」

「あ、ああ」

「お入りください

マスターには夜刀様が来たら家に入れるように言われていますの

で

「じゃあ、遠慮無くお邪魔するよ」

「ぶっぞ」

そして…

「おい剣聖！

今すぐこの呪いを解け！

今すぐだ！」

「呪い？」

「惚けるな！

十五年前千の呪文の男がサウザンドマスターかけた呪いだ！」

「いや聞いてないんだけど」

「は？」

「はあ、ナギの奴…

あゝ、ちよっと待って

今解くから

写輪眼！」

うわ…

ひどいなこれは

術式も何もあつたもんじゃない

力づくで無理矢理縛りつけてるようなもんだよ

え〜と…ここをこうして…これをこれに変えて…こんなもんかな？

「どつ？」

「おお！

魔力が戻っている！

感謝するぞ剣聖、いや砌！」

「どういたしまして

そうそう、一学期から生徒として女子中等部に編入することになったから

後警護にも雇われた」

「お前が生徒か」

「うん

まあ、訳ありの生徒が殆どの2・Aにだらうね」

「恐らくな」

「じゃあそろそろ行くよ」

「ああ」

そして私はファミレスで軽い夕飯を食べて午前12時に世界樹前の広場に向かう

暁の装束を着て渦巻状で右方に目の部分に穴が開いたお面を被った…

うちはマダラの格好で

午前12時

「学園長、どうしたんです？こんな時間に集めて何か事件でも？」

「いや、今日から新しい人材が来てくれた
しかも立派な魔法使い（マギステル・マギ）じゃ」

「「「「「おお！」「」「」

「で、本人は？」

「もうすぐ来るはずじゃ」

「お待たせしました」

「…学園長、この人が？」

「う、うむ」

結構困惑してるな
そろそろお面外すか

「いや、すみません
ちよっとふざけてしまって」

そしてお面を外す

「今日から皆さんと一緒に麻帆良学園の警護をする事になりました
夜刀砌と言います」

「嘘だろ……」「あの剣聖が!？」「本物……?」「あれが無銘流の……」
といった声が多数聞こえる
「とうか最後言った人!」
刹那か!
何で無銘流知ってんの!?

「ふおっふおっふおっ
それでは、夜刀君にはタカミチ君と勝負してもらおう
諸君も英雄の戦いを見たいじゃろ」

「お久しぶりですね砌さん」

「うん
………なんか老けたね」

「言わないで下さい」

「うん
そろそろ始めようか」

「はい」

「それでは……始め!」

「最初から本気でいきますよ」

左手に気、右手に魔力、合成!!」

「写輪眼!!」

最初から咸卦法を使ってくる

それに答えて私は写輪眼を発動する

タタタタタタ!

タカミチがいきなり居合い拳を連続で繰り出してくる
それを私は紙一重で全て避ける

「その目を使ってくれるってことは、少しは僕を認めてくれたって
ことですか?」

「ああ、強くなったね

タカミチ」

「ええ、でもまだあなた達にはまだ追いつかない

豪殺 居合い拳!!」

ドオオン!!

「そりゃあ、そんな簡単に追いつかれちゃたまらないよ
でも、私も少し本気を出そう

無銘流……」

「無銘流って武器無しでも出来るんですか!?!」

「無銘流も神鳴流と同じく武器を選ばないからね
斬波！」

私は手刀で真空刃を起こしタカミチに向けて放つ

ドオン！

「ははは

手刀で真空刃を起こすなんて」

「真剣でやればもっと威力は上がるよ

まあ、斬鉄剣並の刀で無いといけないけどね」

「それでは第二ラウンドと行きましょう」

「ククク

ならちやんとした格闘技でやらせてもらおうよ

しかもかなり珍しい格闘技だね」

そして、両腕を顔の前に出して顔を守るようにする

「見たこと無い構えですね」

「うん

このサバットだけだよ

運動靴を履いていることを前提とした格闘技なんて」

ダダダダダダダダ！

あらゆる角度から居合い拳と同じくらいの速さでタカミチに蹴りを

繰り出す

思った通りタカミチは居合い拳で応戦する
拳と蹴りが目にも止まらぬ速さで繰り出される
そして…

ドオン！

タカミチに蹴りの一発が当たる
その一撃でタカミチは体勢を崩し、防御し切れなくなる
その後はもうタコ殴りならぬタコ蹴りだ

「はあ…はあ…

もう…無理…です…」

「ははは

お疲れ

もう終りでいいですよね学園長」

「うむ

とても高次元の戦いを見せて貰った」

パチパチパチパチ

「では、今日はこれで解散とする」

その後、私はエヴァの家で寝た
まだ正式に生徒じゃないのに寮で寝るのは拙いでしょ
何かエヴァが

「私の家に来い

歓迎しよう」

と言ってきたのでお言葉に甘えさせてもらう事にした
その際にエヴァと呼べと言われたのでそう呼んでいる

麻帆良学園初日、終了

エヴァとの勝負

次の日の早朝

「そろそろ来るころかな…」

「誰がだ？」

「刹那だよ」

「ああ、桜咲刹那か
だが何故だ？」

「恐らく無銘流を教えてほしいって理由で師事してくるだろうね」

「あの娘は真面目だからな」

カラン

「すみません」

「砌は居ますか！」

「ほら来た」

「夜刀様ならいらっしやいます
どうぞ」

「砌、お願いします！
私に無銘流を教えてください！」

「断る」

「え？」

「だから断る」

「何故ですか！」

「私は今の刹那を弟子にするつもりは無いよ」

「そんな…」

「諦めるんだ」

「お願いします！」

「はあ、しつこいよ」

「パアア」

「て、転移魔法！？」

「待って下さい！」

「砌！」

「シュン」

「ふおっ！？」

「なんじゃ！？」

「ああ、すいません学園長
勝手に邪魔してしまい」

「いや構わん
しかし何があつたんじゃ？」

「刹那に無銘流を教えてくださいとせがまれましたね
転移魔法で逃げてきたんです」

「ふむ、理由は分かった
しかしなぜ教えることを拒んだんじゃ？」

「今の刹那は大事なことが分かつて無い
それに後ろめたいと思つている事もあります
精神状態は太刀筋に大きく影響します
今の刹那は無銘流はおるか弟子にするつもりもありません」

「…気付いておつたのか」

「ええ、一目で分かりましたよ」

「そうか…」

「それにしても、一ヶ月後ですか
ナギの息子が来るのは」

「ふおっふおっふおっ
やはり知つておつたか

君の言う通り、一ヶ月後にネギ・スプリングフィールド君がここに修行として来る」

「成績はどうなんですか？」

「ふむ」

「どうやら魔法学校を首席で卒業できる程の成績だそうじゃ」

「あのナギの息子がね…」

「どうやったたらそんな秀才が生まれてくるんだか」

「ふおっふおっふおっ」

「まあ突然変異と言っ奴じゃろ」

「それを言うなら、学園長の後頭部は正に人類の神秘ですよ」

「ねえ、儂じゃって傷付くんじゃよ」

「そうなんですか」

「初めて知りました」

「ひどい…」

「まあ、一ヶ月後にはネギ君と会っんですから」

「その時の第一印象ですね」

「そうじゃのう」

立ち直り早いな学園長

「ああ、因みに私は英雄の息子としてではなく」

「まだ魔法学校を卒業したばかりのひよっことしてみますから」

それじゃ
「

シュン

「ただいま」

刹那はもう帰った？」

「ああ、暫く前に帰ったよ

あの様子だと、お前に弟子入りすることは諦めていないだろうな」

「くくく」

そうでなければ困る」

「どづいつことだ？」

「いずれ分かるよ」

「ふん

そづいつ事にしておいてやる

そづだ、一回勝負でもしないか？」

「どづしたのいきなり」

「ふん

前回はお前との決着が付いていないからな」

「いやあれは私の勝ちじゃ」「うるさい！」「はい……」

「ちっさと行くぞー！」

「何処に？」

「私の別荘だ」

「ああ、なるほど」

そして別荘内

「さあ、始めるぞ！

リック・ラク・ラ・ラック・ライラック…」

「え！？ちよつ！いきなり！」

「氷の精霊482柱！魔法の射手・連弾・氷の482矢！」

「つく！」

魔法の射手・連弾・炎の482矢」

ドガガガガガガガガ！

「（つく、無詠唱でこの威力か！

全盛期の私でも押し切れないだと！？」

「（うわあ

意外と何とかなるんだ

…仕掛けるかな）

来い！真名解放！

フリユーナク
轟く五星！」

私は王の財宝から轟く五星を取り出しそれを投げる

ドオオオオン！

轟く五星は周囲の魔法の射手を吹き飛ばす

「これで詰みだ」

私はエヴァに無毀なる湖光を突き付ける

「…降参だ」

こうして、私とエヴァの勝負は終わった

「とうとうか何なんだあの槍は！」

「ああ、轟く五星の事？」

「ぶ、轟く五星だと！？」

それはケルト神話の主神ルーが持つ五つの鍔を持った投擲槍だろ！
何故お前が持っているんだ！」

「言つて無かつたけ？」

私は神話や伝説に出てくる武器や防具を全て使えるんだ
ゲイト・オブ・バビロン
王の財宝」

ゴオオオオオ

「これに入れてあるんだよ

因みに食糧とかも入れられるし、腐らないから便利なんだ」

「とことん規格外だなお前は……」

「……うん

自覚はしてる」

私も規格外だとは思ってるんだよ

「そういえば、この前私の呪いを解いたときに使ったあの眼は何だ？

見た目は魔眼のようだが」

「うーん

まあ魔眼と言えば魔眼なんだよ

しかもあの眼が派生したのもあつてね

先ずあの眼は写輪眼といって、全ての動き・幻術・魔法を見切り、見た者の動きをコピーして自分のものになるんだ

これは第一形態で動体視力と洞察力がかなり高くなるだけなんだけど

その第二形態に万華鏡写輪眼がある

万華鏡写輪眼の状態でしか使えない技もあるんだ

月詠という技は見た相手を強制的に精神世界に引きずり込む」

「そんなに凄くないじゃないか」

「でも唯の精神世界じゃない

時間や空間、質量などあらゆる物理的要因を支配する自らの精神

世界なんだ」

「なっ!?!」

「まあ、こんなところかな」

「…まだあるのだろう」

「うん」

でも今日はこれだけにするよ」

「そうか」

だが絶対いつか全部喋れよ」

「分かってるって」

そんなこんなで一か月が過ぎた

原作開始

私は今、学園長室でネギが来るのを待っている

窓の外を覗いてみると、明日菜がネギに何か言ってる事が分かる
ああ、明日菜に失恋の相が出てるって言ったんだっけ

「彼がネギ・スプリングフィールド君ですか…」

「ええ、じゃあ僕は迎えに行ってきますね」

「ああそうだ

タカミチ」

「何ですか？」

「ここでは私とタカミチは生徒と教師なんだから

敬語じゃない方がいいよ

分かりましたか？高畑先生」

「あ、ああ

分かったよ夜刀君」

そう言っただけタカミチは出て行った

「にしてもネギ君、初対面の相手に失恋の相が出てる、なんて…
成績以前に、人としてどうなんでしょうか」

「ふおっふおっふおっ

まあ、彼はまだ子供じゃ

大目に見てあげなさい」

「はあ…」

「そうやって甘やかしていると、将来はメガロセンブリアの大好きな立派な魔法使いが出来あがっちゃいますよ」

「ああ、それと学園長」

「エヴァの登校地獄の呪い解きましたから」

「ふお！？」

「構わないでしょう」

「本人は卒業するまでここに居るみたいですから」

「そうか」

「まあ元々の約束が三年だったのが十五年にまで延びたのじゃ今更何も言わんよ」

「助かります」

「コッコッコッコッコ」

「…来たようですね」

「そのようじゃな」

「ちょっと学園長先生！」

「このガキンチョが担任って本当なの！？」

「アスナ落ち着こつちゃ〜」

「八八八」

「（タカミチ、笑って無いで何とかしなさい）」

「（まあまあ）」

「ちょっと学園長！高畑先生どうなるのよ！なんでこの糞餓鬼が担任なの！？」

「紹介しよう今日から2・Aの担任になるネギ・スプリングフィールド君じゃ」

「ちなみに高畑先生には担任を辞めて貰う」

「初めまして」

「ウェールズから来ましたネギ・スプリングフィールドと言います」

「それでは、アスナ君と木乃香は教室に戻ってくれんか」

「ちよつと！学園長！」

「ほら行きますよ神楽坂さん」

ボタン

明日菜はしずな先生に連れて行かれた

「…どつじやつた夜刀君？」

「魔法世界では真っ先に殺されますね」

「きつい評価じゃの」

「彼は魔法学校を首席で卒業していい気になっていきますからね
真面目なのはいい事ですがそれ故に一人で解決しようとするでし
よう

しかもあの表情から見て自分は何でも出来るなんて思っているで
しょうし

だから、失敗や何かをすると呆気無く潰れます」

「酷い言い草じゃの」

「当然です

彼は自分の持っている魔法と言う力を自覚するべきだ」

本当にこの頃のネギは好きになれなかった

魔法は隠遁すべきものと言っておきながら普通に使っていたし

暫くは少し不愛想になってしまいかもしれないけど、我慢してくれ
よ、ネギ君

「ふおっふおっふおっ

そろそろ2 - Aの教室に向かってくれ」

「分かりました」

2 - Aの教室に着くと、ネギがクラスの生徒達にもみくちやにされ
ていた

「高畑先生」

「ああ、来たか」

「はい」

でも…これじゃあ自己紹介できませんね」

「はあ、仕方がないな

皆！静かに！

今日からここに入る事になった編入生もいるぞ」

「夜刀砌です

よろしくお願いします」

「彼は今日から共学化のテストケースとしてこの2・Aに編入して
きた

皆仲良くするように」

「……………」

「か？」

「……………」

「おわあー！」

「ねえねえ！

何で髪伸ばしてるの？」

「本当に男？」

「はいはい、みんなで質問したら困るでしょう？
私、麻帆良報道部の朝倉和美にお任せを」

「よろしく」

「最初に名前と身長、体重を」

「苗字は夜に刀と書いて夜刀

名前は石偏に切ると書いて砌

身長は157？、体重は秘密で」

「男って言ってるけど本当？

本当なら何で髪伸ばしてるの？」

「男って言うのは本当

髪を伸ばしているのは…特に理由は無いよ」

「そうなんだ」

「じゃあ特技と趣味は？」

「特技は武術

趣味はその鍛錬かな」

「どんな武術やってるの？」

「サバットて言う蹴りを重視した武術だよ」

「じゃ最後の質問、このクラスで好みのタイプは！？」

「エヴァンジェリンさんと木乃香と刹那と龍宮さんかな」

「なんで桜咲さんと木乃香は下の名前で呼んでるの!?!?」

「まあ、幼馴染だからね」

「そうなんだ」

「あ、そうそう、学園長が男子寮は空きが無いから女子寮に住んでくれて言ってたからよろしく

それよりネギ先生

授業はいいんですか?」

「あ! そうだ!

それでは皆さん、席に着いて下さい
授業を始めます

夜刀さんはエヴァンジェリンさんの隣に座ってください」

「それじゃあネギ君、後は頼んだよ」

「はい

ありがとうございます」

そして授業に入ったのだが…

「と、届かない」

「ネギ先生、これをお使いく下さい
よければ支えて差し上げましょうか?」

「あ、有り難うございます

大丈夫です」

「…エヴァ、どう思う…」

「どうも何も期待外れにもほどがある」

「だろうね」

私も最初見たときには正直落胆したかな」

キーンコーンカーンコーン

「起立、気を付け、礼」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「みぎちゃん！」

「ん？」

ああ、木乃香か」

「やっぱり覚えててくれたんやな」

「まあ記憶力はいい方だからね」

「それにしても綺麗になつたな
モデルさんみたいや」

「一応私も男なんだけどな…」

「でもみぎちゃん声高くて髪長いし
スタイルもいいからホントに女の子見たいやで?」

「あはは…」

「あ、せや!

この後歓迎会するんよ
みぎちゃんも行こ!」

「うん」

そして教室前に着くと丁度向こう側からネギ君と明日菜がやって来た

ガラ

パンパンパン!

「……………ネギ先生!夜刀君!

ようこそ2 - Aへ!」……………」

ああ、歓迎会か

そう言えばそんなのもあったな

「夜刀君」

「あ、高畑先生」

「どうだい?2 - Aのクラスは」

「そうですね…」

私は静かに認識障害魔法を発動する

「関係者を集めたのがバレバレだよ」

「やはりそうか」

「だって、

東洋一の魔力量の木乃香

魔法無効化能力の明日菜

鳥人族の忌み子の刹那

魔眼持ちの龍宮

甲賀中忍の長瀬

真祖のエヴァ

が同じクラスなんだよ？

更に英雄の息子、ネギ・スプリングフィールド

普通は違和感を覚えるよ

まあ、クラスの中には自分が浮いてるんじゃないかって思ってる子もいるけどね」

「学園長の意向だよ」

「そんなところだろうと思ったよ」

そして認識障害魔法を解除する

「まあ、良いクラスだとは思っよ？」

そうやって私は誰にも気付かれずに教室を出る
が…

「おい、何処へ行く？」

エヴァに気付かれてた

「ああいう大人数がいるところは苦手だね
それに製作途中の物もあるし」

「製作途中？」

「うん

まあ操り人形ってところかな」

「ほう、操り人形か…」

「ああ

もうすぐ完成するんだ

私の最初で最高の傑作だよ

じゃあね」

そういつて自分の部屋に帰る

…なんか今の台詞、マッドサイエンティストみたいだったな…

「よし、完成」

そして完成したのが傀儡人形

三代目風影と四代目火影

結構疲れたよ

なんたつて三代目風影はチャクラは無いから魔力を磁力に変える術式を組まなくちゃならなかったし
更に砂鉄を大量に入れるスペースも作った
四代目火影は飛雷神の術の術式だし
特製のクナイを作るのも骨が折れた
因みに製作時間は軽く8ヶ月を超える
術式が失敗したときにはもう破壊してやるうかと思つたよ
だが、やっと完成した
チャクラ系はチャクラをそのまま魔力で代用してしまえばいい
早速動かしてみよう
そして傀儡人形に魔力系を付け動かす

ギー

ガシヤ

うーん、まだ慣れないな
誰かいないかな

傀儡人形に詳しそうな人…

……いたじゃん、人じゃないけど

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
早速行ってみよう

そしてエヴァンジェリン邸

「おーい、エヴァー」

「何でしょうか夜刀様」

「ああ、エヴァいる？」

「はい

マスターならいらっしやいます」

「何のようだ砌」

「いやね

最強の魔法使いであるエヴァに頼みがあつてね」

「ほう

立派な魔法使いであるお前が悪の魔法使いである私に頼みとはななんだ？」

「人形使いの技術を教えてほしいんだ」

「何故だ？」

お前は人形なんて持ってないだろ」

「実はついさつき完成したんだ

これだよ」

ガシヤン

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝から三代目風影と四代目火影を取り出す

「ほう

英雄とは言え素人が作った人形だからな

はつきり言つてどの程度のものが…

！これは…！」

「だから言ったでしょ？
最初で最高の傑作だと」

「確かに凄いなこれは
良いだろう
教えてやる
それに私とお前の仲だからな」

そんなに大した関係じゃない気がする…

「別荘に行くぞ
来い」

そして別荘内で3日後

「まさか3日でマスターするとは…」

「いや
助かったよ」

私は完全に操り人形の技術を習得した
今では完璧に三代目風影と四代目火影を二体同時に操れる
「じゃあそろそろ帰る」

「ああ」

別荘内だったのでまだ3時間しか経っていない

そして次の日の早朝
私は学園長室にいた

「何の用ですか学園長？」

「夜刀君を呼んだ要件じゃが
ネギ君の最終課題の事なんじゃ」

「という事は、決まったんですか？」

「うむ」

ネギ君の最終課題は期末テストで2 - Aを再開から脱出させる事
じゃ」

「…確かにパツと見は簡単そうですが

あのバカレンジャーがいるクラスをですか…

あのクラスには雪広、超、葉加瀬と、学年トップクラスの生徒も
多数いますが、バカレンジャーであるアスナ、古菲、長瀬、佐々木、
綾瀬はそれを帳消しにするどころかマイナスにしていますからね
難しいでしょう」

「ふおっふおっふおっ」

「……何か企んでいますね？」

「何のことやら」

「はあ…まあいいでしょう」

今回の事に関して私は関与しません
ただテストでいい成績を取るだけです」

「そうしてくれると助かる」

「元々手を出さないように言っつもりだったんでしょっつ」

「まあ」

「なら私はそろそろ教室へ向かいます」

「そうしてくれ」

呼び出したりしてすまんかったのう」

「いえ」

では失礼します」

ボタン

そしてネギ先生他六名が行方不明となりました

原作開始（後書き）

実はこの話の文字数、丁度4444文字なんです

期末テスト、桜通りの吸血鬼、そして茶々丸襲撃（前書き）

更新遅れました

はつきり言ってアンチネギです

期末テスト、桜通りの吸血鬼、そして茶々丸襲撃

私は図書館島でネギ君一行を探している

学校はどうしたかって？

学園長公認で欠席扱いだよ

そしてたった今

「グルルルルルル」

ドラゴンと対立してます

ああ、そういえばここアルが隠居してたんだっけ

目の前のドラゴン（しかもワイバーン）はかなり殺気立っている

「構いません

通しなさい」

誰かがそういった瞬間、ドラゴンから殺気が消え、大人しくなった
そして扉が開き中に入る

「久しぶりですね砌」

「ああ、久しぶり

こんなところに居たんだ」

「ええ、ここで図書館島で司書をしています

今はクウネル・サンダースという名前ですが」

「ちなみにその名前の由来は？」

「食っちゃ寝生活をしていたのでクウネル
ケンタッキーが好きなのでカーネル・サンダースのサンダースを
取りました」

なので、クウネル・サンダースです」

「名前はかつこいいけど、由来が果てしなく情けない……」

「それで、どうしたんです？」

「ああ、実は図書館島でネギ君が行方不明になったと聞いてね」

「ナギの息子ですね」

ええ、確かに居ますよ

今はここの地下で缶詰め状態で勉強会をしています」

「学園長の企みはこれだったのか」

「まあまあ」

お茶でも飲んで行きませんか？」

「ああ、もうつよ」

その後暫くア…クウネルと話した後、地上に戻った

そして試験当日

余裕だった

これなら全教科百点は間違いないだろう

「ブービー賞は2・Kですね、平均点69・5点です、次回頑張ってください」

呼ばれてないのは2・Aのみ
つまり最下位決定な訳だけど…

あ、ネギ君が走り出した

まあ、一位って決まってるんだよね

「え？…はい

ただいまの発表を訂正します」

ザワ…ザワ…

「えー2・A！

平均点89・5点

2・Fと9・2点の差で1位です！！」

「……………や、やった……………！」

「まあ、予想通りだね」

「あのじじいだろうな」

そして…

「……………3年！A組！！……………」

「……………ネギ先生……………！！……………」

「朝からテンション高いね」

「バカどもが…」

「ハハハ」

「じゃあそろそろ失礼するよ」

「変態にはなりたくないからね」

「あ！おい、どういっ…」

「で、では皆さん身体測定ですので…」

「ええと、今すぐ脱いで準備してください」

「キヤー！」

「ネギ君のエッチー！」

「あわわ、その…」

「ごめんなさいーい！」

「そっいうことが…」

最近桜通りの吸血鬼事件が騒がれ始めてきた

「…学園長」

「これ、間違いなくエヴァですよ…?」

「ふおっふおっふおっ」

「これも修行じゃよ」

「別に何も言いませんが
やり過ぎないで下さいよ?」

「分かっておるわい」

そして寮へ戻ると

「先生ーッ！大変やーッ！
まき絵が、まき絵がー！」

亜子がネギの下へ走って行った
そうか、もうこんなところまで来たのか

そして保健室へ向かうとドアの前で中の様子を窺っている真名（名
前でいいと言われた）と刹那を見つける

「どうした?」

「砌ですか…」

「佐々木が吸血鬼に襲われたそうだ
砌も聞いているだろ
桜通りの吸血鬼の噂」

「ああ

何か分かったのかい?」

「残念だが…」

「そうか」

まあ犯人分かってるんだけどね

「私は部屋に戻るよ」

そして戻る途中、エヴァを見つけた

「今夜また仕掛けるのかい？」

「ああ

そのつもりだ」

「ふうん

ま、微力ながら援護させて貰うよ」

そしてその夜

「キヤアアアアアアアアア！」

「ふん

気絶したか

他愛もない」

「仕方が無いんじゃないのか」

俺はうちはマダラの格好をしている

「まあいい

お前の血、分けてもらおうぞ」

そしてのどかの血を吸うため、口を首筋に近付けるが…

「待てー！

僕の生徒に何するんですかー！」

「来たな」

「その様だな」

「俺は裏方に回らせてもらう」

「…なんだその口調は」

「気分だ…

ではな」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

光の精霊9柱、集い来りて敵を射て

魔法の射手・連弾・光の9矢！」

「ふっ

氷盾」

ドゴオオオン

「大丈夫ですか、宮崎さん！」

「う、ううん…」

「驚いたな

予想以上だ

あらためて歓迎のご挨拶と行こうか

先生：いや、ネギ・スプリングフィールド」

「そ、そんな

エヴァンジェリンさんが犯人で、しかも魔法使いだなんて…」

やっぱり驚いているな

まあ無理もない

自分のクラスの生徒が最近騒がれている事件の犯人だとは思わない
だろう

しかも自分と同じ魔法使いだなどと知れば余計な

「十歳にしてこの力か…」

流石はサウザンドマスターの息子と言ったところか」

「何者なんですかあなたは！

魔法使いなのに、魔法をこんな事に使うなんて」

そう、これがこの頃のネギが好きになれなかった最大の理由だ

魔法使いはすべていい奴ばかりだと思っ込んでいる

確かに魔法は人助けをすることもできる

だが、それと同時に簡単に人を殺める武器となる事もある

ネギはその事を全く分かっていない

自分の力がどれほど危険で強大なものなのかを知らないのだ

「この世には、良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ぼーや」

自分が悪い魔法使いだと言っているエヴァに関してはまだ、いや寧ろ親切過ぎる

普通なら相手の話など聞かず、問答無用で相手を殺しに行くからだ

「氷結・武装解除！」

パアアアン

「うわああああ！」

「ふ、レジストしたか」

ほう、全盛期ではないとはいえ、エヴァの武装解除をレジストするとは

やはり、この頃からネギ君は抵抗力が凄かったのか

(砌、場所を移すぞ)

(分かった)

そしてエヴァとの念話を切る

俺はランスロットの補助宝具、フォー・サムワンス・グロウリー己が栄光の為でなくを発動しエヴァ

アの後を追う

そしてその後をネギが杖に乗って追いかける

「(速い…」

そういえばばーやは風の魔法が得意だったな)」

バツ

「杖も箒も無しに空を飛んだ！
唯の魔法使いじゃない…！」

(…おいエヴァ

何処まで行くつもりだ？)

(まだだ

もっ少し付き合ってもらおうぞ)

ネギを誘いこんでいる
俺の出番もそろそろか…

「待ちなさい！」

エヴァンジェリンさん、どうしてこんな事をするんですか！」

だがエヴァは聞く耳を持たない

「仕方ない

ラス・テル・マ・スキル・マギステル
風精召喚・剣を執る戦友！！」

「！分身？」

(恐らく精霊召喚だ

しかも中位精霊による「コピー」
だが8体同時召喚か
あの歳で大したものだ)

「捕まえて！」

ビュオオオオ

風精がエヴァに迫る

だが…

「はあ！」

パリーン

エヴァの氷結魔法によってすべて破壊される

「はっはっはっ！」

どうしたネギ先生！

お前の親父はもっと凄かったぞ！」

そしてその後はエヴァとネギの攻防戦が暫く続いた
そして…

「何！？

16体同時召喚だと！？」

エヴァが挟み撃ちにされ、屋根へと飛び降りた

「これで僕の勝ちですね

どうしてこんな事をするのか教えてもらいますよ」

「それはどうかな？」

「魔法の触媒もマントもなくなったエヴァンジェリンさんでは勝ち目

は無いです」

「そう思うなら呪文を唱えるといいさ」

「くっ

ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

そこに茶々丸が来てネギにデコピンをくらわせる

「あう！」

「って君はうちのクラスの…」

「紹介しよう、ネギ先生

私のパートナー、出席番号10番、魔法使いの従者の絡繰茶々丸
だ」

「ええっ!？」

茶々丸さんが貴方のパートナー!？」

「そうだ

つまり従者の居ないお前では、私達には勝てないという事だ」

「そんな…」

「茶々丸」

「申し訳ありませんネギ先生
マスターのご命令ですので」

ガシッ

「くくく」

「悪いな先生、血を貰うよ」

そしてエヴァはネギの血を吸おうとするが

「ごらー！」

「この変質者共ー！」

「ちっ」

「邪魔が…」

「うちの居候に何すんのよー！」

そろそろ行くか

ガシッ

「遅かったな

（何故来た？

障壁があつたというのに）」

「別にいいだろう」

（アスナは魔法無効化能力マジックキャンセラーを持っている

あのままでは蹴られていたぞ

それと、俺の事はトビと呼べ）」

「（なッ！？」

…分かった）」

「だ、誰よアンタ！」

「こっちも紹介しておこう」

こいつの名はトビ

実力は私以上だ

いくらおねーちゃんが助けに来てくれたと言っても、無駄に終わ
ったな」

「エヴァンジェリン、引き揚げるぞ」

「何！？」

「どういうことだ！」

「相手にする価値もない」

そういうことだ

俺はエヴァンジェリンの様にお前を相手にする理由が無い

それとこれも覚えておくといい

英雄は正義の味方などでは無い」

そう言っつて俺はマダラの時空間忍術を使いエヴァの家の前に移動する

「お膳立てはこれでいいだろう」

後はぼーや自身の問題だ」

「心配は無いだろう」

あのナギの息子だ

必ず帰ってくる」

「それもそうだな」

そして次の日の早朝

俺は長瀬とネギが寝ているテントを近くの林の中で見ている

長瀬は分からないが、ネギはまず気付かないだろう

そうこうしている内にネギが杖に乗って飛んで行った

目が変わったな

まあ、少しは好感度は上がったな

さて、普通はここで立ち去るつもりだったのだが、ふとある事が頭によぎった

……長瀬の実力はどの位なのだろうか
気になる

という訳で少し殺気を送ってみるか

そして少し殺気を送る

その瞬間、長瀬がテントから飛び出してきた

「（なんだったでござるか、今の殺気は…）

近くで見ているのでござろう？

姿を現したらどうでござるか

「よく気が付いたな」

「!？」

俺は長瀬のすぐ後ろに瞬動で移動する

「くっ！」

「そう構えるな

お前と戦いに来た訳ではない」

「ならばいつたい何用得…いや、お主は何者でござるか…？」

「お前と同じ忍だ、甲賀中忍」

「…どうやら本当の様でござるな

それで、その忍が何の用得ござる？」

「用があつたのはネギ・スプリングフィールドの方だ

いや、だつたの方が正しいか…

同じ忍であるお前に興味を持ったんだ」

「なるほど

それで、その紅く模様が入った右眼は何でござるか？」

「クツクツクツ

なに、魔眼のようなものさ

まあ俺の一族しか開眼しないがな

しかも開眼条件がある」

「そんな事を拙者に話してよいのでござるか？」

「ふっ

話したところでどうなる訳でもない

この目の開眼条件だが、それは…

自分と最も親しい友を殺すことだ」

「なっ！？

…それで、お主は殺したのでござるか

己と最も親しい友を」

「ああ

だが不思議と罪悪感は湧かなかつたな」

ガキイン

まずい、本気で信じてしまった

というか、何で俺はあんな事を言ったんだ！

まあ、ノリでだが

仕方がない

「月詠」

俺は月詠を発動し、長瀬を精神世界へと引きずり込む

「!?!」

「無駄だ

ここでは全て俺が支配する」

そして長瀬を鎖で動きを封じる

「これで分かっただろう

お前はどうかやっても俺には勝てない」

俺は月詠を解く

「はあ

もういいか」

そして俺はお面を取る

「すまないね

手荒い真似をしてしまつて」

「よ、夜刀殿!？」

え、では、友を殺したというのは……」

「ああ

この眼は生まれつきでね

いやー、ノリで言つちやつたんだけど
ごめん」

「そ、そうだったのでござるか……」

「ハハハ

じゃあもつ行くよ」

「あ、夜刀殿!

まだ聞きたい事があるでござるか」

「何?」

「あの殺気は、夜刀殿が放つたものでござるか?」

「ああ、そうだ」

「そつでござるか……」

「もつ良いかな?」

「ああ

もう行っていいでござる

呼びとめてしまつて申し訳ない

それと、拙者のことは楓でいいでござるよ」

「わかつたよ

じゃあね、楓」

そして私はその場から立ち去つた

「しかし、お面を着けないだけであんなに口調が変わるとは…
分からぬものでござるな」

ふう、着替え終わり

そう言えば今日って…

あ、茶々丸襲撃か

となると、あのオコジヨももう来てるんだ
お、見つけた

「エヴァ」

「砌か…

どこに行つてたんだ」

「ちよつとネギ君の監視をね」

「そうか

そう言えば気付いたか？

あのぼーやに助言者がついた」

「ああ

まあ助言者と言ってもウエルズで女性の下着を盗んで逃げたオコジヨだけだね」

「ハツハツハツ！

とんだ助言者だな」

「ま、エロオコジヨの助言に期待しましょう？」

「ククク

そうだな」

「おい、エヴァ、夜刀君」

「タカミチか…」

「ここにいたのか」

「どうしたの？」

「ああ、学園長がお呼びだ
今から来いってさ」

「じじいがか…」

茶々丸、先に戻っている
すぐ戻る」

「了解しました

マスター」

「じゃあね」

それにしても、エヴァだけならまだしも私にまで用があるとは
桜通りの吸血鬼事件の事かな
手っ取り早く済ませたいな
茶々丸襲撃には介入したいからね

そして学園長室

「ふおっふおっふおっ
よく来たのう」

「要件は何だ」

「まあそう焦らんと
先ずは夜刀君
話はすでに知っておるじやろっ」

「ええ
簡単に言えば、ネギ君とエヴァをぶつけて、圧倒的な実力差で敗
北を知ってもらうってことですよね」

「まあ、簡単に言えばそんなところじゃ
そこでじゃ、夜刀君には期末試験と同じく手を出さないでもらい
たい」

「それは保障できませんよ」

「何故じゃ？」

「最近のネギ君の行動には目に余るものがあります
私も少しイラッと来ているものもね」

「しかし…」

「大丈夫です」

これで潰れたら所詮その程度だったってことですから」

「いや全く大丈夫じゃないじゃろ」

「ハハハ」

「じゃあ失礼します」

「うむ」

少し時間を食ったが間に合うだろう
そして空き地に向かうと

「こんにちは、ネギ先生、神楽坂明日菜さん
油断しました

でも、お相手はします」

「あの…」

茶々丸さん、僕を襲うのを止めていただけませんか？」

「申し訳ありませんネギ先生
私にとってマスターの命令は絶対ですので」

「仕方ありません
行きます

契約執行10秒、ネギの従者・神楽坂アスナ！」

なるほど、魔力供給での戦闘能力強化か…

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

うゝむ…遅い！

まあその歳でこの速さなら良い方なのか？
基準が分からない

「えい！」

「（速い！

素人とは思えない動き！）」

一方こっちはデコピン合戦

…のどかだなあ〜

「光の精霊11柱、集い来りて敵を射て！
魔法の射手・連弾・光の11矢！！」

ゴオオオオ

「追尾型魔法、至近から多数
回避不能です

すみませんマスター、夜刀様
もし私が動かなくなったら「その心配は無い」えっ…!?!?」

「ロー・アイアス熾天覆う七つの円環!」

ドオオオン

私が熾天ロー・アイアス覆う七つの円環で助けに入る

「無事かい？」

茶々丸」

「え?あ…はい

問題ありません／／／」

「そうか

よかった(ニコッ)」

「／／／!?!?」

「ん?

どうしたの?」

「い、いえ!

何でもありません!／／／」

「ならいいけど…

もう行きなよ」

「はい、ありがとうございました」

そう言つて茶々丸はジェット噴射で飛んでいった
…なんで顔赤かつたんだらう…？

「さて、何故こんな事を？」

「よ、夜刀さん…」

魔法使いだつたんですか!？」

「はあ

質問に質問で返さないでほしいな

まあいいや

ええ、その通りですよネギ先生

私は魔法使いです」

「やいやいテメエ!

エヴァンジェリンの手下だな!

よくも兄貴の邪魔を!」

「クツクツクツ

手下?

違うね

寧ろ共犯者と言つていい

このお面に見覚えはないですか？」

「そ、それは、トビさんの!

なんであなたが…」

「答えは至極簡単ですよネギ先生
私がトビだからです」

「そ、そんな…」

「そろそろ私の質問に答えてください
何故こんな事をしたのか

まあ大方、エヴァ相手に茶々丸がいると勝てないので、茶々丸から倒そうとしたってところでしょう?」

「……………」

「凶星ですか

別に責めるつもりはありませんよ
勝つための方法の一つですからね

しかしだからといって、許すつもりもありませんが」

「テメエ、さつきから偉そうなこと言いやがって!

兄貴、こんな奴の言うことなんて聞くこと無いっすよ!

あいつも魔法でやっつけちまいますよ!」

「う、うん

ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

これもネギ君を好きになれなかった理由の一つ
自分で考えようとしないうこと

他人の意見に流されやすい

「光の精霊7柱、集い来りて敵を射て!

魔法の射手・連弾・光の7矢!」

ドオオオン

「…その程度ですか」

はつきり言って障壁だけで問題なかった

「そんな!？」

魔法の射手が効いてない!？」

「攻撃をしたということは、攻撃される覚悟はありますよね？」

「え？」

「そ、それは…」

「ちよつと砌!

覚悟つて、ネギはまだ子供なのよ!」

「だから？」

「なっ!？」

だからって何よ!」

「覚悟に歳は関係無い

攻撃するのは攻撃される覚悟がある者だけですよ」

「あ、あう…」

「はあ…」

もういい

失礼しますよ、ネギ先生」

興醒めだな

私は自分の寮に帰った

少年VS吸血鬼

次の日、エヴァは風邪を引いていた

ついでに私はエヴァのお見舞いのため欠席

茶々丸はツテのある大学に薬を貰いに行った

「ククク

ぼーやにかなりキツイ事を言ったようだな
ハックシユン！」

「ちょっと注意しただけだよ
後はネギ君次第」

「そうだな

…クシユン！」

「…ずいぶん辛そうだね」

まあ花粉症だから辛いのも当たり前か

「ああ

全く、吸血鬼の真祖が花粉症でダウンとは…ハックシユン！」

「はいはい

もう寝たら？」

「ああ、そうさせてもらおう」

そして数分後

「すづ…すづ…」

「寝たか…」

カランコロン

「ネギ君かな？」

「すいませーん

担任のネギですけど
家庭訪問に来ました」

やっぱりそうか

「こんにちは、ネギ先生」

「よ、夜刀さん」

「昨日私が言った意味は分かったかな？」

「はい！」

それで、これを渡しに来ました」

そしてネギ君が取り出したのは…

「果たし状？」

「はい

正々堂々勝負しようと思って

夜刀さんの分も」

「エヴァは今は風邪で寝てるよ
静かにね」

「吸血鬼の真祖が風邪を引くんですか？」

「まあ、世の中広いからね
あり得ないという事は無いよ
私は少し出かけるから、エヴァのことは頼んだよ
後、その果たし状は直接渡したら？」

そう言つて私は、団子を買いに行つた
…エヴァはみたらしでいいかな

〈ネギside〉

夜刀さん、最初は怖かったけど話してみれば普通の優しい人でした
吸血鬼の真祖が風邪をひいたと言つた時は疑いましたけど、こうし
て寝込んでいるところを見ると本当みたいです

「やめ…る…」

「うひいっ…!!
ごめんなさい!
別に悪気は…」

「お…い…
サ、サウザントマスター
…待、て…やめ…」

これはサウザントマスターの夢？
もしかしたら…

「ごめんなさい

ラス・テル・マ・スキル・マギステル

夢の妖精 女王メイヴよ、扉を開けて夢へといざなえ」

そして夢の中へ

「ついに追い詰めたぞ、サウザンドマスター

この極東の島国でな」

「エヴァンジェリン…恐るべき吸血鬼よ

己が力と美貌の為に、何百人を毒牙にかけた」

あ、あれがサウザンドマスター

かっこいい！

「今日こそ吐いてもらおうぞ

剣聖の情報を！」

「諦める

俺はあいつの居場所なんて知らないし、情報も持って無いぞ」

「ならば体に聞くまでだ

いくぞチャチャゼロ！」

「アイサー御主人」

「えーと…この辺だったかな？」

「遅いわ若造！

私の勝ちだ！」

あ！危ない！

ドオオオン

こゝ、これは…落とし穴！？

「これは…！」

「落トシ穴ダ御主人」

「それは分かる！」

「ハハハハハハハハハハ！」

ほれほれ〜」

「ん？」

ひ、ひい！やめろ！

私の嫌いなニンニクとネギではないか！」

「ふふん

お前の苦手な物は、すでに調査済みだ！」

「あつう…！」

ボンッ

あの姿は、エヴァンジェリンさん!?

「わははははは!

噂の吸血鬼の正体がチビのガキだと知ったら、皆何と言っかな?」

「卑怯者ー!」

き、貴様は千の呪文の男、サウザンドマスターだろ!
魔法で勝負しろー!」

「やなこつた

本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ

オマケに魔法学校も中退だ

恐れ入ったかコラ!」

え…

魔法学校を…中退!?

「な、何イ!?!」

「なあエヴァ、もう砌の事は諦めたらどうだ?」

え?今砌って…(砌は認識障害魔法をかけてあるので気付かれない)

「やだ!」

「そうかそうか

それじゃあ仕方がないな」

ゴゴゴゴゴゴゴ

す、凄い魔力です！

「な、なんだその強大な魔力は！？」

「へっ

砌の魔力はこんなもんじゃないぜ」

これよりも更に強大な魔力の持ち主だなんて

「えーと…」

マンマンテロテロ…長いなこれ…」

「や、やめろ！

そんな力でできとつな魔法を使うな！」

「御主人ピーンチ」

「登校地獄！」

「いやあああああああ！！」

夢終了

「はあ…はあ…

またこの夢か…

だがもう昔の話だ…今はもう…ん？」

「すっ…すっ…」

「なんでコイツがここに…それにこいつ寝ながら杖を…」

「ふあ、あ！」

エヴァンジェリンさん!？」

「おい貴様、何故寝ながら杖を握っていた？」

「いや…その…」

「貴様…私の夢を見たな…?」

「じ、じめんなさーい！」

「貴様あああああ！」

〈砌side〉

エヴァの家に戻るとボロボロになったネギ君がいた
エヴァの夢を見たのか

「おい砌！」

どこに行っていた!」

「ちよつと和菓子屋に団子を買いにね
食べるかい?」

「ああ、もらおう」

「お茶を用意いたします」

「頼むよ」

「それでエヴァ
ネギ君との決着はいつつけるの？」

「今夜だ」

「今日は大停電の日だからな」

「なるほど」

「結界が無い今夜を狙うと」

「そうだ」

「ふん…あれ？
つてことは…」

「私暇じゃない？」

「いや、桜咲刹那がお前に勝負を挑むらしい」

「刹那がねえ」

「まあ無銘流が目当てだろうな」

「行くぞ」

「ああ（了解）」

「封印結界の電力停止、予備システムハッキング開始…成功
全て順調、これでマスターの魔力は戻ります」

「では私は行くよ」

「ああ」

そして

「砌…」

「来たか、刹那」

「はい」

私が勝つたら、無銘流を教えてくださいます」

「分かった

それで構わないよ」

「では…行きます！」

そして刹那が向かってくる

私は斬鉄剣ではなく普通の刀を取り出す

「神鳴流奥義、斬岩剣！」

「無銘流、硬刀」

ガキイイイン

「くっ」

「今の刹那では私には勝てないよ」

ドスッ

「ぐあっ！」

私は刹那を気絶させる

「はあ、仕方ない

タカミチに頼むか」

私は刹那をタカミチに任せエヴァのいる橋へと向かう

「行くぜえ！」

オコジョフラーッシュ！」

ピカアアアア！

「くっ」

何処に行った！」

「してやられたね、エヴァ」

「砌か…」

桜咲刹那はどうした？」

「気絶させてタカミチに任せてある」

「そうか」

カアア

「そこか！」

「…あれは、バクティオー仮契約したか」

「行くわよ、ネギ！」

「はい！」

「私が生徒だという事を忘れ、本気で来るがいい！
ネギ・スプリングフィールド！」

「この橋一带に結界を張った
思う存分やるといい」

「そうさせてもらおう」

「行きます

ラス・テル・マ・スキル・マギステル
風の精霊17柱、集い来りて…」

「ハハハ、なんだその可愛い杖は！
魔法の射手・連弾・氷の17矢！」

「魔法の射手・連弾・雷の17矢！」

ドオオオン

「ハハ！！雷も使えるとはな！」

だが詠唱に時間がかかりすぎだぞ！

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊29柱！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、光の精霊29柱！」

「魔法の射手・連弾・闇の29矢！！！」

「魔法の射手・連弾・光の29矢！！！」

ふむ、手加減しているとはいえ、エヴァの魔法の射手を相殺か
あの歳でやるなあ、ネギ君

「ハ…ハクシヨン！」

「何！？」

ズガアアアアン

「…やりおつたな小僧

フフツ…フフフ、期待通りだよ」

「…！いけない
マスター戻ってください！
予定よりも7分27秒も復旧が早い！！」

「何！？」

「キャア！？」

「くっ」

「マスター！」

ガシッ

「危なかったね、エヴァ」

「…前にもこんな事があったな」

「初めて会ったときだっけ」

「…バカ／＼／」

「なんで！？」

「う、うるさい／＼／！」

そして

「えへへへへへ」

さあ、これで僕の勝ちですよ！

これでもう悪いこともやめて、授業にもしっかりとでてもらいますからね！」

「分かったよ……」

「それでネギ君

私への果たし状はどうするのかな？」

「あっ！」

「…忘れてたって感じだね

まあいいさ、ネギ君が力を付けたときに改めて申し出てほしい
じゃあ、私はもう帰るよ」

そう言って橋から出ようとした際に

「監視役ご苦労さん

タカミチ」

「！…気付いてたんですか」

「ああ、最初からね

よかったじゃないか

ハッピーエンドに終わって

でも……彼のサクセスストーリーはまだ始まったばかりだよ
ククク

面白くなりそうだ……」

そう言って私は寮へ帰った

…最後はかつこよく決めすぎたなあ…
後で後悔した…

修学旅行一日目

次の日、私はカフェテリアでコーヒーを飲んでいた
そこへ…

「あ、ネギ君」

「お、おはようございます
夜刀さん」

「そうだネギ君、京都に紅き翼の隠れ家があるんだよ」

「ほ、本当ですか!？」

「うん」

「丁度良かったね」

「何ですか？」

ネギ君…

本当に教師か？

「はあ…」

「だって修学旅行の行き先が京都じゃないか」

「え？」

という訳で

「えーと、みなさん
来週から僕たち3 - Aは京都・奈良へ修学旅行へ行くそうです
もう準備は済みましたかー!?」

「『『『『『『はい!!』』』』』」

「ハハハ

いつにも増してハイテンションだね

それにしても京都か…

懐かしいなあ」

「行ったことあるの?」

「うん、昔にね」

「なあ、みぎちゃん

修学旅行一緒にまわる!」

「残念だけど砌は私と一緒にまわるんだ」

「…どこからいたの真名」

「さっきから」

私が気付けないなんて…

これがギャグ補正?

そんなこんなで

「ええー！ー！！」

修学旅行の京都行きは中止ー！？」

「うむ、まだ中止と決まっておらんが

ううむ、何と説明してよいやら…」

「私が説明しましょう」

「頼む」

「ネギ君

日本には学園長が治めること、関東魔法協会と、京都に学園長の義理の息子が治めている関西呪術協会があるんだ」

「そうなんですか」

「その二つの協会は仲が悪いんだ

と言っても、長である二人は友好的なんだけど

その下の人達がね…」

「先方が魔法先生がいると言ったら難色を示してのう」

「そ、それって僕のせいだ…」

「僕としてはもうケンカ等せずに仲良くしたいんじゃない

そこで君には、この親書を持って向こうの長に渡して貰いたい

ただし途中で連中による妨害あるかもしれないが、それでもやるかな？」

「はい！まかせてください！！」

「うむ、では頼んだぞ」

「はい！」

ボタン

「…夜刀君

ネギ君に何か言ったかの？」

「いえ、私は何も」

「ふおっふおっふおっ

そうかそうか

そして夜刀君じゃが、ネギ君の事を頼む」

「学園長先生、私は生徒ですよ？

修学旅行を楽しむだけです」

「そうか…

では、楽しんできなさい」

「少しはっちゃけてしまいかもしれませんがね」

「ふおっふおっふおっ

程々にの」

「ククク

時と場合によりますね
失礼します」

ボタン

「…ふう、全く彼だけは敵に回したくは無いのう」

そして修学旅行当日

1班

柿崎 美砂

釘宮 円

椎名 桜子

鳴滝 風香

鳴滝 史伽

2班

古 菲

超 鈴音

長瀬 楓

葉加瀬 聡美

四葉 五月

桜咲 刹那

3班

朝倉 和美

那波 千鶴

長谷川 千雨

雪広 あやか
村上 夏美
相坂 さよ

4班

明石 裕奈
和泉 亜子
大河内 アキラ
佐々木 まき絵
春日 美空

5班

綾瀬 夕映
神楽坂 明日菜
近衛 木乃香
早乙女 ハルナ
宮崎 のどか

6班

龍宮真名
エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
絡繰 茶々丸
ザジ・レイニーデー
夜刀 砌

「それではみなさん、15年度の修学旅行が始まりました

この4泊5日の旅行で楽しい思い出をたくさんつくってください
ね！」

「「「「「はーい!!」「」「」「」

新幹線に乗ってから数十分後

「「「「「きゃー!!」「」「」「」

「カ、カエルって…」

刹那、これが関西呪術協会の妨害？」

「恐らく」

「コラー！親書返してください!!!!」

「ネギ君、早速親書を盗まれたか…」

「行ってきます」

「刹那、君も苦労するかもね」

そして数時間後

《まもなく京都です、お忘れ物のないよう…》

「やっとか」

「さて、これで関西呪術協会の妨害が終わる訳無いよね
どんな修学旅行になるのかな」

「お前、楽しんでいるだろう？」

「どろだろっね〜」

「これが噂の飛び降りるアレ!..!」

「誰か飛び降りてっ!..!」

「では拙者が...」

「私がいくアルよ!..!」

「ここから飛び降りて自殺を図った人は結構いるけど、生存率は85パーセントと意外と高いんだよ」

「.....」

「ハハハ」

「ありがとうザジ」

「...」(何で分かる!?)「...」

そして旅館

「キャーーーーー」

「木乃香が攫われたか...」

「助けなくていいのかい?」

「助けるよ
ただし、これでね」

私は風影と火影を取りだす

「傀儡かい？
珍しいね」

「しかも魔力系は何処までも伸びるし、視覚の共有も出来るからね
遠い所からの支援に便利なんだ」

ここからは風影（夜刀）視点

駅のホームで待ち伏せをしている

「木乃香お嬢様を返せ！」

「ようここまで追ってこられましたなあ
せやけど、ここまでですわ」

「何？」

「お札さんお札さん
ウチを逃がしておくれやす
三枚呪術、大文字焼の送り火！」

ゴオオオオ！

「くっ」

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル
吹け一陣の風・風花・風塵乱舞！」

ビュオオオオオ！

「なっ！？

ウチの炎が消された！？」

「お嬢様を返してもらっぞ！」

キィィィン

「この太刀筋、神鳴流！？」

「はい」

月詠言います」

では、行きます」

キーン！キーン！キーン！

「くっ

意外に出来る！」

そろそろ行こうか

私は砂鉄で作った槍で猿鬼、熊鬼を刺す

「ウチの猿鬼と熊鬼が一撃で！？」

驚いている隙に後ろから火影が木乃香を奪う

「しまった！」

「ラ・ステル・マ・スキル・マジステル
光の精霊8柱、集い来たりて敵を討て！
魔法の射手・連弾・光の8矢！」

「くっ

ここは引かせてもらいますえ！」

そして水の中へと消えた
これは、水を媒体にした転移魔法…
アーウェルンクスか

「ふう

あ、ありがとうございます
木乃香さんを…」

そんな簡単に警戒を緩めちゃダメだろう

「ネギ先生！」

「どうしたんですか？
桜咲さん」

「気を付けてください
敵の敵が味方だとは限りません」

刹那が代弁してくれた

「どついつ事ですか？」

「私達の味方でも、関西呪術協会側でもない、第3者の可能性があるという事です」

「そ、そんな」

「しかもこれは傀儡
なら本体がどこかにいる」

火影が木乃香を差し出す

「今回は礼を言う
だがお嬢様を狙うならば…斬る」

火影は私を掴み飛雷神の術でホテルへと戻る

（風影（夜刀）Side out）

シユン

予め置いてあつた特製クナイの場所に火影と風影が戻つた

「どつだつた」

「うゝん

ネギ君、私が木乃香を助けただけで味方だと思ひ込んでいたよ
まあ、私の言いたいことは刹那が代弁してくれたけど」

「刹那はその傀儡の本体が砌だつて知っているのかい？」

「いや、エヴァと真名と茶々丸以外は誰も知らない
それじゃ、失礼するよ」

その後は部屋に戻って寝た

ラブラブキッス大作戦

次の日

修学旅行二日目を終え、寝ようとしたその時

「…なんか外が騒がしい
何だろう?」

そして部屋から出ると、真名と刹那がいた

「何してるの?」

「フフフ

面白いイベントがあつてね
それに参加してるんだ」

「へえ、面白いイベントねえ…」

原作でそんなのあつたかな…

…ああ、ネギ君を対象にしたキス大会か何かだったよね

「という事は真名たちもネギ君狙いなんですよ?」

私はキスしたいなんて思われるような事はしてないし
私には関係ない話だね

そう思っていると二人がため息をついた

「いえ、私達の狙いは…砌、貴方です」

は？

「いや何故に？」

「フフフ

頂きます」

そして真名の顔が近付いてくる

「うお！」

何故私が！？

私は必死になつて逃げた

「見つけたぞ！

砌！」

「ええ！？

エヴァも！？

茶々丸！主人の暴走を止めて！」

「申し訳ありません

マスターの御命令は絶対ですので」

「チクシヨオオオオ！！」

そしてまた逃げた

だがその先には

「あ、砌勝負するネ！」

「拙者とも是非」

「何故だあああああ！」

そして私は

楓

古菲

刹那

真名

私

エヴァ

茶々丸

と、武道四天王&吸血鬼の真祖とその従者に囲まれるという危機的
状況となった

…何で？

こうしている間にもじりじりと近付いてくるし！

パン

私の目の前を何かが掠めていった

…弾丸？

「安心しなよ

麻酔銃だから」

「いや、全然安心できないから」

この状況でいちばん戦力が手薄なのは…

後ろだ

つまり…茶々丸！

「くっ

すまない茶々丸！」

「あう！

申し訳有りません…マスター…」

バタッ

茶々丸を気絶させと逃亡

「逃がさないネ！」

「くっ…」

「くっ！

気拳・散！」

気を散弾の如く前方広範囲に撃つ技

「ぐっ…！？」

「ぐはっ…！？」

古菲・楓、気絶
後三人！

プスッ

「くっ！？（麻酔か！）」

だが暫くは動ける

「なっ！？麻酔が効いてないのか！？」

「おやすみ二人とも」

手刀で意識を刈り取る

あと一人！

だけど、一番厄介な相手だ

「流石にもう動けまい？」

砌、お前の唇は頂くぞ……」

そしてエヴァは顔を近づけ……

「させるかああああ……！」

私は残る渾身の力でエヴァにパンチをくらわせる

「くっ……まだ……動けた……のか……」

バタッ

エヴァ、気絶

「あ……」

もうダメ、動けない」

麻酔が体中に回り、動かなくなってきた

「フフフ

ようやく動けなくなった力」

「ハハ：

流石は…麻帆良の最強頭脳って…ところ…か…な？

超…鈴音」

「無駄なお喋りをするつもりは無いヨ

フ…フフ…これでやっと…」

「残念だけど

終りだよ」

トス

私が見れ、手刀で超の意識を刈り取る

今現れた私はアサシンの宝具、妄想幻像ザバーニヤで私を二分割した内のもう一人

「出来…れ…ば…もっと早く…きて…て…ほしかっ…た…な…」

「すまない」

私は妄想幻想ザバーニヤを解除する

麻痺していた私が消え、私一人になる

…なんか言い方おかしいな

気絶した全員を部屋へと送り届けた

「疲れた…」

「寝よ」

スクナ封印

次の日

「おい！
起きろ砌！」

「ん、うん
んお？」

「エヴァか…おはよう」

「おはようではないわ！
もう夜だぞ夜！」

「嘘オ！？」

「さっき連絡が入ってね
助けがほしいそうだよ」

あゝ
もうスクナか
早いな

「分かった
私は準備して行くから、先に行つてて」

「分かったよ」

「エヴァは？」

「エヴァンジェリンは他の所で見ているそうだよ」

「そうか」

「じゃあ、先に行っているよ」

「ああ」

私は着替えが終わると詠春の下へと転移した
やはり詠春も石にされたか…

「石化解除」

「う…」

み、砌ですか」

「大丈夫かい？
詠春」

「はい、お陰さまで」

「よかった」

その石化魔法、白髪の男にだろうか？」

「ええ、そうですね
ですが何故？」

「アーウェルンクスだよ」

「!?!」

「過去の亡霊が動き出している
何をするか分からない」

「そうですね

貴方は早く木乃香を助けに行ってください」

「初めからそのつもりだよ」

そして転移魔法で鬼の大群の下へ

「すまない、遅れた

魔法の射手・連弾・光の40矢」

ズドドドドドド

「ん?あの鬼…

ああ!暴鬼!」

「あ?

おお!夜刀!」

私が麻帆良学園の護衛をした時に会った印象的な鬼だった
あのあとすぐ召喚して酒の飲み比べをしたり、他の鬼も呼んで宴会
などもしたものだ

「なんや、知り合いか?」

「覚えとらんのか？」

麻帆良で殴り合いした奴や」

「おお、あんときの奴か」

「久しぶりだね

でも今は時間が無い

全力の一発勝負にしよう」

「かつかつかつ！

ええで！」

「アデアット

闇黒の左腕」

「久々に腕が鳴るわい」

ゴキツゴキツ

「「セーの…」」

ドオオオオン

「…今回も私の勝ちの用だね」

「あゝ

また負けたあ！」

「さて、私はもう行くけど

大丈夫かい？」

「ああ、砌の最初の一撃でだいぶ減ったし
さっきのパンチの衝撃で何匹か還ったから大丈夫だよ」

「なら、行くよ
気を付けてね」

「ああ」

そして私は湖へ向かった

「よく頑張ったよネギ君
本当に、頑張った」

アーウエルンクスがネギ君に止めを刺そうとするが

ガシッ

「ウチのぼーやが世話になったようだな、若造」

「（これは、影を使った転移魔法！？）」

ドオオオオン

「うわあああ！」

「え、エヴァンジェリンさん！？」

「くっ」

まさか吸血鬼の真祖がいるとは」

「私もいるよ」

「君もいるとは思わなかったよ剣聖
その強大な槍は何なのかな？」

「北欧神話の主神オーディン愛用の投擲槍、グングニル大神宣言だよ」

「伝説の武器…か」

「そういう事さ」

そして大神宣言をアーウェルンクスに投げる

ドオオオオン！

「…転移したか…
後はどうやって木乃香を助けるか…」

「私なら…あそこへ行けます」

「刹那さん!？」

でも、どうやってあそこまで」

「ネギ先生、明日菜さん…私、二人にも…木乃香お嬢様にも秘密に
しておいたコトがあります

この姿を見られたらもう…お別れしなくてはなりません…」

「え……」

「でも、今なら…あなた達になら…」

刹那はそういうと背中から真っ白の翼を出した。

あまりの状況にネギとア明日菜は口を空けて呆けていた…
私は元から知っていたので驚きはしない

「これが…私の正体…」

あの鬼達と同じ、化け物です」

「……ふうーん」

「ひゃー！」

刹那の話を聞いた後明日菜は刹那の翼を弄りだす。

そして触ったり抱きついたりして堪能した後、刹那の背中を思いっきり叩いた。

「なーに言ってるのよ、刹那さん」

こんなの背中に生えてるなんてカッコイイじゃん」

「え………」

「あんたさ、木乃香の幼馴染でその後2年間も陰からずっと見守ってたんでしょ？」

その間あいつの何を見てたのよ？

木乃香がその位で誰かのことを嫌いになったりすると思っつ？
ホントにもう…バカなんだから」

「あ、明日菜さん………」

明日菜の言葉に刹那は心が軽くなっていく。

「刹那」

「砌……？」

「君は化け物なんかじゃない
魔法世界には羽根の生えた生物なんて幾らでもいる
それに、何であろうと、刹那は刹那でしょ？」

「ハ、ハイ！」

「行つて、刹那さん！」

「分かりました！」

刹那は飛び立った
そして木乃香を救出した
…よし、それじゃ始めよう

「エヴァ！」

「どうした砌？」

「スクナは私に任せてくれないかな」
久々に骨のある相手なんだし
…私もナギに似てきたかも

「ふん、いいだろう！
派手に行つて来い！」

「ああ」

「ふん、何をしようと無駄や
スクナに勝てる訳あらへんやろ！」

「本当にスクナは無敵だと思っているのかい？」

「当たり前や

スクナは飛驒の大鬼神や
無敵に決まっとるさかいな」

「ククク

私は自分のことを最強と自惚れしている訳ではないが、少なくとも……

この程度の小物に負ける気はしないよ」

「どうせその子供みたいに全く効かんのが落ちや
止めとき」

「フフフ

まあ、やるだけやってみるさ」

「ぼーや！見ておくがいい！
あれがぼーやが目指しているものだ！」

「はあ

あまりハードルを上げないでほしいんだけどな……

ネギ君

君が目指しているナギは、この位の相手は一人で相手取れたナギを探すなら、それ位は出来ないと難しいよ」

「止めとけて、砌の旦那！

あいつはヤベえ！」

私は王の財宝から宝具を取り出す
ゲート・オラ・バビロン

「天の鎖！」
エルキドゥ

ジャララララ

周囲から鎖が現れスクナを縛る

名前に神なんてあるほどだから神性は高いと思っていたが、予想通り

「なっ!？」

スクナの動きを止めたやて!？」

「す、凄い……」

「アデアット、闇黒の左腕

アンリ・マユ
この世全ての悪（投擲槍ver）
鬼神殺しの呪い、封印呪術付加」

「あ、あの…砌さん？

一体何を……」

「よく見ておけばーや

これが最強の力というものだ」

「終りだ」

ヒュッ

私はこの世^{アンリ・マユ}全ての悪をスクナに投げる

ザクッ

そしてスクナの胸の中心辺りに突き刺さる

「グオオオオオオオオオオ!!!????」

スクナは痛み^に苦しみだした

「成功」

「砌さん

どういう事なんですか？」

「あの槍に鬼神殺しの呪いを付けたんだよ」

「鬼神殺し？」

「鬼神には普通よりも大きなダメージを与えられるんだ

それに自動的に封印の呪術が発動するようにしておいたから、もうじき発動する」

コオオオオオオ

「始まった」

スクナは突然現れた魔方陣に引きずり込まれるように湖へと沈んでいく

「グオオオオオアアアアアアアア！！？！？」

そしてスクナは完全に封印された

だがこの時は、闇の福音と言われるエヴァでさえ油断していた

「やっぱり君は厄介だね」

ドスッ

石の槍が最強の剣士を貫いた

「ガハッ！」

「み、砌イイイイイイイ！！！」

「砌！！！」

「砌さん！！！」

「嘘………？」

「スクナの力はそれほどでも無かったけれど、剣聖を始末出来たのは大きな得だよ

その致命傷じゃ、ここで止めを刺さなくてもいずれ死……」

「死ぬのは貴様だ、アーウェルンクス」

ドオオオン

「ぐあああああ！」

私は須佐能乎の拳でアーウェルンクスを叩き潰す

「まんまと私の罠に嵌ってくれたな

貴様が油断しきつた私を狙うのは予想できていた」

「何故だ

君は確かに致命傷を負った筈…

なのに何故？」

「あれは確かに私だった

だが私の能力の一つで無かった事にさせてもらった」

「そうか

剣聖をここで始末出来ないのは残念だけど

僕はこれで失礼するよ」

そしてアーウェルンクスは消えた

やはり思念体だったか

私は須佐能乎を解除し、ネギ君達の下へと戻った

「え？ 砌さん？

さっき、刺された筈じゃ？」

「ああ、あれは私の能力の一つ、イザナギと言ってね

自分にとって不利な事を夢、有利な事を現実に出来るんだ」

「す、凄いですね……」

「まあ、制限時間が一分で、これを使うと必ず失明するからこの眼を持つ人達には禁忌と呼ばれているけどね」

「お、おい！

失明するって、お前まさか……！」

「それは心配ない

私のはちょっと特殊だね

何があっても眼自体が無くならないと失明しないし、視力も低下しないんだ」

「そうか、よかった」

「砌さんは何でも有りですね」

「否定できない」

「ハハハ……」

刹那…苦笑いしないでフォローしてよ…

その後、私は詠春の下に来ている

「砌、今回の事はありがとうございました」

「はい、お願いします!」

「私はもう少し話してから帰るよ」

「砌、お願いがあるのですが…」

「木乃香の事かい?」

「はい、彼女はこれからこちら側として生きていくでしょう、それには…」

「最低限自分を守る力を、つてこと?」

「はい、どうかお願いします」

「分かってる」

私も初めからこうなる事は何となく予想はついてた
私に任せて」

「ありがとうございます」

「じゃあ、私はもう戻るよ」

「ええ、気を付けて」

スクナ封印（後書き）

闇黒の左腕

対極したる光闇の腕の左腕の名前

アデアットと言った後に名前を言えばそっちだけ出て来る

右腕の名前は

光白の右腕

紅き翼の隠れ家

次の日

「やあ皆さん、よく休めましたか？」

「どうも、長さん！」

「ハハハ、それではこちらです
どうぞ」

「「「わーーーーー」」」

「ほう、ここが紅き翼の隠れ家か…」

「すごーい、本がたくさん」

「彼が最後に訪れたままの状態で保存してます」

「これが、父さんの…」

「わあすごいこの本！なんて書いてあるかわかんないけど…！」

確かナギも分かって無かったような…

「お嬢様方！故人の物ですからあまり手荒に扱わないでくださいね
…！」

「…この写真はなんですか？」

「それはサウザントマスターとその戦友たちの写真です」

「戦友？」

とうとうこの写真か…

「はい、もう20年前になりますね

前にスクナを封印したときの写真もありますが、それはまた別の機会に…」

「（詠春、あれにはアリカ姫や明日菜も写ってるから、見せないでよ）」

「（分かっていますよ）」

「へー、それがネギのお父さん？」

「この人やて、かつこええなあ

お父様も若い」

「でこつちの…黒いコートを着たポニーテールは…」

「もしかして…みぎちゃん？」

「ククク

もう良いんじゃないか？剣聖？」

「け、剣聖って…まさか…!!」

「ああ、察しの通り

私は紅き翼の一人

剣聖の夜刀砌だ」

「「えええええー!!!」」

「わあゝみぎちゃん今と変わらんねえ」

「認識阻害を使ってみましたからね

彼はナギより強いですよ?

なので、紅き翼最強と言われていましたね

全盛期の私でも剣で一度も彼に勝つ事は出来なかった」

「父さんより強いって…」

「英雄が二人…」

「でもみぎちゃん

これ20年前のやつなんやろ?

うち5歳ごろにたっちゃん与会つとるんやけど」

「私は不老で肉体年齢を自由に変えられるんだ」

「私と彼、砌は先の大戦でまだ少年だったナギとともに戦った戦友
でした

そして20年前、平和が戻ったときに彼は数々の功績から英雄…
千の呪文の男と呼ばれていたのです」

「さてここで問題」

ナギは確かに千の呪文の男と言われていたけれど何故そう言われるようになったのでしょうか？」

「うーん…千個の呪文が使えたから？」

「違う」

「渡り歩いた戦場の数が千！」

「残念」

「正解は、ナギ自身が広めたんだ」

「……へ？」

「どーせ二つ名が付くんなら、スゲー方がいいだろ！って言うってねで、思惑通りに広がったって訳
本当は6個位しか使えないのに」

「……」

「ハハハ」

「サウザンドマスター像を壊してしまったのは謝るよ」

「話がそれましたね、天ヶ崎 千草の両親はその戦争で亡くなってしまいました…」

「彼女の恨みと今回の行動もそれが原因かと」

「英雄と呼ばれていたナギは突然姿を消す」

「…はい」

公式記録では10年前に死亡」

確実に生きてるだろうね

殺しても死なないような奴だから

「これ以上のことは…すみません」

「い、いえ、そんなことは…ありがとうございます」

その後ネギ君達は写真を撮った

私と詠春は2階から見ていた

多分写真にも写っているだろう

弟子入りと超の勧誘

学園に帰ると

「お願いします

僕を弟子にしてください！」

「断る

馬鹿か貴様……」

「私もちよつと……」

「何でよ！

教えてあげてもいいじゃない！」

「私は悪の魔法使いだぞ！？」

いわば貴様達の敵だ！」

「それを承知できました！

でも魔法の戦い方を教わるにはやはりエヴァンジェリンさんか砌
さんにと……」

そう言われてもなあ……

「私は剣士だから魔法を教えることなんて出来ないよ」

「え？

でも魔法使ってたじゃないですか？」

「と言っても私は感覚でやっているようなものだからね
教えられるようなものじゃないんだ」

「エ、エヴァンジェリンさん……」

「本気か？」

「はい！！」

「ククク、いいだろう。ただし！私は悪の魔法使いだ、それなりの
代価を払ってもらおうか……」

「だ、代価……？」

「まずは足をなめろ、我が僕として永遠の忠誠を誓え
話はそれからだ」

「コラ」

ゴッ

「痛ッ！

何をするんだ！」

「女の子がそんなこと言っちゃだめだろう」

「私は吸血鬼の真祖だぞ！」

「そんなの関係無い」

「ああもう！わかったよ

今度の土曜日もう一度ここへ来い
弟子にとるかどうかテストしてやる」

「え…？

あ…ありがとうございます！！」

全く…なんだかんだ言っても優しいんだよね

ネギ君は弟子入り試験の為に古菲に弟子入りしたそうだ

「ずいぶんと熱心じゃないかぼーや

そっちの修行をすることにしたのか？

じゃあ私への弟子入りは白紙ということだな」

「ええっ！？

こ、これはあの白髪の少年の戦い方で…」

「ふん、もういい。

子供にはカンフーごっこがお似合いだ」

「何よー！エヴァちゃんだってお子様体型じゃないの！

いいもんねーネギ君あーんなに強かったし！

エヴァちゃんに弟子入りする必要なんかないもんねー！」

「え、ちよっ、まき絵さん！？」

「クククク、いい度胸だな

よし貴様の弟子入りテストの内容が決まった」

「な、なんですか…」

「そのカンフーもどきで茶々丸に一撃入れる
それで合格にしてやる
もちろん一対一だ」

「ええええ！？」

エヴァンジェリンさん！

「じゃあやめろ」

「そんなのネギ君なら余裕だもんね」

何でまき絵が返事を？

その後

自分の部屋で斬鉄剣を砥いでいると…

ピンポーン

来たか…

「はい

開いてるよー」

「失礼します」

刹那だ

最近は木乃香との仲も元に戻っている
まあ、木乃香のことをお嬢様と言つのは変えてないが

「あの…
頼みがあつて…」

「弟子にしてほしい
そんなところかな？」

「は、はい…
一度断られています、やはり諦められなくて」

「刹那
私が前に断つた理由、分かるかい？」

「はい
あの頃の私は、お嬢様の体は守れていても、大切な心を守れては
いませんでした
だから、私は決めたんです
お嬢様の心と体、その両方を守るように強くなるつと」

いい目だ
刹那はあの頃とは違う
はつきりとしている
これなら、大丈夫だろう

「分かった」

「！では！」

「けど、まだ弟子にするつもりは無い」

「何故ですか!?!」

「はあ…」

刹那、いきなり弟子に出来る訳がないよ

「あ」

「今度の土曜日にまたここに来ること
刹那には私と戦ってもらおう」

「はい、分かりました
では失礼します」

そう言って走り去っていった
試験に向けて腕を磨こうということだろう

次の日

ピンポン

「邪魔するぞ」

「失礼します」

「聞いたぞ」

桜咲刹那の弟子入り試験をするらしいじゃないか
どんなハンデをつけるつもりだ?」

「何もハンデはつけないよ
まあ、斬鉄剣は使わないけどね」

「何？」

「それでは桜咲刹那は勝てないだろう」

「私は刹那に「戦ってもらおう」としか言っていないよ」

「ククク」

「そういう事が」

「刹那は勝てば弟子にしてもらえるって思ってるみたいだね
まあ手加減はするけど…容赦はしない」

「珍しく厳しいじゃないか？剣聖」

「君に言われたくは無いなあ、闇の福音」

「ククク」

「それはそうと、これから茶々丸はメンテナンスに行くんだが、超
からお前も連れてきてほしいと頼まれてな」

「超が？」

「ああ、大事な話があると言っていたが…まさか告白？」

「ん？なんか言った？」

「い、いや…」

何も言って無い！／＼／

「そ、そう？」

何だろう

聞いちゃいけない気がする

「（あ、危なかった）

そろそろ行ったらどうだ？」

「ああ、じゃあ茶々丸」

「はい」

そして麻帆良学工学部研究室
念のため写輪眼を発動する

「よく来てくれたネ砌」

「ああ

私に用があると聞いたけど……」

「その通りだよ」

！後ろから僅かな殺気……

攻撃の意思ありか

私は瞬動で超の後ろを取り、投影した日本刀を突き付ける

「何のつもりだ……？」

「流石砌だネ」

「さっきの移動、気配を全く感じなかった
それに移動する姿も捉えられなかった」

「ムフフ」

私はどうやって移動したか分かるかな？
因みに単なるテレポートじゃないヨ」

私が写輪眼を使っても動きを捉えられないということはある得ない
つまり…

「時間跳躍…か」

「おお、よくわかったネ！

いきなり分かったのは砌が初めてだヨ

私は何者か、何をしようとしているのか知っている筈だが？」

「君もあまり知られたくは無い筈だよ

場所を変えよう

ちよつとこつちを向いてもらえるかな？」

「いったいなんだ？」

超が振り向いた瞬間、私は月詠を発動する

「!？」

「驚いただろう？」

「ここは何処かな？」

「ここで幾ら時間が経っても外では一瞬にしかならない
精神世界だよ

「ここには私と超しか居ない」

「…全く、あなたはいつも私の予想を超えた事をしてくれるナ」
ん？

「いつも？」

「どういうこと？」

「それはいつか話すヨ」

「まあいい

それで、用件は何かな？」

「実は今年の麻帆良祭で世界樹の魔力を使って強制認識魔法魔法の
存在を全世界に知らしめるつもりだよ」

「へえ…」

「反応が薄いと予想外だな」

「大して興味が無いからね

世界が魔法を認識したところで関係無い

まあ世界中で混乱が起こり、数年したら魔法を使った兵器の打ち
合いやら、侵略やらが始まるんじゃないかな

…それでもやるのかい？」

「私はもう止まらないし止まるつもりもないヨ」

「そうか」

「それで本題なのだが

私側に来ないか？

…あなたとは戦いたくない」

何だ…？

まるで前から知っているような言い方だが…

「残念だけど、私は君の計画を手伝う事も邪魔する事もしない君がしたいようにすればいい」

「…そうか」

まあ、不干渉を貫いてくれるだけでも目的を果たせたヨ
感謝するネ」

「そろそろ戻すよ」

私は月詠を解除する

「私は茶々丸のメンテナンスに向かうヨ
砌はどうするネ？」

「私は先に帰るよ」

茶々丸に伝えておいてくれ」

「分かったネ」

闇の魔法（マギア・エレベア）

私はエヴァと共に別荘にいる

エヴァに頼みがあるので別荘に場所を移したということだ

「エヴァ、ちょっといい？」

「なんだ？」

「実は頼みがあつて…」

「ほう…」

まあ他ならない砌の頼みだからな
それで？」

「マギア・エレベア闇の魔法を見せてほしいんだ」

「マギア・エレベア闇の魔法をだと？」

「ああ」

「いいだろう、見せてやる」

私が編み出した魔法、マギア・エレベア闇の魔法をな」

私はネギ君が原作でやっていたような方法ではやらずに、写輪眼で実物を見ることによって「コピー」し自分のものにする
上手くいくかは分からないがこれでダメなら原作と同じ方法でやるだけだ

写輪眼発動

「準備出来たよ」

「始めるぞ」

来れ深淵の闇 燃え盛る大剣！！闇と影と憎悪と破壊 復讐の大
焰！

我を焼け 彼を焼けそはただ焼き尽くす者 奈落の業火 術式固
定・掌握！

魔力充填「術式兵装」！！」

……なるほど、原理は分かった
後はこれを応用すれば…

「ありがとうエヴァ
もういいよ」

エヴァは闇マギア・エレベアの魔法を解除する

「まさかこれだけで闇マギア・エレベアの魔法を理解したと言っわけではないだろう
な？」

「あはは、まあ私は規格外だからね」

「はあ…それもそうか
で、何をするつもりだ？」

「いやいや
ちよつとした最強の魔法の開発をね」

「何？」

最強の魔法というところに食いついてきた

「まあ見ててよ

アデアット「対極したる光闇の腕」

ギル・ガ・ジル・ガン・グジル・ガ・ゼル

全ての神々よ 断罪せよ 肅清の光よ その力を持って 我に仇名す全ての敵を滅ぼせ!

『ラゲナロク神々の黄昏』!

術式固定、右腕、掌握、魔力充填「術式兵装」!!」

ゴオオオオ!

当たりに強風が吹く

「くっ（砌は本当に何をするつもりだ?）」

「ギル・ガ・ジル・ガン・グジル・ガ・ゼル

邪悪なる神々よ 横暴と妄想の正義を砕き その深淵なる闇を

偽善者共に刻み込め

『アンリ・マユこの世全ての悪』!

術式固定、左腕、掌握、魔力充填「術式兵装」!!」

私は白と黒、光と闇が融合するイメージを思い浮かべる

すると、体の中で神々の黄昏とこの世全ての悪が反発し合い強大なエネルギーが発生する

ゴオオオオオツツツ!!!!!!

私の周りに凄まじい突風が吹き荒れる

「な、何だこの強大な存在感は！？
茶々丸！砌の状態を解析しろ！」

「了解しました

……解析完了、魔力測定不能

現在の砌様は強大な反発魔力反応を起こす二つの魔法を自身の気で制御している状態です」

「ええい！もつと簡潔に言え！」

「要は超強力な磁石の同じ極同士を自分の力で無理矢理くっつけてるってことかい？」

「そういうことになります」

「どんな化け物だお前は！」

酷いな、化け物だなんて
あ、そうだ

「ねえエヴァ」

「なんだ？」

「今から私と戦ってくれない？」

「突然だな…

いいだろう

戦ってやる」

「じゃあ始めよう」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

来れ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の凍土と氷河を

『こおる大地』!」

「ハッ!」

エヴァが凍る大地を放つが後ろに跳ぶことで容易く避ける
だがそこで私はあることに気付く

「速くない?」

エヴァと距離が開く時間が通常時よりも圧倒的に早いのだ

シュン

「!?!?速い!」

普通に回り込んだけど、エヴァが気付けないほど速いなんて…
これで瞬動を使ったらどうなるんだろう…

「この速さに付いてこれるかな?」

シュパパパパパパ!

「くっ (全く動きが見えん!」

第一、虚空瞬動をこんなに簡単に連続して発動するのは奴くらのものだ)

闇の精霊859柱！集い来りて敵を射て！

魔法の射手・連弾・闇の859矢！！」

まさかこんなに魔法の射手を撃つてくるとは…ならば！

「ラグナロク神々の黄昏！この世全ての悪！（マシガンver）」

ガガガガガガガガガガ

私は白と黒のマシガンによって魔法の射手を全て撃ち落とす

「ちっ！

全く、とことん規格外だな」

「まあ、それが私の取り柄だからね」

私は既にエヴァの後ろに瞬動で移動している

「しまっ…」

「遅い！

エクス約束されし…」

「くそっ！

来れ氷精 爆ぜよ風精

『氷爆』！」

「カリバー勝利の剣！」

ドガアアアア！！

「まさか最後に氷爆で約束エクスカリパーされし勝利の剣の威力を弱めるとはね
流石闇の福音ってところかな？」

「そうでもしないとどうなっていたか分からないぞ！」

「まあいいじゃないか
無事だったんだから」

「全く、お前と言う奴は…！」

そんなこんなで、私はマギア・エレベア闇の魔法を習得した

弟子入り試験とエヴァンジェリンの気持ち

そして、土曜日

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けにきました
ー！」

「よくきたなぼーや、では早速始めようか、
お前のカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れられれば合格。手
も足も出さなくたばればそれまでだ」

「その条件でいいんですね？」

「ん？ああいいぞ。それよりも……」

エヴァが指差し、大きく息を吸い

「そのギャラリーは何とかならんかったのかー！」

「はあ、ついてきちゃって……」

認識障害かけておこつ

「では始めるがいいー！！！」

ネギ君の方は始まったみたいだ

「それじゃあこつちも始めようか？」

……刹那

「はい、お願いします」

「刹那にはこの木刀を使ってもらおう」

「分かりました」

「それでは…：始よう」

ゴスツ

ガキツ

ドゴツ

木と木がぶつかり、音が響く

「この程度かい？」

「くっ、まだまだ！」

左からの薙ぎ払い

私はそれを上に跳ぶことで避ける
だが…

「はあああ！」

下からの斬り払い

…少しは考えたという事か…：だがまだ甘い！
私は自分の木刀を下に敷くようにして受け止める

「なっ！？」

そして私は距離を取る
一気に詰め寄り上段斬りを放つ

「そら！」

「くっ！（やはり強い！

これが英雄の実力：）」

「戦っている時に考え事とは、随分余裕だね…刹那」

「しまっ…ぐあああ！」

刹那は私の攻撃をくらい吹っ飛ぶ

「どうした刹那！

君が木乃香を守りたいという決心はこんなものか！？」

「っ！（違う…違う違う！

私はお嬢様を守ると決めた

その決意は、こんな所で終わるようなものじゃない！）
はあああああ！！！！」

ガキイ！

「！（一撃が重くなっただか

それに、良い太刀筋になった）」

そろそろかな…

「くう…！」

カラン

刹那が木刀を離した
まあ、元々気合いだけで動いていたようなものだからね
限界が来たんだろう

「ここまでにしてよう」

「そんな…私はまだ…痛っ！」

「ほら、刹那自身もこれ以上は無理だろう」

「そんなことは…」

「とにかく、試験の結果を発表する
桜咲刹那、弟子入り試験…
合格！」

「え…？」

「」「」「や、やったー！」「」「」

「やったじゃん刹那さん！」

「おめでとくな！せつちゃん！」

「お、お嬢様…」

「傷を治したらいつでも私の部屋に来るといい」

「は、はい！」

でも…なんで…」

「刹那は何か勘違いをしているね

私はあくまで「戦ってもらおう」としか言っていないよ?」

「そう言えば…」

「思い出したみたいだね

それに、刹那の覚悟はしっかりと見せてもらったよ」

「あ、ありがとうございます!」

「ふふふ、じゃあね」

「なんだかんだ言っても、優しいじゃないか」

「それは君もだろう?」

途中から心配になってたくせに」

「なっ!?!」

別にそんなことは…」

「もう、頼むからやめてくれて感じてだったのに?」

「お前のやる気はわかったから、な?」なんて言っていたのに?」

「何故それを知っている！」

「何でだろうね〜」

「き、貴様〜…」

「ははは、じめんじめん」

「ふん、こうなったら私の酒に付き合ってもらおうぞ」

「ふふ、何時までもお供しますよ
お姫様」

「お、お姫様…／／／／／」

「エヴァア？」

「顔赤いけど、熱でもあるの？」

「い、いや、大丈夫だ／／／」

「ふうん…」

「……………」

「……………」

「……………なあ」

「ん？」

「その…お姫様だっこをしてもいいんじゃないか…？／／／／」

「は？」

「だから！

さっきお前は私の事をお姫様と言っただろう！

ならば、お姫様だっこをしてもいいじゃないか！／／／／」

「え…えーと…あー…」

ま、まずい

いきなりの事で頭が上手く回らない

えーと？

「簡潔に言つと、エヴァはお姫様だっこをしてほしいと？」

「（コクッ）／／／／」

「……」

「おい…何か言ったらどうだ」

「いぢ〜

エヴァにもそついう乙女チックなところもあったんだな〜って思
つて」

「う、う、うるさい！／／／／」

「ははは、分かったよ」

ひよいつ

「…それにしても意外だったな」

「な、何がだ」

「エヴァにもそうというのがあったんだと思って」

「私にだってあるさ」

それに、最初に私を普通の女の子として見てくれたのはお前じゃないか」

エヴァ side

「最初に私を普通の女の子として見てくれたのはお前じゃないか」

そう、最初に私をエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとして扱ってくれたのは今日の前にいる男、夜刀砌だった

砌の前に会ってきた奴らは、私を吸血鬼の真祖・化物・異形の者とし
しか見なかった

だが砌は魔法使い達にとって憧れの的、大戦で魔法世界全土を救った英雄であるにもかかわらず、私を普通の女の子として見てくれたその時の私にとってそれは何よりも嬉しくて、救いの手だった
だからかもしれない、私が砌を好きになったのは

ククク、必ず私の物にしてみせる

闇の福音は手に入れると決めたものは必ず手に入れるぞ

例外は無い！

ネギ君の修業とゼクト（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした
テスト期間だったものでロクにパソコンを使えませんでした

ネギ君の修業とゼクト

二日後

「失礼します」

「お邪魔するえ〜」

「おはよう

朝早いね刹那、木乃香」

「当たり前です

最強の剣士に修業を付けてもらえるんですから」

「ははは

それじゃあエヴァの家に転移するよ

ネギ君達もいるだろうから」

「分かりました」

「了解や」

「じゃあ、私の肩を掴んで」

そして転移した

そしてエヴァの家

「お邪魔するよ」

「失礼します」

「お邪魔します」

「来たか」

「早速だけど別荘を使わせてもらおうよ」

「いいだろう」

「ぼーやももう来ているぞ」

そして別荘内

「さて、木乃香」

木乃香は自分がどういう存在なのか分かっていないだろうから、
ここで簡単に説明しておく」

「ほえ」

「どんな存在なん？」

「単刀直入に言おう」

「利用価値満載のただの魔力タンクだ」

言い方が悪いけど、ここで自分がどういう存在なのかハッキリさせておかないといけない

変に柔らかい説明をして、自分の事も理解できていないで生き残れるほど、魔法世界は甘くないからね

「え……？」

「関東魔法協会会長の孫であり、関西呪術協会長の娘でもある
これだけでも利用価値は山ほどある

それに加えて東国一の魔力まで持っていて、自分の魔力の量も知らず、更に魔法の存在すら知らないと来たら、相手からしたらこれを利用しない手は無いんだよ」

「ちよつ！？砌！？

幾らなんでもそんな言い方は無いでしょう！！」

「はつきり言って魔法に関わると言う事はそういう事だよ

自分の立ち位置も分らないで生き残れるような甘い世界じゃない
それに比べれば、魔帆良学園は全然いい方だ

ただ向かってくる敵を倒す、それだけなんだからね

一歩外に出たらそこは殺し殺される世界だ

いつでもどこから敵が来るか分からない

誰が敵で誰が味方なのか分からない

相手が言っている言葉が本当か嘘か分からない

今一緒にいる味方がいつ裏切るか分からない

もしかしたらもう裏切っているのかも分からない

そんな所で自分がどういふものなのかも分からないで生き残れる
とでも？」

「っ……っ！！」

「もしそう思っていたのなら甘いね

……すまない、きつい言い方になってしまった

要するに、自分の危なさを理解してほしいんだ

まあ、キツイ話はこのまでにしよう
木乃香に教える魔法は回復魔法、魔法の射手、後は軽い攻撃魔法だ
木乃香の性格からして前に出るといふ事は先ず無いだろうからね
サポート役に回ってもらおう

「分かったえ〜」

「まずは自分の魔力を感じる事だ
自分の中に何かある、そんな感じでイメージしてみて」

「む〜〜〜…」

…うん、何となくやけど、魔力みたいなのがうちの中にあるのが
分かる」

「よし、今の木乃香は魔力そのものが閉じ込められている状態だ
だから、今度は体の中の鍵を開けるイメージで」

「むっ…」

いまいちよくわからへん」

「まあ初めはそんなものだよ
暫くそのイメージを続けて」

「了解や」

「それじゃあ刹那、場所を変えようか」

「はい」

鬼ごっこから始めよう」

「…はい？」

「基礎体力の底上げだよ

修行の途中で体力切れで中断なんてみっともないよ？」

「なるほど…」

「ルールは刹那が私にタッチする事

制限時間は5時間

刹那のみ瞬動と魔力による身体能力強化を使ってよし」

「はい

（これなら私でもできるような…

そんなに難しくなさそうですね）」

ふっふっふ

刹那、案外簡単だなんて思っていると痛い目見るよ？

5時間後

「はあ…はあ…はあ…」

「はい、時間切れ」

残念だったね」

「し、身体…能力強化無しで…あれ…ですか…」

「ははは、伊達に「音速の剣士」と呼ばれてはいないよ
まあこれで、刹那は自分の身体能力を理解出来たね？」

「は…はい…」

「じゃあ十分休憩

その後また同じのやるから」

「え!?!」

「じゃあ私は少しネギ君の修業を見て来るから」

「わ…分かり…ました…」

へトへトだね刹那

ズガアアアン

「あう~~~~…」

ネギ君がエヴァの魔法をくらって気絶していた

「フン、この程度で気絶とは話にもならんわ!

いくら父親譲りの魔力があつたとしても活用できなかったらただ
の宝の持ち腐れだ!」

「よーよーエヴァンジェリンさんよう、そりゃ言い過ぎだろ
兄貴はまだ10歳だぜ?」

「まあ、ネギ君はまだそんなに戦い慣れている訳じゃないからね」

「む、いたのか」

「さっき来た」

「とにかく、2人同時契約＋魔法の矢300本、修学旅行の時の比じゃないんじゃないか？

普通の魔法使いなら気絶してとーぜんだぜ？」

「黙れ下等生物、煮て喰うぞ」

「ひいっ！！」

「フン」

「砌、手本を見せてやれ」

「何故に私が？」

「何故に私が？」

「おっと、考えたことがそのまま口に出てしまった」

「別にかまわんだろっ」

「あまり参考にならないと思うけど…」

ラグナロク
神々の黄昏（剣ver）

ヴォン

ズズズズズズ

私は一振りで数百メートル先の山三つの頂上部分を斬り落とした

「やり過ぎだバカ！」

「いやでも手本見せろって言われたから」

「す、凄い……」

うん……

やっぱり剣じゃなくて普通の方がいいかなあ

「ねーエヴァ

私に氷神の戦槌撃つてくれないかな？」

「別に構わんが……氷神の戦槌！」

大きな氷の塊が7つ同時に私に襲いかかる

「あ、危ない！」

「この世全ての悪」

ズズズズズズ

私はこの世全ての悪で氷神の戦槌を全て打ち抜く
更にこの世全ての悪を集合させ一つに纏める

「お、おい

「さてネギ君、刹那

何処まで強くなつたか確かめさせてもらおう」

「と言つても、何をするんですか？」

「簡単な事だ

私達と戦ってもらう

たったそれだけだ」

「私達つて…まさか！」

「そのまさかだ

お前達二人には私と砌の二人と戦ってもらおう」

やっぱり驚いてるなあ

まあ無理もないかな？

「そ、そんな師匠、無茶ですよ！

協力している英雄と吸血鬼の真祖を二人同時に相手するなんて！」

「無茶でも何でもやるしかないんだよ

じゃあスタートは今から一分後、それまで話し合い&移動タイム
と言つ事で

因みに一分経つたら奇襲でも何でもしていいよ」

「クッククク

さて、ぼーやたちはどんな作戦で来ると思つ？」

「何だって関係ない

どんな小細工をしようとするかとそれごと潰すまでだよ」

「クツクツク、そうだな

だが初めてじゃないのか？

私とお前が共闘するなど」

あー、言われてみれば確かに

まあ、大丈夫でしょ

「因みに私も何も考えてない訳じゃない」

「どういう事だ？」

フフフ…

何、ちょっととした試練を与えようと思ってね

「そろそろ一分経つよ

辺りに注意しておこう」

刹那 side

私とネギ先生は今、砌とエヴァンジェリンさんを探している

二手に分かれるのは逆に危険だと思って一緒に行動しているのだ

……！

「ネギ先生…」

「ええ、師匠です」

私達の前にはエヴァンジェリンさんがいる
幸いまだ私達は気付かれていない

「では刹那さん、作戦通りに」

「はい、気を付けてくださいね」

私達が作戦はこうだ

先ず相手のどちらか二人を見つけたら自分の師匠に勝負を挑み、残った方は戦っている内に隙を窺って奇襲をするという訳だ
その隙を窺う間、息を潜めておかなければならない

今ネギ先生は辛うじてエヴァンジェリンさんと均衡を保っているという感じだ

早く奇襲をかけなければネギ先生が先にやられてしまう

…今だ！

キーン！

私は一瞬の隙に賭けたが、流石は600年の時を生きた吸血鬼の真祖
そう簡単に仕留められるほど甘くない

私の一撃はエヴァンジェリンさんの断罪の剣エクスキューションソードで防がれた

その後はもう手数で押していくか、一回離脱するかのどちらかしかない

だが、エヴァンジェリンさん程の強者だ

離脱などさせてくれないだろう

となると、必然的に前者を選ばざるを得ない

エヴァンジェリンさんは流石に防ぎきれないのか、徐々に押され始めた

「チッ」

エヴァンジェリンさんがいきなり後ろへ飛んだ

恐らく体勢を立て直そうと言っただろう

ここぞとばかりに私とネギ先生は追撃をするために追っ

……だが、ここで私達は、エヴァンジェリンさんの一瞬の笑みに気づく事が出来なかった

暫く追いかけていると、大きく開けたところに出た

エヴァンジェリンさんは逃げるのを諦めたのか私達に振り返った

私達は、勝てる！、と思った

しかし私達は、完全に油断していた

忘れていたのだ、敵は一人ではない事を

忘れていたのだ、相手は最強の二人だという事を

ヒュウウン

ドン！

何かが飛んでくる音とともに、私は背中に強い衝撃を受け吹き飛んだ

「!?!」

ネギ先生も同じく吹き飛ばされたようだ

「ククク」

お前の言ったとおりだったな

だがまさかここまで完璧に行くとは思わなかったぞ？

……まさか、お前を信じていなかった訳ではない
ただ驚いているだけだ」

エヴァンジェリンさんは誰かと話しているようだ
その誰かとは誰なのか…

………そうだ

少し考えれば分かる事だ

エヴァンジェリンさんと同じく、私達の相手をしている人物
私の師匠だ

「ようやく気付いたようだな

そうだ、今お前たちを襲った衝撃を放った張本人は砌だ

まあ、手加減をしてその威力らしいがな」

手加減をしてこの威力とは

つくづく砌は規格外だと思う

「さあどうする？」

お前たちは既に砌の攻撃射程内にいるぞ？」

「くっ！」

このままではどちらが有利かは明白だ
どうすれば……

「刹那さん」

「！ネギ先生？」

「こうなったら、行けるところまでやりましょう」

「ネギ先生……」

そうか、私は何を考えていたんだ

もう私達に作戦など無い

後は…がむしゃらに攻撃するまでだ！

「ハアアアアア！」

刹那 side out

砌 side

結果はネギ君達の惨敗

だが修行に必要な基礎体力は十分についているので合格だ
そして修行が終わって、各自自分の部屋に戻った

ガチャ

「おお、邪魔しとるぞ」

「………何でここにいるの？」

ゼクト

「何、たまには旧世界に行きたいと思ってるの
それでお前の所へ来たという訳じゃ」

いやいや、行くなら詠春のところでもいいでしょ
何で私なのさ…」

「麻帆良学園を見学してみたいと思っただけ」

あれ、何で私の考えている事が…

「思いつきり口に出しておっただけ」

「はあ、もういいや」

とにかくついて来て

「どこへ行くんじゃない？」

「学園長の所だよ」

流石に黙っている訳にはいかないだろう？」

「ふむ、それもそうじゃな」

そして

コンコン

「失礼します」

「邪魔をする」

「いったい何用じゃ？」

それに連れてくる子供は一体…」

「ゼクトさん!?!」

「フォツ!?!」

まさか紅き翼のフィリウス・ゼクト殿か?!?!」

「ほう、まさかワシ等がそんなに有名になっていたとはのう」

「いったい何しに来たんですか?」

「単なる観光だそうだよ」

観光だけで英雄がこんな所に来るのもどうかと思うけど…

「ここにいる間は砌の部屋にいるつもりじゃ」

そんな訳で、ゼクトが私の部屋に居候することになった

爵位級悪魔ヘルマン襲来(前書き)

若干ネギを批判してます

爵位級悪魔ヘルマン襲来

数日後

「そつだゼクト」

「何じゃ？」

「実はゼクトに見て欲しい子がいるんだけど
何とナギの息子のネギ君だよ」

「ほお、それは楽しみじゃな」

「それで、エヴァンジェリンって知ってるよね？」

「うむ、闇の福音と恐れられる吸血鬼の真祖じゃな」

「そつそつ」

「で、ネギ君はエヴァと私の弟子なんだ」

「なっ！？」

「プッ、クククク」

「そのナギの息子を指導してほしいと？」

「となると、とんでもないサラブレッドが出来る訳じゃ」

「魔法世界を救った英雄の息子で600万ドルの吸血鬼の真祖と同じく魔法世界を救った英雄二人の弟子と言う訳じゃ」

「まあ、確かにそつという訳だけでも」

しかしここでゼクトがネギ君を指導すれば、ネギ君は更に強くなる
だろう

……ネギ君には時が来たら私と死合をしてもらうのだから
まあそんな事は置いておいて

「で、どうかな？」

「ふむ、悪くないのう

いいじゃろう、引き受けよう」

「そうか

じゃあ早速今から行こう」

そして別荘内

「行く途中に会ってしまっ……」

「みんなでやったほうが楽しいからな」

何やら人数が増えていた

恐らく勝手について来たってところだろう

「やっと来たか」

「いったいどうしたの？」

「と言うか何で夕映と古菲がここに？」

「勝手について来たそうだ

全く……」

「ははは、まあ仕方ないか」

「ふん

ところで、そのガキは誰だ？」

「ほほう、ガキとはご挨拶じゃのう」

「紹介しよう

彼は紅き翼の一人

ナギの師匠もしていた…」

「フィリウス・ゼクトじゃ」

「なっ!？」

こいつがああ「赤き翼の盾」だと!？」

魔法関係者は驚いているようだ

「そつじゃ

今日からワシも指導に当たる」

ゼクトはあの（バカな意味での）ナギにも教えていたくらいだ
教え方は相当上手いだろう

ゼクトも教えがいがありそうだし

「砌!」

「ん?

何?夕映」

「私に魔法を教えてください！」

…言つと思つたけどさあ

うん、どうしよう

「エヴァかゼクト聞いてくれないかな

私は教えられないからね」

「そうですか……」

あ、明らかに残念がつてる

別に私でなくてもいいだろうに

その夜

「…！」

「この魔法は…意識シンクロかな」

発動場所に行つてみると隠れてのどかのアーティファクトでネギ君の過去を見ているエヴァ達がいた

「…何してるの？」

「む、砌か

何、ぼーやの過去を見るチャンスなのでな？」

「それでのどかのアーティファクトで見っていたと？」

「そう言う事だ

師匠である私には知る権利がある」

権力乱用じゃない？それ

「ううっ、ネギ君にあんな過去があったとは…」

「ネギ先生…」

何とも涙脆い女子中学二年生で…

「「ネギくーん！！」「「ネギ先生ー！！！！！！」」

「私達もネギ先生のお父さん探すの手伝うよ！」

同情か善意か…

まあ何にせよ、よかったのかな

数日後

「…砌」

「ああ、侵入者だ

どうするの？

この魔力だと爵位級は間違いないよ」

「取敢えず行ってみるぞ

無視する訳にも行かないだろう」

「ゼクトはどうするっ？」

「ワシも行くっ」

「多すぎて困るといふ事は無いじゃろっ」

そして

「それでもトドメは刺しません」

「ふ、ふははははは！」

「君はとんだお人好しだな、戦いには向かないよ！」

ああ、イライラする…

「お、おい

どうした？」

「何でもない

少しイライラするだけだ」

「そ、そうか

（少し所じゃ無いだろう！殺気が駄々漏れじゃないか！）

もう我慢ならない

「行くぞエヴァ、ゼクト」

「分かったよ…」

「はあ…」

「あ、師匠！」

「ぼーや、今の砌に近づかない方がいい
殺されるぞ」

「エヴァンジェリンの言う通りじゃ
しかし、あんな砌は初めて見たのう」

「え、それってどういう…」

「これはこれは、「剣聖」が来るとは」

「まだ未熟な魔法使いに負けるとは
腕が落ちたのかな？ヘルマン卿
まあいい、君は負けた
それ以上は言わなくても分かるね」

「ああ、だがその少年は止めを刺さないらしい」

「だろうな」

「…だから私が刺す」

私は必滅ゲイ・ボウの黄薔薇でヘルマンの心臓を突き刺す

「ガッ！？」

「み、砌さん！？」

何を！

「黙れ」

「え…？」

もう無理だ

この際だからはっきり言おう

「ネギ・スプリングフィールド

君は何がしたいんだ？

ナギを探す事が普通に修業した程度で出来るとでも思っていたのか？

英雄はそんなに甘いものじゃない

私は以前言った筈だ

「英雄は正義の味方などでは無い」と

「どついう事ですか？」

「ナギは何故英雄になれたと思う？」

「それは、敵を倒して連合軍を助けたから、では？」

「確かにそうだ

だが、味方がいれば敵もいる

その敵から何と呼ばれていたか知っているか？

「連合軍の赤毛の悪魔」だとさ

つまり、敵からしたらナギは悪だったんだよ

ナギに殺された帝国軍の兵士は多い

殺された兵士の親族からすれば憎き親族の仇だ」

「確かに、帝国軍からはかなり憎まれておったしのこと」

「そ、そんな…」

「ちよつと砌！

ネギはまだ子供なのよ！？」

「だからどうした？」

まさか子供だからという理由で現実を受け入れなくていい等という甘ったれた考えを持っている訳ではあるまいな？

笑わせるな…

自分は悲劇の主人公にでもなつたつもりか？不幸な少年とでも言うつもりか？

ふざけるな…

この世に公平な事などありはしない

自分が周りよりも不幸だというのなら力を付ける！

その不幸ごと打ち砕く力を！」

「み、砌さん…」

あゝあ、言い過ぎちゃったかな

「私はもう帰るとするよ

各自、休息をとっておくように

じゃあね」

そして私はその場を去った

麻帆良祭直前（前書き）

エヴァの小太郎の呼び方が違ってるかもしれない
違っていた場合は分かり次第修正します

麻帆良祭直前

時期は学園祭準備の真っ盛り

「と言つ訳で、3・Aの学園祭の出し物をお化け屋敷に決まりました！」

麻帆良祭の出し物が決まった

まあ、そんなこんなで

トントントントントントン
カンカンカンカンカンカン

お化け屋敷作りの真っ盛りです

「あ、砌〜

そこのカナツチ取って〜」

「はい」

「サンキュー」

「砌〜、ちよつと木材取ってきてくんない？」

「はいはい」

「頼んだよ〜」

つまり大忙しな訳で

ああ疲れるわ疲れるわ…

まあ、いろんな所で出し物の準備をしてるんだよね

「ねーねー、コレ見た？コレ！？麻帆良スポーツ」

まきえが麻帆良スポーツとかいう新聞を片手になににか言ってる

「ホラコレ

世界樹伝説本当に効果アリだった

今あちこちでこの話題だよ」

「ええ！コレはないでしょ」

「世界樹伝説って？」

まあ知ってるけどね

「砌知らないの？」

学園祭最終日に世界樹の下で告白すれば100%成功するっていう話だよ」

「それが本当なら私を含む全世界のモテない男子は彼女持ちになるチャンスって訳なのかな？」

まあ私は好きな人もいないし、私が好きな人なんていないだろうけどね

何故かクラス全員が溜息をした

何故に？（砌の鈍感さに呆れたから）

「私の聞いた話だと、2コ上の先輩だけど、めちゃくちゃ競争率高い超美形部長に告白したんだって
そしたらなんと即OKもらったってさ！」

「「マジ!?」「」

「（これが本当なら…）」

「（みぎちゃんの彼女になれるチャンスやな）」

「（砌様の…／／／）」

「（フッフ、これは又と無いチャンスだね）」

「（わ、私が、砌の…／／／）」

「砌は誰か好きな人は…
いやなんでもないよ！」

「？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「なにこの威圧感…」

エヴァ、茶々丸、真名、木乃香、刹那が殺気を帯びた眼でまきえを睨んでいる

もちろんその事に砌は気付いていない

「（最終日に…）」

「（砌と一緒にの奴が）」

「「「「（砌（様）の彼女になれる！！）」」」」」

何やら誰かが固い決意をしたような…

その夜

ドガガガガガガ

うわぁ！

何だいきなり

というか、何で戦闘の音が…

……まさか

「た、助けてくださいい~~~~！！！」

やっぱりさよが追われていたか

放って置くのも可哀想だし、仕方が無いか

……ん？

「神鳴流奥義……」

「これで……」

ま、まずい！

刹那の技と真名の除霊用の弾が！

くっ！間に合え！

「斬魔剣！」

ズガアアアン！

「終りだ！」

バン！

「キヤアアアアアアアア！！！」

「熾天覆う七つの円環^{ロー・アイアス}！」

ガキイン

「ふえ…？」

「どういうつもりだい？ 砌
返答によっては…！」

「ちよっ、待って！」

ストップ！ストップ！
頼むから落ち着いて！」

刹那は困惑しているからいいけど、真名はこの手のプロだ
少し殺気立ってる

「まあまあ、彼女は害があるような幽霊じゃない
いわゆる自縛霊だよ

何らかの理由があつてここに留まっているだけだ

まあ本人は何の未練があるのかは覚えてないらしいけどね」

流石に学園長が成仏させないでいるなどとは言えないだろう

「とにかく、彼女はここにおいても問題があるような霊じゃない」

「…はあ、砌が言っなら…」

漸く引いてくれた

「あ、ありがとうございます~~~~~!!!」

さよが凄じ感謝してきた

そして一夜明けて

「何故に？」

「頼みまずぜ旦那あ」

明日菜とデートしろと言われた

と言っても、タカミチに告白する際の予行演習だそうだし、
そう言われてもなあ

「悪いけど、そういうのはネギ君の方が適任なんじゃないかな？」

彼は英国紳士なんだし、そういった事のマナーは心得てると思うよ？」

私はデートする気など毛頭ない

何故かって？

私はあまりデートって柄じゃないからね

「それに年齢詐称薬、持ってるんだろ？」

「ギクウ！」

「…やっぱり」

とにかく、それでネギ君にエスコートしてもらいなよ」

「でも旦那あ…」

「ここで諦めて無事にいるのと、しつこく頼んで私に殺されるのと

……

ドツチガイイ？」

「すみませんでしたあっ！」

うーむ、綺麗な土下座

「そういうことだから、じゃあね」

「ダメだあ、全然やばいよー！！」

間に合わないよー！！」

まあ決める時にあれだけ時間かかればこうなるよね…

という訳で麻帆良祭当日間近

かなり危機的状況に追い込まれています

「おい砌」

「ん？何エヴァ」

こっちへ来いと手招きをしている
何だろう

「お前、格闘大会には出るんだろうな？」

はあ、なんだその話か

「そのつもりでいるけど？」

「そうか、ならいい」

さてはネギ君達の実力を計ろうってことかな
まあ、私自身楽しみでもあるし

「そうだ、さつき犬がぼーやを連れてどこかへ走っていたぞ
格闘大会の申し込みだそうだ」

「犬？」

ああ、小太郎君か」

小太郎君の存在をすっかり忘れていたな
あれ？小太郎が出てくるのってこの頃だっけ？

……ま、いいか
彼も重要な人物の一人だからね

そして、第78回麻帆良祭（超一派vs学園側の魔法戦争）が始ま

「そうか…」

もしよければなんだが…私と…学えん「プルルルルルルルル」
…チツ」

え？何今の舌打ち、怖いなあ

「ん、電話だ

もしもし」

「もしもし、砌

実は頼みがあるんだが、イイカナ？」

頼み？何だろう

「内容によるけど、何？」

「超包子に来て手伝ってもらっただけヨ

もちろん、給料は弾むネ」

超包子の手伝いか…

まあこれと言ってすることもないしね

「分かった、今からそっちに向かうよ」

「恩にきるネ」

そして超包子

「おーい、こっち炒飯頼むよ」

「こっちは肉まん六個な」

「はい、今行きます！」

超包子はいつも通り大繁盛

しかもお昼時だから余計にお客が多い

「砌！炒飯一丁上がったネ」

「分かった！」

お待たせしました！炒飯一丁です！」

「すいませーん！

お勘定！」

「はい、今行きます！」

そして休憩時間

つ、疲れた…

流星は超人気店「超包子」

客足が半端ない

一人帰ったらと思っただらまた一人来るから客が減らないんだよね
お陰でクタクタだよ……

「お疲れさまネ、砌」

「ああ、そっちこそお疲れ」

「私はそろそろ行くネ
まほら武道会の主催者だからネ」

「ああ、私も参加するから
また後で」

そして龍宮神社

「ようこそ！麻帆良生徒及び学生及び部外者の皆様！
復活した「まほら武道会」へ突然の告知に関わらずこれほどの人
数が集まってくれたことを感謝します！」

朝倉が司会かあ

何かしつくりくるのは何故だろう

「私はここに最盛期の「まほら武道会」を復活させるネ！
飛び道具及び刃物の使用禁止、そして呪文詠唱の禁止！
この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！」

思いつきり呪文詠唱で言っちゃってるし

一般人もいるけど大丈夫なのかな…まあいいか
それにしても飛び道具、刃物、呪文詠唱の禁止か
私は何を使おうかな？

あれは…ネギ君と小太郎君か

「古老師は僕の拳法の師匠だし、^{マスター}師匠も僕の師匠だし、コタロー君
だって楓さんに負けたんでしょ！？

コテンパンにされちゃうよー！」

予選会終了ギリギリまで参加者を受け付けます！
年齢性別資格制限は一切なし！

本選は学祭2日目、明朝午前8時より！

只今より予選会を始めます！」

予選会が始まった

「それじゃあ、引きに行こうかタカミチ」

「そうですね」

「じゃあネギ君
また後でね」

「あ、はい……」

私は…… Gか

「タカミチは？」

「僕はHでしたよ」

「そうなんだ、決勝で戦うかもね」

「ははは、そうなるといいですね」

決勝じゃなくて本選で当たりそうだけど
というか私のブロックにはどんなのがあるんだろう

「ケッ

弱そうだなお前
先にやられる！」

とって一人のヤンキーみたいな恰好をした男が殴りかかって来た

「私と同じブロックになったのが悪かったね
気拳・圧」

トン

砌は男の腹にパンチをする
だが音がそんなに響いた訳じゃないので、威力は全く無い……………
と思われていた

「ああ？
何だよ、こんなの痛くも痒くも…」

ドッ！！

突然、男の腹に強い衝撃が走った
気拳・圧は圧縮しておいた気が突然爆発するので不意打ちに役立つ
お陰で男は反対側の壁に思いつきり打ちつけたので気絶した

「おおっと！
夜刀選手、いきなり選手を吹っ飛ばした！
これはどういう事だ！？」

「何かしらの拳法を極めているんでしょ
並大抵の人では彼には手も足も出ないでしょうね」

まあ極めてない訳じゃないけど、気が使えれば誰でも出来ると思う

「気拳・多連弾」

ダダダダダ！

そうこうしてる内に最後の一人を片付け終わった
因みに気拳・多連弾とはいわゆる釘パンチ

「勝者、夜刀選手！」

私は選手控室に戻った

「砌！」

そう大声をあげて入って来たのは古菲だった

「あの拳法は何アルか！？
教えてほしいアル！」

そういつて私に肩を掴み大きく揺らす

「ちよつ、わ、分かった！分かったから！
今度教えるから！」

「本当アルか！？絶対アルよ！？」

「エブロツクの選手の皆さん、試合を始めますので試合会場に集ま
ってください」

「私のブロックアル！
予選に行ってくるアルー！」

な、何だったんだ…

「お疲れさまでした、砌」

「刹那か

いや、それほど疲れていないよ」

「でしょうね」

『皆様お疲れ様です！

本選出場者16名が決定しました！本選は明朝8時より龍宮神社
特別会場にて行います！

では大会委員会の厳正な抽選の結果決定したトーナメント表を発
表しましょう！

こちらです！』

【第1回戦】

〔第1試合〕 田中 VS 高音・D・グッドマン

〔第2試合〕 村上小太郎 VS 佐倉愛衣

〔第3試合〕 神楽坂明日菜 VS 大豪院ポチ

〔第4試合〕 龍宮真名 VS 古菲

〔第5試合〕 長瀬楓 VS クウネル・サンダース

〔第6試合〕 夜刀砌 VS シスターシャークティール

〔第7試合〕 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル VS
桜咲刹那

〔第8試合〕 ネギ・スプリングフィールド VS タカミチ・T・
高畑

私の相手はシスターシャークティールか
確か十字架を使うんだったよねー
にしてもクウネルか…ちよつと行ってみよう

「ちよつと行く所があるから、じゃあね」

そして転移魔法でクウネルの下へと転移する
…って

「ゼクト？」

「おお、砌か」

そこにはゼクトもいた
しかも大人verの
結構格好いいな

「ああ、ゼクトは何でここに？」

「なに、戦友がいたのにな

少し話していただけじゃ」

「そうか

クウネル、単刀直入に聞く…

何を企んでるの…？」

クウネルが行動する時は大抵何か企んでる時だからな

「フッフ、企んでるなんて人聞きの悪い

私はただ盟友との約束を守ろうとしているだけですよ？」

「ナギとの？」

ナギとなんか約束してたっけ？

「ナギとその息子との戦い、面白そうでしょう？」

そういうことが

というか原作にそのイベントあったよ

「どついうことじゃ？」

「クウネルは自分のアーティファクト、イノチノシヘンを使ってナギを再現して、ネギ君と闘わせるってことだよ」

「なるほどのう

確かに面白そうじゃな」

と、言う事は…

「私は途中で負けなきゃいけないってことかな？」

「ええ、そういう事になりますね
頼みますよ？」

「はあ、仕方がないのかな
まあ不自然に思われない形で負けるよ」

「ありがとうございます」

クウネルとゼクトは超の計画の事を知ってるのかな

「それにしても、今年の麻帆良は面白い事になるよ」

「「「どういう事ですか（じゃ）？」」」

あれ？知ってると思ったんだけど

「超鈴音は知ってるよね」

「ええ、まほら武道会の主催者ですからね」

「そう、その超が世界樹の魔力を使って面白い事をしようとしてるんだ」

「面白い事じゃと？」

「全世界へ魔法の存在を植え付ける強制認識魔法」

「！…それはそれは、大胆な事をしますね」

流石のアルも少し驚いたようだ

「ああ、火星ロボ軍団VS学園防衛魔法騎士団って最終日でやる表向きは今年の麻帆良祭最大のイベントがあるんだけど

本当は超一派と学園魔法使い側の全面戦争の総力戦ってこと
火星ロボ軍団が勝利すれば発動するらしい」

「そうですね、確かに面白そうですね」

「メガロセンブリアが聞いたら間違いなく超を消しに来るじゃろっ
な」

「まあそうだろうね

でも彼女の覚悟は本物だったよ」

「あの歳で歴史を変えるつもりですか」

「ああ、それに超は未来の私と面識があるようなんだ」

「未来の砌と？」

「ああ、何故面識があるのかは分からないけどね」

まあそれも最終日に分かるだろう

「そうですね、それでは私はここで失礼します」

そしてクウネルが消える

分身だったのかな

「ワシも先に帰っておるぞ」

ゼクトも私の部屋に帰って行った

「クツクツク、楽しく盛り上がっているみたいだね
でも、そう長くのほほんとしてはいられないよ？
超は本気だ、それを君に止められるか…？
私を失望させないでくれよ？ネギ君」

私は誰もいない屋上で下で一日目の打ち上げで盛り上がっているネギ君達を見ながら一人呟いた

だが私は気付かなかった

すぐそばで私の言葉を聞いている者がいる事に

まほら武道会 前編（前書き）

今回は少し長めです

その分いつもよりグダグダかもしれません

その点はご了承ください

まほら武道会 前編

麻帆良祭二日目、早朝

ネギ達はエヴァンジェリンの家に集まっていた

「何でこんな朝早く集められたのよ」

「僕にも分かりません

ただ、師匠マスターの家に集まってくれと夕映さんが

「それもかなり慌ててたアルよ?」

「夕映が慌てるほどの事ってなんだろう?」

「皆さん、こんなに朝早く集まってもらって申し訳無いのですが、事態はかなり深刻になっている可能性があるです」

「どういうことですか?綾瀬さん」

「実は、昨夜砌を打ち上げに誘おうと砌を探していたのですが…」

〜回想〜

砌は何処にいるんでしょうか?

校舎内の殆どの教室を回って見つからないとなると、残るは屋上で
すね

案の定、砌は屋上にいたです

ですが、砌は誰かと話しているらしいです
フードを被った人と…ゼクトさん？

「そうですか、それでは私はここで失礼します」

そしてフードを被った人とゼクトさんが消える

…あの人も魔法使いでしたか…

そして残った砌に声をかけようと屋上に出ようと思いますが…

「クツクツク、楽しく盛り上がっているみたいだね

でも、そう長くのほほんとしてはいられないよ？

超は本気だ、それを君に止められるか…？

私を失望させないでくれよ？ネギ君」

！？

私は動く事が出来ませんでした

その声があまりにも怖く、いつもの砌の声とは明らかに違っていた
から

そして、私はこの時点である可能性が浮かんだ

砌も超側の人間なのではないか？

そして恐る恐る砌の顔を見ると

それは慈悲とはかけ離れた、まるで戦場にて敵を殲滅せんとする兵
士のような顔だったから

そして、眼に模様のようなものが浮かんでいた

私は怖くなって逃げ出した

砌がそんな事をするはずは無いのに、殺されるのではないかと思っ

たから

〜回想終了〜

「そんなことがあったんか…」

「はい

あくまで推測ですが、最悪の場合、砌が超側についている可能性も否定できないです」

「そんな…！」

父さんの盟友なのに、魔法を世界になんて…」

「でもネギ坊主の父上はそんなに凄いのでござるか？」

「それはワシが説明しよう

ナギがリーダーをしていた紅き翼はナギが誘ってできた集団じゃ特にその中でもナギ、ジャック

そしてお主らも知っている砌

この三人は最強格として有名じゃった

そして更に砌はその三人の中でも最強と言われた分かるか？

最強集団の中でも最強と言われていたんじゃよ、砌は

はつきり言っただけでアイツを敵に回して無事でいられる可能性はほぼ無いと思ったほうがいいぞ」

「そ、そこまでか？」

いくらなんでも過大評価し過ぎやないか？」

「アイツに対して過小評価はあっても、過大評価し過ぎという事は

無い」

「そんなに強いアルか!？」

「学園の魔法関係者全てを敵に回しても無傷で全滅させるだろうな」

「そんな人が超側に入ってるんじゃない勝ちなんで無いじゃない!」

「それよりもいいのか？」

「もうすぐ武道会の時間じゃないのか？」

「そ、そうやった!」

「皆、急ぐわよ!」

そして龍宮神社

『おはようございます、選手の皆さん!』

奥から朝倉と超が出てきた

朝からテンションが高い…

『ようこそお集り頂きました!』

30分後より第1試合を始めさせて頂きませんが、ルールをもう一度説明させていただきます

予選と同じく銃器・刃物禁止と魔法詠唱禁止

勝ち負けの判定はダウン10秒、リングアウト10秒、気絶、ギブアップ、で負けとなります

それでは頑張ってください!」

あゝ、楽しみだな

昨日学園長から許可を貰って徹夜で作った木刀、
世界樹の枝を一本貰って作った（鞘付き）
叢雅むらましの

「（砌、砌）」

ん？クウネルからの念話

「（何？アル）」

「（今日の武道会、よろしくお願いしますよ）」

「（分かってるって）」

アルも心配症だな

でもどうやって戦おうかな

そして私は選手控室に移動した

「「「「「.....」」」」」

「（何この空気!?)」

何でこんな空気がピリピリしてんの!?

しかもネギ君達の視線が痛い...!

「やあ砌」

「真名か、調子はどつ?」

「ぼちぼちってとこかな
砌は？」

「私もまああつてとこかな」

「そうか…」

その木刀は？」

「ああ、世界樹の枝から作った木刀「叢雅」

木刀そのものに魔力があるから、持っただけで身体能力が上がる優
れ物だよ

昨日徹夜で作ったんだ」

「て、徹夜かい…？」

それにしても、ネギ先生達はどうかしたのかい？」

「こつちが聞きたいよ……」

何故だ…

私が何かしたの…？

「砌」

「エヴァか、どうしたの？」

「ぼーや達からの視線の理由を教えてやろっ」

「それはありがたい

で、なんで」

「ぼーや達がお前を超側だと疑っているからだ」

「はい？」

何故に？

何でそんな認識が？

「昨日言ったお前の独り言が原因みたいだぞ？」

「独り言？」

…あれか…」

まさかあれを聞かされていたとは思わなかったな
私が気付けないとは、私も弱くなったかな

…待てよ？

「ならそれ利用しようじゃないか」

「何？」

「どういう事だ？」

「それなら私は悪役に徹しようじゃないかってことだよ
ネギ君達にもいい刺激になるだろう」

「なるほど、そういう事か」

あえて悪役を買って出る事によって、ぼーや達への試練にするつもりか」

「そういうこと」

まあ銃を構えられているので開けられないことには変わりないけど

「えー、大変なハプニングがありました、何故か会場は色々な意味で大盛り上がり！」

も、もう終わったらしいけど

「ま、真名

もう目を開けてもいいんじゃない？」

「ん、もう良いだろう」

びっくりした

何だったんだろう、さっきの……

「次は第2試合に行きたいと思います！」

村上選手、佐倉選手！壇上へお上がり下さい！」

次は小太郎君か

まあ、普通の魔法生徒に負ける事は無いだろう

まあ、結果から言うと小太郎君の圧勝でした

小太郎君の動きの速さについて行けずに、訳も分からぬまま気絶させられた

明日菜対大豪院ポチは明日菜の圧勝

それ以降は原作と同じく古菲とクウネルが勝ち上がった
そして私の番

「それでは第6試合を始めます！」

夜刀選手、シスターシャークティール選手、壇上へお上がり下さい！」

さうで、行きますか！

「第6試合はGブロックの選手たちを一瞬にして蹴散らした夜刀選手と、こちらも他の選手を圧倒したシスターシャークティール選手です！」

これはかなりハイレベルな戦いになりそうです！

それでは第6試合……始め！」

「行きますよ、夜刀さん！」

そして、十字架をこちらへと飛ばしてくる
良いの？もろ魔法じゃないの？
まあいいか

キン

そして、その十字架は私の前で真つ二つに斬られ地面へと落ちた

「なっ!？」

「おおっと！」

これは何が起きたのか!？

シスターシャークティール選手が放った十字架が何の前触れもなく真つ二つになり地面へと落下した！

ですが夜刀選手は先ほどと同じく腰に差した木刀に手をかけているだけです！

「これはどういう事だ!?!」

「居合い切りでしょうね」

ですが速過ぎて目に見えないようです」

そう、豪徳寺の言とおおり、私は居合い切りで斬ったのだ

だから直前まで紙鑢をかけていたのだ

これぞ、無銘流奥義、迎居合切構

むかえいあいぎりのかまえ

ほとんどの攻撃に対応できる万能の構え

「くっ!」

シスターシャークティ―は次々十字架を放つが全て斬り伏せられる

「無駄だ、そして、終りだ」

キン

さっきと同じ音を立て、木刀を鞘に戻すと

バタツ

シスターシャークティ―がその場に崩れ落ちた

「審判、気絶したよ」

「…ハッ!?!」

し、勝者、夜刀選手!」

それを聞いた私は選手控室へと戻った

（刹那 side）

凄い

私が砌の戦いを見て思った感想はその一言だった
全ての攻撃を斬り伏せ、一瞬の斬戟を持って相手を仕留める
ほとんどの剣士が目指す理想であり、それを出来る物はあまりにも
少ない動きの一つだった
だが、彼はそれを平然とやってのけた

「刹那さん…、今砌が何やったのか分かった？」

「ええ、完全に見えた訳ではありませんが、相手に近づき、峰打ち
を食らわせ、そして戻る

この一連の動作を砌は一瞬でやったんです」

「そ、そんなのを一瞬で？」

明日菜さんが驚くのも無理は無い

こんな事を一瞬でやる人間などほばいないと考えていい
それにあの木刀、微量だが魔力を感じた
となると恐らくあれはマジックアイテム
効果はどうかは分からないがそうだろう

「それでは次の試合に参りたいと思います！

エヴァンジェリン選手と桜咲選手は壇上へ！」

とうとう私の番がやって来た

私は勝ち上がって、砌から真相を聞き出す！

しかし、エヴァンジェリンさんか、そう簡単にはいかないだろう

〈刹那 side out〉

〈砌 side〉

シスターシャークティー、まあまあだったけど経験が足りないな
次は刹那か…師匠にいいとこ見せてくれよ？

それにしても…何故に猫耳にメイド姿にデッキブラシ？

「第七試合、FIGHT！」

「はあ！」

「フン」

刹那はエヴァの首を狙うが容易くエヴァの鉄扇に攻撃を弾かれる

刹那は追撃しようとしてエヴァに迫るが、エヴァが作った魔力糸に足を
取られ転倒する

そして逆にエヴァの追撃をくらい倒れ、魔力糸によって宙吊りされる

「刹那、私の目を見る」

「……え？」

「いいから見る、刹那」

その瞬間、両者共に動かなくなった

幻想空間に入ったのか
さて、私の行くかな

そして私もエヴァの幻想空間に入った

〈第三視点〉

「なっ……これは？」

巫女服を軽量化し背中に布がまつたくない服、鳥族の格好をした刹那は突然の出来事に困惑する。

手には自分の得物「夕凧」を持って自分の状態を確認しているとエヴァンジェリンが姿を現した。

「白い翼は…タブーとされ遠ざけられたそうだな
どんな幼少期を送ったか容易に想像がつくよ
親もなく里を離れんとした貴様を、本山を継ぐためにナギと別れ
日本へ戻った詠春が拾ったか」

その通りだったので刹那は反論しなかった。

「さあ！貴様のためにこの場を用意してやったぞ！
余興に過ぎぬとはいえ、ここならば人目はない、全力でくるがい
い！

もっとも私も全力でいかせてもらうが…この空間までは呪いも届
かんからな

私もかつての力を使えるぞ」

「エ、エヴァンジェリンさん……あなたにとってはおそらく塵にも
等しい私のような者に何故ここまで？」

「刹那、貴様は砌の事が好きだな？」

「なっ!？」

刹那は困惑した

確かに砌の事は好きだが、正面から言われると恥ずかしさが出る

「その反応だとやはりか

正直に言おう、私も砌の事が好きだ」

「え……?」

初めはエヴァンジェリンが冗談を言っているのかと思ったが、真剣な顔をしている所エヴァンジェリンは本気のようなようだが刹那は分からなかった

何故エヴァンジェリンが砌の事を好きになったのか、その原因が

「え、エヴァンジェリンさん、何故砌の事を？」

「貴様は昔私がどんな扱いを受けていたか知っているだろうか？」

「はい……」

もちろん知っていた

昔エヴァンジェリンは人間から虐げられていた事を

ましてや魔女狩りの時代など彼女にとっては苦痛以外の何物でもなかっただろう

「私が麻帆良学園に来る前の事だ

私は人間に追い詰められていた時に足を滑らせて崖から落ちそうになった

だがその時、鎖で縛って引き上げた奴がいてな」

「まさか、その助けてくれた人って…」

「ああ、砌だ

最初見た時は女だと思っていたがな」

その第一印象はやっぱり自分と変わらないのか
刹那も最初女だと思っていたのだ

「砌は私を始めて普通の女の子として接してくれてな

普通じゃありえない事だ

英雄が悪の魔法使いを助けるなど

だが、私はだからこそ砌を好きになった

お前はどうかんだ、刹那」

「私は、エヴァンジェリンさんのような切欠ではありません
気付いたら好きになっていたんです

木乃香お嬢様も同じです」

「なるほどな

だが、貴様と砌では決定的に違う所がある

貴様にはあって、私と砌には無いものだ」

「私にあって、エヴァンジェリンさんと砌には無いもの…?」

刹那は思い浮かばなかった

その逆なら幾らでも思いついたが、自分にしかないものは何なのか、

想像もできなかった

「分らんか？」

「それは寿命だ」

「っ！」

刹那はやっと分かった

確かにエヴァンジェリンは真祖の吸血鬼、砌も原因は分からないが不老と言っていた

それに対し、自分は人より長生きはするが、いつかは死ぬ

「分かっただろう！」

貴様は他より寿命は長いが、それでもいつか死んでしまう

だが、私なら永遠に砌と共にいる事が出来る！

アイツも少なからず、いや…寧ろ誰よりも知っているだろう

自分が人とは違うという苦しみを！大切な者が先に死ぬ悲しみを！

アイツは不死であるが故に何度も経験したはずだ、自分の大切な者を失う事を！」

その言葉と共にエヴァンジェリンは刹那に攻撃を仕掛けた

「魔法の射手！連弾・闇の288矢！」

「くっ！」

刹那はそれへ飛ぶ事によって避ける

「甘いな、刹那」

「な!?!」

エヴァンジェリンは一瞬で刹那の後ろをとっていた

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

来たれ氷精、闇の精! 闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪!

闇の吹雪!」

ドゴオオ!

「ぐああああ!」

刹那はまともにくらい、吹き飛ばされる

「貴様に分かるか、刹那!

親しかった者達が居なくなる事がどういう事か!

自分が他とは違う事で周りからいなくなる事が!

生まれた時から不幸を背負ったお前には共感を覚えるが、同族意識で認めてやるほど私は寛大ではない

刹那、貴様がここで私に負けたのなら、砌のことは諦めてもらおうぞ!」

見たことも無いエヴァンジェリンの剣幕に、刹那はたじろいだしかし、刹那は持ち直し

「私はまだ、それがどういふ事なのかはよく理解できません

でも、エヴァンジェリンさんにどう言われようと、砌の事を諦めることなどできません!」

「フン

ならばその意思を貫いてみせる、刹那！」

「はい！！」

（ 砌 side ）

おかしいな

普段なら幻想空間に侵入するのにそんなに時間はかからないはずだ
けど、今回は異様に時間がかかったな

…なんで？（ご都合主義です）

まあいいか

それにしてもエヴァと刹那、何とも激しい戦闘を…

これじゃあいつまでも幻想空間は持たないよ

「こんなにもできるとはな！

驚いたぞ！」

「毎日砌との修業をしていますから！

神鳴流奥義、雷鳴剣！」

「氷神の戦鎚！」

ドガアアアア！

「こりゃまた派手に…！」

お互いの技がぶつかった所はクレーターが出来ていた
刹那ってこんなに強かったっけ？

「神鳴流対魔戦術絶対防御、四天結界独鈷鍊殻！」

「こおる大地！」

こおる大地、か…

技自体はそれほど難しいわけじゃない

だけど込められた魔力が膨大なため桁外れの威力になっているとい
う事か

「ぐあつ！」

刹那は防御したようだけど、威力が大きい分防御しきれなかったよ
うだ

「次は耐え切れまい……」

これが最後だ！刹那！」

「（か…勝てるはずがない、この人に…」

最強状態のエヴァンジェリンさんがこれほどまでの魔物とは…し
かもこの人はまだ遊んでいる

しかし理不尽な話だ

私の力で勝ち取れと言ってもこの圧倒的な実力差

いくら幻術空間の中とはいえ、これでは最初から選択肢はないに
等しい

……幻術？……そうか！」

気付いたか

そう、ここは現実リアルではなく幻想イマジン

己の気持ちがそのまま力となる

「エクスキューションーソード!!」

「神鳴流決戦奥義：真・雷光剣!!」

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

お互いが持てる力の全てを使い相手にぶつける

…へえ、エヴァのエクスキューションーソードを相殺したんだ…

だが幻想空間は衝撃に耐えきれずに崩壊した

私も戻るかな

現実に…

幻想空間から抜け出し現実世界に戻ってきた刹那とエヴァ

何故か爆発が起きたが、刹那がエヴァの胸元へ一閃

エヴァは避けずに攻撃を受けて倒れ伏した

「ぎゃ、逆転!？」

決まったー！ーっ!!」

避けられると思っていた刹那は思わぬ展開に慌ててエヴァに駆け寄る

「だ、大丈夫ですか!? エヴァンジェリンさん!」

「ああ、私の負けだよ

よくぞ我が幻術を打ち破ったな」

言いたい事は全て言ったので悔いはないのか、エヴァはどこか清々
しかった

「あ、ありがとうございます！エヴァンジェリンさん！」

「何？」

刹那から感謝される覚えが無いので困惑するエヴァ

「先ほどの闘い…力であなたに勝つことではなく、自らの意志の力を示して幻術自体を打ち破ることが答えだったんですね！」

「ん？ あ、いや…まあな」

「確かに色々な話を聞いて難しい問題なのは理解してはいたんですが…それをこの様な形で諫め諭して頂けるなんて！」

流石はエヴァンジェリンさんです！ありがとうございます！」

「オ、オイこら刹那！何をポジティブな方向にカン違いしているか知らんがな！」

私はただ単に砌を狙う貴様を苛めたくなっただけだ！

本当は諦めさせるつもりだったんだ！誤解するなよ！」

まあ、このポジティブ思考が刹那の良い所ともいえるけどね

「いえ！そんなご謙遜を！」

私、感動しました！」

「ええいつ、手を離せ！」

生まれに似合わぬその純朴さがつまらんと云うのだ！

何故もつと屈折せん！」

さて、確か次の組み合わせもまったくじ引きって言ってたな
ここも原作と違うけど、大して問題にはならないだろう

〈砌sideout〉

〈第三者視点〉

そして救護室

居るのはエヴァンジェリンと明日菜と刹那

「エヴァンジェリンさん、よろしいですか？」

「ん？」

「先ほどあなたは生まれた時から不幸を背負ったお前には共感を覚
えると言いました

これは…あなたも不幸を背負っていたということではないですか
」？

「は、話は終わりだ

ととと出ていけ、ガキども！」

「そうはいかないわよ！話を聞くまで出ていかないから！」

「エヴァンジェリンさん、私にだけ勝ち負けの条件を出すのは不公
平ですよ

私を買ったんですから昔話ぐらい……」

「ぐっ……貴様」

しばらくして、エヴァンジェリンは観念したのか、昔の事を話し始めた

「大昔の話だ

私は動乱続く中世欧州でどこぞの領主の城にあずけられ何不自由ない少女時代を過ごしていた」

「ちゅ、中世!？」

「お城!？」

てことは…エヴァちゃんはお、お姫様なの？」

「黙って聞かんか

…その頃の私はまだ真正銘の人間だった。10歳の誕生日まではな

10の誕生日、目が覚めると私はもうこの身体だった

私は自分をこんな姿にした男への復讐を果たして…城を出た

この姿で生きていく力を得るまでの数十年が最もキツかったよ

最初の頃は吸血鬼らしい弱点も残っていたしな。

特に魔女狩りの時代は面倒だったよ

何しろこの姿だからな、成長しないことを疑われれば同じ場所に数年とはとどまれない

一度ミスって捕まった時は大変だった…

…魔法使いどもの国でも受け入れられることはなかった

殺さなければ生きられぬ時代があったし、殺さずに済む数十年もあった

暗黒大陸…今のアフリカに居を構え人と交わらずに生きる術を得て私たちに近づいてくるのが私たちと戦い、命を落とす覚悟のある者だけになってからは…楽になった」

「エ、エヴァちゃん…あんだ…」

「どうした、今更私が怖くなったか？」

「エヴァンジェリンさん！あなたは自ら真祖になったのではないのですか！？」

「じゃあエヴァちゃん、自分から悪い人になったんじゃないじゃん！」

予想外の言葉に困惑するエヴァンジェリン

「アホか！話を聞いていたのか神楽坂明日菜！？圧倒的に悪いわ！経緯はどうあれ私は悪の…」

明日菜に反論しようとするが頭を撫でられて二の句を継げられなかった

「大丈夫、エヴァちゃんは何も悪くないよ」

「な…？」

パシッと撫でつける手を撥ね退けて反論するエヴァンジェリン

「貴様！全然人の話を聞いとらんな！？」

私が何人手にかけたか教えてやろうか！？」

「んー、それはホントに難しい話だけど…」

「んー、何てゆーか、その…エヴァちゃんの場合、多分大丈夫！…
…と思う」

「テキトーに発言するな！このバカ頭！」

「そういえば…」

「どうしたの？刹那さん」

「はい、エヴァンジェリンさんがどうして不老不死になったのかは分かりましたが、砌はどうして不老になったんでしょうか？」

「確かに…」

「エヴァちゃんなんか知らない？」

「私も茶々丸に調べさせたことがある
だがアイツの大戦以前の記録が無いんだ、全くな」

「ええ！？」

「それって、どういう事ですか？」

「言った通りだ、紅き翼に所属する前の情報が一切無いんだよ
突然現れたかのようにな
それにあの数々の強大な力だ、まず普通の人生じゃなかっただろ
う」

「過去が無いなんて…」

「一体何故なんでしょうか？」

「分からん」

「改ざんや消去といった人為的行為が行われた事も否めない」

「砌が超さん側についてるのも、それも関係してるんじゃない？」

「その可能性は高いですね」

「（アイツは別に超側についてる訳じゃないがな）」

そう思いつつエヴァンジェリンはあえて言わずにいた
砌が悲惨な過去があり、さらに超側だと勝手に確定された瞬間であ
った

〈砌side〉

「さあ！まず一回戦が終わった所で、二回戦の対戦相手の発表と行
きましょう！」

第一試合 高音・D・グッドマン VS ネギ・スプリングフィー
ルド

第二試合 夜刀砌 VS 桜咲刹那

第三試合 クウネル・サンダース VS 古菲

第四試合 神楽坂明日菜 VS 犬上小太郎

私の相手は刹那か…

ここが潮時かな

まほら武道会 後編

眠い…

やっぱり徹夜はきつかったかな…
仕方ない、少し寝よう…

「…お…起き…ざり…砌……おい起きろ、砌！」

「うわああ！」

びっくりした…

「おい砌！もうお前の番だぞ！」

「あれ？早いなあ」

それじゃ、行きますか

〈砌sideout〉

〈刹那side〉

「それでは二回戦第二試合は、お互いに剣を使って戦う夜刀選手と桜咲選手です！」

それでは第二試合、FIGHT！」

とうとう始まった

私と砌、師匠と弟子の戦いが

私が砌に勝てる見込みはほとんどない、でも！

「砌、私はあなたに勝って、真相を聞き出します！

神鳴流奥義、斬空閃！」

「何の真相かは知らないけど

無銘流、斬波！」

キイイイイン

二つの斬戟がぶつかり、相殺される

砌はそのまま連続して斬戟を飛ばしてくる

「くっ！」

私は辛うじてそれを避け、その勢いそのまま砌に斬りかかる

「ハアアアアア！」

そのまま鏢迫り合いになる

しかし力では砌に分がありで徐々に私は押し負けていく

「まだまだあ！」

私は瞬時に回転して受け流し、そのまま砌に回転斬りを食らわせる

「なっ！？」

砌は驚いたようだが、木刀で受け止め再び距離をとる

「……驚いたよ刹那、まさかこんなに強くなってるなんてね」

「貴方の修業のお陰ですよ」

「しかしこんな絶好の機会に色々制限を付けられて戦うなんて無粋な真似をしたくない」

「何でも有りの本気の勝負と行こうじゃないか」

「え？それってどういっ……」

私は困惑した

「何でも有りという事は魔法も有りという事なのだろう
だが武道会の規則では魔法の詠唱は禁止だ
それなのにどうやって」

「砌の目に赤い模様が浮かび上がった」

「その瞬間、私達は天空にいた」

「空は紅く、月は黒かった」

「足場がいくつかわかんんでいるが、空中戦になるのは確かだろう」

「これは!?!」

「今使ったのは月詠という術だね」

「ここは私の精神s……いや幻想空間だ」

「ここが砌の……」

「一体何故?」

「言ったでしょ?」

「何でも有りの本気の勝負と行こうじゃないかって
ここでならお互いに本気が出せる」

確かに私の手には夕凧が握られ、鳥人族の巫女服姿になっている

「さあ始めよう

師と弟子の戦いを」

そう言い終わると、砌は私に瞬動で斬りかかって来た

！？刀が違う！？

これは、まさか！

「君の考えている通りだよ

この刀は私の一番の愛刀、斬鉄剣だ」

！これがあの…

斬鉄剣の事は小さい頃、長から話は聞いていた

曰く、戦艦を丸ごと両断したと

曰く、刃こぼれ一つせず、切れ味は衰える事を知らないと

曰く、最上位魔法を受け止めても傷一つつかないと

曰く、夕凧や妖刀ひなを超える、史上最高の刀だと

曰く、砌がこの刀を使う時は、相手が大群の時か、相手を本気で受けて立つ時だと

つまり、砌は私相手に本当に本気で行くつもりなのだ

「私はこの刀を使う時は本気で行く決めてるんだ

いつもの修業の様に手加減はしないよ？」

！？

砌からの殺気は凄まじいの一言だった

全てを殺し尽さんとする殺気

私や明日菜さんが放っている闘気とは違い、鋭く研ぎ澄まされ、正

に刃そのものと言っている
血の気が引いて行くのが分かる
でも、ここで負ける訳にはいかない

「神鳴流奥義、斬鉄閃！」

私は螺旋状に気を飛ばす

「遅い」

「！？」

「くっ！」

気付かなかった、いや、……気付かなかった
私は急いで距離をとる
だが

「まだ遅い」

「なっ！？」

速過ぎて気配すらまともに察知出来無い

「神鳴流奥義、百花繚乱！」

私は反射的に後ろの砌に向かって、百花繚乱を放った
砌はそれを軽く避け、魔法の詠唱を始めた

「ギル・ガ・ジル・ガン・グジル・ガ・ゼル

契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大

剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし

火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に！

『もえる天空』！」

巨大な炎が私に襲いかかる

それを真上に飛ぶ事によつて避ける

「ラグナロク神々の黄昏、アンリ・マユこの世全ての悪！（マシンガンver）」

ダダダダダダダダ！

砌は黒と白の塊を連射し始めた

それはまるで機関銃、私は必死に避けた

すると突然、砌が攻撃を止めた

「この位でいいかな？」

？ いったい何を…

「周りを見てごらん」

！これは！

先程から砌が撃っていた白と黒の塊が数え切れないほど空中で静止し、私を包囲している

「私はそれらを自由に操る事が出来る

もちろん、いくつに分散していようとね」

まさか、これら全てを一度に操れると言つのか！？

だとすれば、私に逃げ場は無い

「この包囲網を避け切れるかな？」

砌が言い終わった瞬間、静止していた白と黒の塊は一斉に私を目掛けて突進してきた

私は何発も攻撃をくらいながらも辛うじて耐え、掻い潜る事が出来た私の姿は、煙に隠れて砌からは見えない
これなら！

「神鳴流奥義、極大・雷鳴剣！」

私は威力の高い技を叩き込む
今の砌は完全に無防備だった

これならば無傷では済まないだろう

その考えが甘かった

煙が晴れると、その中からは無傷の砌が出てきた

まさか、そんなはずは！

そう思っていると、砌がいる足場には雷鳴剣が砌の直前で二つに分かれていた跡があった

雷鳴剣を斬った？

「一刀両断、詠春から聞いた事はあるだろう？」

！？

無銘流奥義の一つ、一刀両断は長から聞いた事がある

どんな魔法障壁を展開しても、それごと相手を斬る技で、どんな障害があっても無に等しいと

私は急いで砌から距離をとった
砌は私を追いかけて跳躍する

「ハッ！」

私は次々迫る斬戟を防ぐのに精一杯だった

「無銘流奥義、残影羅刹剣！」

ザザザザザザザザ！

その瞬間、到底防ぎ切れないほどの斬戟が私を襲った

「ぐあああああああ！」

私は偶然あった足場に叩きつけられた

「くうう……！」

「ここまでだね

よくやった、よくやったよ刹那
だけど、ここで終わりだ」

やはり、私では勝てないのか

私では、砌に勝てないのか
いや、諦められない、諦めたくない

このちゃん…ウチ、頑張るから
絶対諦めへんから

そう思うと、自然と痛みは引いて来た
私立ち上がると、砌はかなり驚いているようだった

それもそうだ

今の私の状態は、全身血だらけで、しかも体中を斬られているのだから

相手は五体満足、こちらは満身創痍

どう考えても圧倒的にこちらが不利だ

だが、私はお嬢様を守ると誓ったのだ

こんな所で諦めたら、お嬢様を守ることなど、到底できない

「まさかその傷で立つとはね

良いだろう、教えようか

超一派は本気だ

それを止めたいなら全力で来ないと、止める事は敵わないよ

私は最高の一撃を持って止めを刺そう

……起きろ、エア」

砌が何かを取り出した

眼も段々ぼやけてきたようだ

それでも私はまともに狙いも付けられないまま夕凧に気を溜め始めた

何故だろう、体はボロボロのはずなのに、寧ろいつもより力が溢れ

てくる感じがする

その溢れ出た気を全て夕凧に注ぎ込む

「天地乖離す………」

「神鳴流決戦奥義………」

「開闢の星………」

「真・雷光剣………」

あなたには感謝しますよ」

「それはどうも」

「砌、お主が負けるとは

あの娘は何をしたんじゃ？」

「何、私の能力、月詠は知ってるだろう？」

「ええ、自らの精神世界に相手を引きずり込む術ですよね」

「ああ、私はその精神世界をある設定にしたんだ」

「「ある設定？」」

「ああ、それは「相手は己の気持ちをもそのまま自分の技の威力に上乘せでき、自分は十分の一の威力しかでない」

という設定だよ

でもそれを悟られないように演技するのは大変だったよ」

「それでか

しかしあの娘、大丈夫じゃろうか」

「何が？」

私は何が心配なのか分からなかった

「何せ英雄でも最強格のお主を倒してしまっただんじやぞ

しかもあの娘はそのような設定になっていた事を知らんじやろう」

そういう事が

でも今私はネギ君達の所には行けないしなあ

まあ刹那なら大丈夫だろう

麻帆良祭、終了

そして三日目

「さあ、始めました！」

火星ロボ軍団VS学園防衛魔法騎士団！

はたして学園防衛魔法騎士団は麻帆良学園を火星ロボ軍団から守り切れるのか！？」

始まったか

私はある場所にいる

私も行動を開始するかな

私は三代目風影と四代目火影を取り出す

さあ、行こうか？

～三代目風影（砌） side～

今は刹那や明日菜達を探している

……いた

あれは、刹那と楓か

そして私は二人の前に出る

「！」「！」「！」

「これは…修学旅行の時もいた傀儡！」

「…という事はつまりどつどつという事でいけるか？」

「3-Aの魔法関係者に絞られる

そして傀儡を使う可能性があるのはエヴァンジェリンさんか砌のみだがエヴァンジェリンさんがこんな傀儡を使っていた所を見た事が無い

つまり、この傀儡を操っているのは……」

「砌、という事になるでござるな」

「ああ……来るぞ！」

私は攻撃を開始する

砂鉄を操り、砂鉄時雨で相手を近づけないようにする
だが刹那はそれを掻い潜り、私に一撃入れる

あれからまた成長したのか？

全く…刹那の、いや…ネギ君達の成長速度には驚くよ
だが、経験が足りない

その瞬間、四代目風影が突然背後から現れる

砂鉄時雨の中に特製クナイを忍ばせておいたのだ

そして楓は四代目風影と戦闘を始める

数十分後

世界樹の光が強くなった

そろそろか

私も行くかな

そして私は砂鉄の嵐を起こし、刹那の前から消える

〈三代目風影(砌) side out〉

私は世界樹の根本にいる

まあずっとここにいたけど
今いるのは私とエヴァとゼクトと学園長

「超さん…どうしてこんな事を！
砌さんを引き入れてまで、どうして！」

「！違う…あの人は関係ない！
あの人は不干涉のはずだ！！」

おかしい
知らなかったとは言え、反応が過剰過ぎる
そろそろバラすかな

「すまないねネギ君
騙してしまつて」

「み、砌さん！？
どういふ事なんですか！？」

「君たちへの試練だよ
いい刺激になつただろう？
…超、教えてもらおうか？
未来で何があつたのか」

そろそろ話してもらわないと

「そうだな
あなたが来たなら話すべきだろう
未来の魔法世界は、旧世界へと侵攻を開始した
旧世界は数週間で魔法使い達に支配された

私はネギ坊主の子孫

だが、それも過去の栄光

スプリングフィールド家は廃れてしまい、私は超鈴音と名前を偽って食べ物を盗んでの貧しい生活していた

そして、その絶対的力故に絶大な発言力と支持を持つ魔法使いがいた

…それがあなただ、砌さん

「私？」

そんな時代まで私生きてたんだ

「私と砌さんがあったのはある日のことだった……」

～回想～

「まてー！」

私はその日、食べ物を盗んだところを立派な魔法使い（マギステル・マギ）目撃され、追いかけられていた
曲がり角を曲がった所で人にぶつかった

「うわっ！」

「おっと、大丈夫かい？」

くっ、こんなことしてる場合じゃないのに

早くしないとあいつらが追い付いてきちゃう！

だが私の思いも空しく、あいつらはすぐに追いついて来た

すると立派な魔法使い（マギステル・マギ）達は私がぶつかった相

手を見るなり、敬礼を仕出した

「こ、これは夜刀様！」

お会いできて光栄です！」

「えっ！？

こいつがああ剣聖！？」

私は信じられなかった

見た目は明らかに女性でなよなよしてそうなのに、数々の争いや戦争を渡り歩き、今や最強の存在とさえいわれている英雄であるとは思えなかったからだ
ただ、それが本当ならそんな奴から逃げられる訳が無い

「貴様！」

夜刀様に向かってこいつとは失礼な！

それにしても、夜刀様はなぜこのような所に？」

「何、ちよつとした散歩だよ」

「そうですか

それにしても、わざわざ夜刀様の手を煩わせてしまい、申し訳有りません」

「いや別に構わないよ

それで？この子は何を？」

「はっ

それが、店の食べ物を勝手に持ち出しまして」

私はここで捕まるのか…

私が諦めていた時、眼の前の英雄は飛んでもない事を言い出した

「いやすまないね

実はこの子は私の姪なんだ

好きな物を買っていいと言ったらはしゃいで逸れてしまったんだ
代金は私が払っておくから心配はいらない」

何を言ってるんだこの人は

私とは初対面なのに、いきなり姪だなんて

「し、しかし……」

「いやー、感心したね

私がメガロセンブリアに君が仕事熱心だ、それ相応の対価が必要
だと伝えておこう」

「は、はい！

ありがとうございます！

それでは失礼します！！」

そう言っ立派な魔法使い（マギステル・マギ）は立ち去って行った
私を庇った？

なんで？何の得もないのに

「という訳だ

行こうか？」

「え？

行くってどこに？」

「私の家だよ」

は？

「着いた」

え？え、えええ！？

気付いたら森の小さな家の中にいた

「いや、言つたらろう？君は私の姪だと

それと、いい加減名前で呼んでくれないかな」

「え、えつと、夜刀、さん？」

「ハハハ、砌でいいよ」

「み、砌さん」

「はい、よくできました」

砌さんは私を撫でてくれた

そう分かれると、自然と涙が出てきた

「え！？」

ちよ、何で泣いてるの！？

何か気に障った！？」

「違…う」

今まで、誰…にも褒められたり、こんな…風に…優しく接され

た事が…無かったから
嬉しくて……」

「…そうか

ここには私たち以外誰もいない
思いつ切り泣くといい」

そう言つて、砌さんは私を優しく抱きしめてくれた
私は、溢れ出る思いと涙を抑える事が出来なかった

「う、うわああああああん！！！！！！」

私は泣いた

砌さんは自分の服が私の涙で濡れるのを構わずに、ただ抱きしめて
くれていた

私には、それが嬉しかった

「うわああああああん！！！！！！」

「落ち着いた？」

「ぐす、うん…」

「よかった

さて、どうする？

この家で私と暮らすか、元の生活に戻るか
君の好きな方を選ぶといいよ」

私の好きな方…
もう、あんな生活には戻りたくない

「私は、この家でああなたの姪として暮らしたい」

「そうか

では歓迎しよう

ようこそ」

～回想終了～

「その日から、私の生活は一変し、人並みの生活が出来るようになった

全ては砌さん、あなたのお陰だ」

「未来の私がそんな事を…」

だがこれで超と私の接点があった
けどこれで終わりだとこの時代に来て歴史を変える動機にはならない
つまり…

「その話には、まだ続きがあるね？」

「私と砌さんは、ある日までは普通に暮らしていた
だが、突然あれが起こった」

～回想～

「ほら！歩け！」

突然、砌さんがメガロセンブリアに反乱を企てているとの疑いで逮捕された

その際に、私も同罪だと言われ、私も一緒に逮捕された
帝国側と市民達はそんな馬鹿なと異論を申し立てた

「何を愚かな事を言っているのだ！」

砌殿は昔から世界の為に尽くしてくれてきたではないか！
そのようなお方が反乱を企てているだと？

「いい加減にしろ！」

「だがここに確かな証拠があります

数年前から被告人、夜刀砌が戦力を蓄え続けているのです
これを反乱を企てていないなどと言えますかな？」

「なっ！？」

「これは！？」

「よって夜刀砌と超鈴音は火星への転移を申しつける」

「なっ！？」

「ちょっと待って下さい！」

「私はどうなっても構いませんが、この子は、超は無罪です！」

砌さんは自分の身よりも、私に無罪を主張した

私は砌さんと生活していてその力も知っている

その力を使えばメガロセンブリアを壊滅させることも可能なはずなのに

砌さんはそれをしなかった

「超鈴音はお前の姪なのだろう？
知っていなかったと言っても、同罪だ」

「くっ！」

「刑はすぐに執行する
転移の準備をしる」

そう言つてメガロセンブリアの議員は去つていった

「……申し訳無い

我々が力不足なばかりに……」

「あなた方のせいじゃないですよ」

「しかし、あなたの力ならここから逃げる事も容易いはず
なのに何故……？」

「確かにここから逃げ出すことも可能です
しかしそれをすればメガロセンブリアは帝国や市民にも要らぬ疑
いをかけるでしょう」

例え私が無実の罪でも、罰を受けるのは私だけで十分です
実際にメガロセンブリア、いや元老院が抹殺したいのは私です
けど超、君は逃げるんだ
超まで罰を受ける必要はない
私が上手く誤魔化すから、超は帝国に逃げるんだ」

は？

砌さんを置いて、私だけ逃げる？

「いやだ！」

もう私が頼れるのは砌さんしかないのに、砌さんを置いて逃げるなんて出来ない！」

「超！」

君まで火星に飛ばされる必要はない

逃げて生き延びるんだ！」

「いやだ！」

「…すまない、超」

ドスッ

「み、ぎり、さ、ん？」

「ありがとう、超と過ごした時間は楽しかったよ
これで、お別れだ」

「そ、んな…」

私は気を失った

次に目が覚めたのは、帝国にある城のある寝室だった

「目が覚めたかね」

「う、あなたは？」

「私は帝国の大臣だ
心配する事は無い

「私も驚きだよ」

「だから私は砌さんを救うために、未来を変える…！」

そして超は疑似時間停止能力を使おうとするが

「無駄です！雷華崩拳！」

超のカシオペアが破壊される
腕をあげたな、ネギ君

「くっ、まだ終わらない！」

あれは、ファンネル？

ファンネル（？）からのレーザーを避け続けるネギ君
超はその隙に何かを呟き始めた

「コード??????」

呪紋回路解放、封印解除

ラストテイル・マイマジックスキル・マギステル…」

「あれは…！！！」

超さんの全身に呪文処理が…

見たこともない魔法様式…」

「?…あれは？」

「やっぱり使うか」

「おい、何だあれは」

「あれは強制的に魔力回路を開く術式だよ
あれを使えば魔法が使えない人でも使えるようになる」

「なにっ!？」

「そんなものを超くんは!？」

「しかし砌

確かに今でもそれに似たものはあるが、それでは…」

「その通りだよゼクト

使う魔力が大きい分、身体への負担は計り知れない
最悪……命を落とす」

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大
剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし

火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に!」

「むお!？」

「こ、これはイカン!」

学園長は止めに入ろうとするが…

ヴォン

エヴァがエクスキューションナーソードを突き付ける

「止めるな

…あれは奴の道だ

無粋な真似をするなら…貴様とて容赦せんぞ」

「むう…」

「学園長

今止めに入れば、ネギ君と超の思いを踏み躪る事になります
そんな事は教職者として、いや人として間違った行為です」

「……うむ、分かった

このまま二人の思いを見届けよう」

「『もえる天空』！」

確かにあれならネギ君に勝つ事は出来るかもしれない
ただどあれでは勝負がつく前に体がボロボロになる

「今を持ち堪えるか、ネギ坊主

もうここまできれば策など無い

後は互いの思いを賭けた力と力のぶつかり合いだ」

超は本気、か

「火精召喚・槍の火蜥蜴29柱！」

「風精召喚・戦の乙女17柱！」

ドオオオオオ！

お互いに精霊召喚しても相討ちか

「光の精霊37柱・集い来て敵を射て！」

魔法の射手・連弾・光の37矢！」

「炎の精霊59柱・集い来りて敵を射て！
魔法の射手・連弾・火の59矢！」

ズドオオオオオオオオ！

「……最後に1つ教えてください

このためだけにこの時代へきたと言いました、これが全てだと
ではなくーふえさんや葉加瀬さん…3-Aの皆と過ごしたこの2年
間は、超さんにとって何だったんですか？」

「…そうネ、それが私の唯一の計算違い

驚いたことにこの2年間は、とても楽しい2年間だった

だが、それも私にとっては儚い夢のようなモノ…

お喋りは終了だ

ラストテイル・マイマジックスキル・マジステル！

契約に従い 我に従え 炎の霸王！」

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル

来れ 雷精 風の精！」

「来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし
！」

「雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の風！」

「火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に！」

「はああああ！！『雷の暴風』！！！」

「『もえる天空』！！」

詠唱はネギ君の方が早い

雷の暴風はもえる天空よりも詠唱時間は確かに短い
威力で欠ける分スピードで勝負を決める気か

ドゴオオオオオオオオオ！！！！！！

やはり威力があるとはいえ、詠唱に時間がかかった分超の方が不利か…

そして雷の暴風がもえる天空を破り、超に直撃する

「砌」

「ん？」

突然ゼクトが話しかけてきた

「やはりナギの息子じゃな

なんだかんだ言って、思った事は曲げず貫こうとする
ナギにそっくりじゃな」

「最初は右も左も分からないただの子供だったんだけどね」

さて、このままじゃ超とネギ君が落下しちゃうし、行くかな
……あれ？

超もネギ君も落ちてない

なんで！？原作ではここで決着が付いていたはずなのに！？
私というイレギュラーが影響しているのか！？

「…まだまだ、まだまだまだ！
まだ、終わる訳にはいかない！
アデアット！」

「なっ！アーティファクト！？
と言う事は仮契約をしたのか、しかし誰と…」

「ふふふ、仮契約の相手はあなただ、砌さん」

「え？」

私？

いや馬鹿な！
そんなはずは

「おい砌！超鈴音と仮契約をしたのか！？」

「いや、私は超と仮契約をした覚えは無い！
何かの間違いだ！

……あ

「なんだ！やはり心当たりがあるのか！？」

「まさか、未来の私と…」

「むふふ、その通りだ
あなたの唇を奪うのは本当に苦労した
フフフフフフ」

「超鈴音、貴様~~~~~!」

「超のアーティファクトは、杖?」

!?

「超鈴音!そんな物で何をするつもりだ!」

あれは、マズイ

「おい砌、何故そんなに驚いた顔をしている?

あれからは極僅かな魔力しか感じないぞ」

あの杖はまだ封印されている状態に過ぎない

あれを開放すればマズイ事になる

あれが本当に流刃若火ならネギ君が死ぬぞ!?

原作ブレイクもいいとこだ!

「砌、お主あれを知っておるのか?」

「ああ、あれが私の知っている物と同じ物なら、シャレにならない
ぞこれは」

流刃若火なんて斬魄刀最強とされている刀じゃないか
そうこうしている内に超が開号を唱え始めた

「万象一切灰燼と為せ『流刃若火』」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

その瞬間、辺りが炎に包まれた

「封印を解いたか…」

こればかりはネギ君でもどうにもならないかもしれない」

「なに！？どう言う事かの！？」

「あれは私の持っている武器の中でも攻撃力では上位に入る程の武器なんです

あれを完璧に使いこなせば、一人で軍一つを壊滅させられます

だが、超にあれを使いこなせられるかどうか…」

だがおかしい

あれは私の王の財宝ゲート・オブ・バビロンの中に今でもちゃんと入っているのに

「はあああああ！！！」

超がネギ君に斬りかかる

ネギ君はそれを避け超に一撃入れようとするが

「くっ、まだだ！」

超は無理矢理方向転換し、ネギ君の攻撃を防ぐ

「城郭炎上！！！」

ネギ君と超が炎に囲まれる

これで私達とネギ君達とは引き離された訳だ

私は写輪眼中の様子を窺う

状況は超の方が些か有利か

さてネギ君、どうする

「灼熱葬火！」

突然ネギ君の周りに炎が現れ、ネギ君を飲み込む
ネギ君は包まれた後、辛うじてそこから抜け出した

「影の地 統ぶる者 スカサハの 我が手に授けん 三十の棘もつ
愛しき槍を

『雷の投擲』！」

ドゴオオオオオオオ!

ネギ君が雷の投擲を発動し、超に直撃する
煙が晴れると

「はあ…はあ…

ネギ坊主、これを持って決着をつけよう
無銘流奥義…」

「無銘流!?!」

「そう、私が見える唯一にて無二の無銘流奥義……」

「くっ

闇夜を斬り裂く 一条の光 我が手に宿りて 敵を喰らえ

『白き雷』!?!」

「大紅蓮鳳凰剣・煉獄業火斬!?!」

ネギ君が白き雷を放ち、超が炎で鳳凰を作り出し、それと共にネギ君に突撃する

「あああああああ！！！」

「はあああああああ！！！」

ドゴオオオオオオオオオオ！！

辺りに雷と炎が飛び散る

煙が凄くて様子が見えない

そう思っていると、煙の下から何かが落ちてきた
ネギ君を抱えた超だった

「おっと」

私は超とネギ君を抱える

「ふふっ、負けてしまった…」

だが超は何か吹っ切れたような顔をしていた

「ネギ君はそんな軟弱に鍛えてないよ？」

「あなたの弟子なら当たり前、と言ったところか」

「そういう事かな」

でもネギ君は冗談抜きで頑張ったと思うよ
超、君もね」

「砌さん？」

「お疲れ、超」

「……なら……んっ」

「んっ！？」

え？

超に、キスされた…

え、えええええええ…

「ああ〜〜〜！」

「超りんずるいで！」

なんかカモが何かの魔法陣を書いている

「うちも！んっ」

「んっ」

「ほら、せつちゃんも！」

「え、あ、その…」

「失礼します！んっ！」

「パクティオー！」

仮契約！？

ネギ君として無かつたけ！？

……あ、よく考えればしてない……

「近衛木乃香、刹那
き、貴様ら~~~~」

「あ、仮契約カードや
アーティファクトはなんなんやろな」

「私は……」

「人の話を聞け！」

「まあまあ」

「砌、お前もお前だ！」

「行き成りだったから油断してたんだよ……」

「一生の不覚だ……」

「超さん」

ネギ君が気が付いていたようだ

「この時代に残りませんか？」

「この時代に残って、一緒に未来を変えましょう」

「……魅力的なお誘いだ、遠慮させてもらおう」

「そんな、どうして……」

というか行動するのが早すぎでしょ
つい最近魔法関係者になったとは思えない反射神経だ

ワーワーギャーギャー!!

ネギパーティー崩壊

記録57秒

……早ッ!

「あれ？刹那と木乃香はあれに興味無いの？」

「うちらはな」

…なーなー超りん

みぎちゃんの家系図持ってへんの？」

「残念ながら砌さんの家系図は手に入らなかった」

「いや何故私のを？」

というかその時代まで私は生きてるんだから家系図があるわけが無い

「幼馴染として気になっただけや」

「そうなんだ…」

「それじゃあ砌さん

私は未来に帰らせてもらおう」

「もう行くのか…」

もし未来の私が生きていたらよろしく伝えておいてくれ」

「……わかった
伝えておく」

そして空に巨大な魔法陣が現れる

「さらばだ、ネギ坊主」

「超さん……」

「また会おう！」

「はい！いつかきつと！」

こうして超は未来へ帰り、麻帆良祭は無事終了した

因みにアーティファクトは原作通り木乃香は「東風の檜扇」と「南風の末広」で刹那は「七首・十六串呂」と「建御雷」だった

アルピレオ・イマ（クウネル・サンダース）の茶会

麻帆良祭振り替え休日、二日目

私は早朝にア、クウネルの元を訪れていた
え？ワイバーン？
威嚇して来たから殺気を放って黙らせましたが何か？

「邪魔するよ」

「砌ですか

菓子とお茶の用意はできていますよ」

「じゃあ貰おうかな」

ズズズズズズ……

「……ほっ

いや、和むね」

「ええ、本当に」

ほのぼのとしてるな

カポーンって擬音が聞こえて来そうなくらいだよ

「邪魔するぞ」

「おや、誰かと思えば

久しぶりですね、キティ」

「その名で私を呼ぶなああああ！」

エヴァは割と本気で葬り去ろうとしたようだが全てクウネルの体をすり抜けてしまった
本当にどうなってるんだろう

「ハア…ハア…」

「まあまあ落ち着いて
茶でも一杯どう？」

「そうですね、あなたみたいにいつも怒っていると寿命が縮みます
よ？」

「誰のせいだと……！」

「はあ…放って置こうか」

それからなんやかんやでエヴァも落ち着いて一服した

「…この気配は」

「どうかしましたか？」

「ああ、来たようだよ？
ネギ君達が」

ギイイイイイイイ

「ようこそ私の茶会へ
お待ちしていました」

「遅いぞ」

「ゆっくりしていくといふよ」

「今日はお招き頂きましておおきに」

ペコリ

「（礼儀正しいですね）」

「（詠春の一人娘だからね）」

「あの、クウネ」…いえ、アルビレオさん…」

「ネギ君！」

「はっ、はい！」

「私の事はクウネル・サンダースと呼んでほしいと言った筈です」

「そこまでなの？」

「どれだけその名前に愛着があるんだか…」

「そして…」

「これが九白紅梅ですか…とっても美味しいです！」

「他にも色々ありますよ」

「ほんとに美味しい」

「スイーツもおいふいな」

ワイワイ

「ふふふ…」

「何がおかしいんだ？」

「いや、私やエヴァが生きてきた時代じゃあ想像もできないほど和やかだから、ついね…」

「……確かにな」

私がこの世界に来た時代は戦争をしていたし、エヴァが生きてきた時代は魔女狩りといったものがあつた時代だ
その時ではこんな事など思つてもいなかつた
さて、そろそろ……

「ネギ君

今回の超の一件は、君にはどう映つた？」

「砌さん…僕は

どんな場所に、どんなモノの上に自分が立っているのかを知ら
ました

僕は超さんに言われる前から知っていたはずでした

マスター
師匠の言とおりで

綺麗なままではられない

いや、そもそも最初から僕達は綺麗でいられるはずが無い」

「ふ…」

その通りだよーや

透絶した目で見れば、「生きること」と「悪を成すこと」は同じだ
世界の構造上、何人もこの理からは逃れられぬ

悪こそこの世の心理

ようやくその認識に到ったか

お前のような真つ直ぐで才能ある前途有望だが世界をしらぬガキ
にはそれをおもいしらせるのが最も難しい」

無駄に威厳を放っているエヴァ

でもまあその通りだ

人は生きている限りは必ず何かしらの悪事を働く
故意であるなしに関わらずだ

ネギ君も来たばかりのころは世界に理を知らな過ぎていた

「エヴァンジェリン…」

生真面目な少年をよくぞここまで導きました

師は悪人バットガイに限る…見事です

で、どうです？

私の弟子になってみませんか？」

「ぶーーーーっ！」

「え？

弟子、ですか？」

「ちょっと待てい！」

「はい、実はエヴァンジェリンですが…アレはいけません
あんなのに師事しては人生を棒に振っているようなものですよ？」

「えっ？」

「何だと貴様ー！」

クウネル…完璧に遊んでるなあ

「それに私ならサウザンドマスターの戦い方をより詳しく教えられますよ？」

「えっ」

「クウネルはずっと近くでナギの戦いを見て来たからね
ナギの戦い方がより鮮明に分かるから、いいかもしれないね」

「おいぼーや！」

お前まで「えっ」とか…

というか、砌まで何を言っているー！」

「エヴァンジェリンは氷系ですし、雷系の教諭としてはちょっと…」

「は、はあ…」

「それに比べてクウネルはほとんどの属性の魔法を使えるからね
雷系を支持するならエヴァよりクウネルの方がいいだろう」

「聞こえてるぞ!!」

「おい!アル!砌!」

「重力魔法などはいかかですか?」

「じゅ、重力ですか…」

「ああ、確かにそれが使えばかなり強くなれるね」

「おい!!」

「容赦なく畳みかける私とクウネル」

「このままいけば本当にネギ君をクウネルの弟子にすることも可能だ
ろうなあ」

「おやおや?」

「まさかそんなにネギ君の事が好きだったのですか?」

「ちがうわ!」

「何でそんな話になるんだ!アホか、エロナスピ!
貴様ら何を企んでいる!

「ぼーやをアルの弟子にするなど、何が目的だ!」

「「何が目的って…」」

「そりゃあもちろん…」

「ムキになって慌てふためくエヴァ(あなた)の姿を見たいからに
決まっているだろう(じゃないですか)」

「死ねええい!!」

ヒュン!

「フッフ、無駄ですよ」

スカ

「おっと危ない」

まあ簡単に避けた訳だけど

「しかしクウネル、相変わらずのSっぷりだね」

「いえいえ、砌こそなかなか良かったですよ」

「フッフッフッフッフ」

「（み、砌さん……怖いです……）」

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

「貴様……!!」

「あっ!そ、そうでした」

クウネルさん、父さんは……」

「はい、彼は今も生きています
私が保証しましょう」

その理由はこれです」

「それは、バックティオー仮契約カード？」

「ええ、これは私とサウザンドマスターとのカードです
このカードがまだ生きていると言う事は、彼が生きていたという
事です」

因みに、カードが死ぬとこうなります」

そしてアルはバックティオー仮契約相手が死んだ場合のカードを見せる

「サウザンドマスターを探すならウエールズへ戻りといいでしょ」

「ウエールズへ？」

「ええ、あそこには魔法世界への扉、ゲートがあります」

「魔法世界…そこに父さんが…
それじゃあ、行ってきます！」

ステーン

アスナがこけた

「バカか貴様は！」

魔法世界への扉など、そうホイホイと開いてくれるわけ無かろう
が！」

「えっ？そんなんですか？」

「そうよ全く、お父さんの事になると周りが見えなくなるんだから
！」

「でも、居ても立ってもいらなくなっちゃって…」

「だから！」

「まあまあ

でもネギ君、ゲートは一定の期間ごとでないと開かないから今行
つても意味が無いんだ」

「そうなんですか!？」

「ああ、今度開くのはまだ先でね
それまでは修行だ」

「そういうわけだ

これからは普段より厳しくしていくからな、覚悟しろ！」

「は、はい…」

張り切ってるなあネギ君
お、他も来たか

「こんにちはー！」

「おじゃまします」

「うわ、キレーー！」

「ホントだー！」

お茶会はネギパーティーによってかなり賑わった

教会のお仕事

今日はシスターシャークティイーから依頼を頼まれている

今日は自分が協会に居られず美空とココネだけなので密かに見守ってほしいとのことだ

シスターシャークティイーは何だかんだ言って心配なんだなーと思っていたら……

「特に美空は悪戯をしないようにしっかりと見張っていてください」

ただの監視役か……

と言う訳で教会の近くのカフェでのんびりしている所だ

ここなら教会から見られる心配もないし、目立つ事もない完璧だ

だが周りの人達は

ヒソヒソ

「ねーねー、あの人かつこよくない？」

「ホントだ、声かけて来なよ」

「えー、恥ずかしいよ」

ヒソヒソ

「おい、あの子可愛くないか？」

「ああ、どっかのモデルさんか何かじゃねーの？」

「すげー」

目立っていたりする

本人はそれに気付いていない訳だが
この鈍感野郎！

なんか今変な電波が届いたような…

プルルルルルルルル

ん？シスターシャークティーからだ
何だろう…

（美空 side）

にしても、うちのクラスメイトたちは碌な悩みが無いな
全く、どーなってるの

コンコン

「ようこそ、懺悔の間へ

此処にはあなたと私、そして我らが主しかいません
自らの罪を懺悔することで主はあなたをお許しになるでしょう」

「実は…悩みがあつて」

この声は砌？

「好きな子が居るんです」

ふむふむ、好きな子ねえ……

……… って何ですとお!?

あの万年鈍感野郎の砌に色恋が!?

これは絶対に聞きださないと!

おおっと、落ち着いて落ち着いて

「ふむふむ、それでどんな子なのですか?」

「はい…運動が出来て、それがとても魅力的なんです」

「なるほど、他には?」

もう少し…もう少し…!

「他には、髪が短くて、おしとやかというか、大人しいというか…」

なるほど、運動神経が良くて、髪が短くて、おしとやか、か

………ん?それって全部アタシに当てはまるよね?

…え、え、ええ!?

嘘お!?

だって砌って英雄じゃん!?

知らない内に英雄落としちゃった!?

「ちよっと砌!どういうこと!?!?」

そしてアタシは確かめようとして部屋を出る
するとそこに

「シスター、シャーク、ティー？」

「プツ、ククク……」

笑いを堪えているシスターシャークティーがいた

「もうこれぐらいでいいですかね？」

「ええ

もう十分です」

「え？、えええ？」

「これで少しは懲りたかな？」

「どういう事ですか!？」

「実はね……

〈数分前〉

ブルルルルルルル

ん？シスターシャークティーからだ
何だろう…

「はい、もしもし？」

「あ、シスターシャークティーですが」

「あ〜どうも、なにか？」

「はい、美空とココネはちゃんとやっているでしょうか」

「あ〜…」

はつきり言って遊んでますね

美空は神父の真似ごとを懺悔の間でやってます

まあ悩み事には一応ちゃんと答えているようですが」

「そうですね…」

やはりお話しする必要があるようですね…

フフフフフフフフ…」

こ、怖い…

ん？そうだ

いいこと思いついた

「シスターシャークティー、実は提案があるのですが…」

「提案？」

「ええ

目には目を、歯には歯を、悪戯には悪戯をつてね

実はですね…」

そして私はその案を言った

「なるほど」

確かにあの子にはちょうどいいかもしれませんね」

「では今から行ってきます」

「はい、よろしく願いします」

〜回想終了〜

「というわけなんだ」

「な、何だ〜…」

「ですが美空？」

「しっかりと反省していただきますよ？」

「え？いやあああああああ………」

そして美空はシスターシャークテイーにどこかへ連れて行かれた
その後、次の日まで美空が何処で何をしていたのかを知る者はいな
い……

「いや…もうお許してください…いやあああ！」

その後

ん？あの人、拳動不審だな
どうしたんだろう

「すみません、どうかしましたか？」

「ひい!？」

い、いえ、何でもありません!失礼します!」

タッタッタッタッタ

………何だっただらう

ん?学園の結界が少しおかしいような…気のせいか

だが私は、結界の異変を調べ無かった事があんな事になるとは、この時思ってもいなかった

真・麻帆良防衛戦(前書き)

オリジナルイベントです

真・麻帆良防衛戦

その日の夜

突如学園から遠い所に魔力が察知された

それも一個や二個ではない、1000、2000単位で察知されたのだ

しかも悪魔もいるようだ

この魔力では、爵位級がいてもおかしくない

しかもそれと同時に学園を覆っていた結界が突然消えた
緊急の魔法関係者による集会が行われた

「諸君、よく集まってくれた

事態は察していると思が緊急を要する

一刻の猶予もない

ただちに担当の場所につき、迎撃態勢を整えるのじゃ

今夜は特別に敵の殺害を許可する

よいか！一人たりとも学園への侵入を許すでないぞ！」

「「「「「はい！！」「」「」「」「」

「ゼクトも頼む」

「ああ、分かっている

久しぶりに暴れられそうじゃからのう」

敵の気配が分散した

という事は…

「学園長、どうやら敵はいくつかに分かれて仕掛けて来るようですよ」
「一番多いのは正面です」

「うむ、では砌君はそこを頼む」

「はい」

「そういえば、木乃香は…?」

「?そういえば見当たらないの」

「……まさか!」

「学園長!敵はあり得ない量の異形を召喚しているそうぞ、しかも悪魔もいるようです!」

「それにまだまだ増えているとのことですよ!」

「この魔力…」

「木乃香の魔力を使ったか…」

「まさか夕方いたあの拳動不審の男が!?」

「いや、それより今は木乃香の救出が先決だ」

「学園長」

「うむ、木乃香をよろしく頼む」

「はい」

「砌」

「何故かゼクトに引き留められた」

「何？」

「気を付けるんじゃないぞ」

「分かってるさ」

そして私は学園と外を繋いでいる橋へ向かった

そこは悪魔と異形と呪術師の群れで溢れていた

その先には木乃香が囚われていた

その二つが、私をキレさせた

私は念話で学園長に

「敵はほぼ無尽蔵に召喚してくる

各魔法関係者になるべく体力を温存させるように言ってくれ

それと、今からこのあたり一帯に敵以外誰も近づけさせないで貰

いたい

……死ぬぞ」

これで心置きなく全力を出せる

「カオスフォーム
混沌形態」

ラグナロク アンリ・マユ マキア・エレベア
神々の黄昏とこの世全ての悪を闇の魔法で取り込んだ状態だ
異形と呪術師がこちらへ攻撃してくるが

「貴様らに用は無い

ラグナロク
消えろ、神々の黄昏（拡散ver）」

ドガアアアアアア！！

これでだいぶ減ったが

「ふははははは！無駄だ無駄だ！

こちらに近衛木乃香がいる限り、いくらでも出て来るわ！」

そして再び異形が現れる

だが私はそれ如きでは止まらないほどにキレていた

「黙れ

貴様ら、その身がどんな末路を辿ろうと文句を言うなよ」

「ふ、ふん！

いつまで強がっていられるかな！

こちらにはサウザンドマスターを凌ぐほどの魔力の持ち主がいるのだぞ？」

だから？

「それがどうした

たかがそれだけで私を倒せると思ったか」

「な！？たかがそれだけだと！？」

「ああ、私にとってはたかがそれだけだ

言う事はそれだけか？

木乃香を返してもらおう

早々に消える、クソ共！」

「くっ！行けえ！」

先ほどよりも多くの異形が来るが

「邪魔だ、ゲート・オブ・バビロン王の財宝」

ズガガガガガガ！！

〈砌sideout〉

〈刹那side〉

「くっ、数が多すぎる！」

「恐らく麻帆良祭で消耗したところを狙ったんだろう
しかしこの量ではな」

隣にいる真名が言うが本人もあまり余裕ではないようだ
そして突然、あまりも巨大な威圧感と殺気が放たれた
次の瞬間…

ズガアアアアア！！

「！？何だ！」

「あれは砌の魔法だよ」

高畑先生が言う
だが威力

「砌の…
凄まじいですね」

「ああ、今学園長から連絡があつた
木乃香君が囚われていて、敵は木乃香君の魔力を使って召喚して
いるようなんだ

「だからなるべく体力を温存させておいてくれと」

「お嬢様の魔力だと!？」

「今すぐ助けに行かないと、お嬢様が!」

「ここをお願いします!」

「どこに行くつもりだ」

「まさか近衛を助けに行くつもりか?」

「当たり前だ!」

「私はお嬢様を守るためにいる」

「その私が行かなくて誰が行くんだ!」

「落ち着くんだ刹那君」

「しかし高畑先生!

「それではお嬢様が!」

「心配いらないよ」

「木乃香君の所には、砌が向かっているからね」

「砌が?」

「しかし、人質にでも取られていたら」

「それに僕達が行ってもかえって足手纏いだ
砌はどうやらかなりキレているらしい

敵以外近づけさせるなと学園長に念話が来たそうだ」

砌がまわりに近づけさせないようにするほどなんて…

「彼がここまで怒ったのは久しぶりでね

木乃香君を利用した事に怒ったんだろう

恐らく敵の術者は碌な死に方をしない…いや、させてもらえない
だろうね」

「それほどまでに砌をは…」

やはり砌も、お嬢様のことを大切に思ってくれているのだろう

「さあ、僕達は目の前にいる敵を倒そう」

「はい！」

〈刹那 side out〉

〈ゼクト side〉

「魔法の射手・連弾・火の589矢！」

やはり数は減らぬか

全く、ナギ以上の魔力の持ち主の魔力を召喚に使うなど、無尽蔵に
近いぞ

だが砌が行ったのじゃ、恐らくもうすぐ終わると思うが……

翌日

ん？月詠をかけた相手はどうなったかって？

ご想像にお任せします

まあ精神崩壊を通り越したような状態とだけ言っておこう

「砌、相手に何をやっただんですか……」

「ん？聞きたいかい？

ちよつとトラウマになるかもしれないけど…

フフフフ…」

楽しかったなあ…

「い、いえ…

遠慮しておきます」

「ハハハ

そうした方がいい

世の中には本当に知らない方が良い真実というものもある」

「は、はあ…」

それよりも今日は学園長が皆を集めたらしい
まあ昨日絡みなのは間違いが無いだろう

「皆よく集まってくれた」

「学園長、奴らは関西呪術協会の奴らなのですか!？」

「いや、ガンドルフィーニ君

あ奴らは関西呪術協会の者ではない

敵の一人に話を聞いたところによれば、どうやら違法を犯した魔法使いと関西呪術協会から追放されたはぐれ者達が関東魔術協会を乗っとりうとしてやったようなんじゃない

砌君が昨日見た男はその集団の一人で、麻帆良に潜入し結界に妨害工作をするなどをしていたようじゃ」

なるほど、関東魔術協会からも関西呪術協会からも見放された者達の復讐という事が

しかしあれだけいるとは思わなかった

ともかくこれで一件落着か

明日からまた本格的に修行再開か

ハルナの魔法に対する意識を確かめなくちゃいけないかな
なら私が英雄だつてことは知らない方が確かめやすいな
そういえば、ゼクトはもうそろそろ帰るって言ってたけど…

修行の日々(前書き)

めだかボックスのほうが行き詰まっているので、こっちもぼちぼち書きながらということに

修行の日々

一学期終了間近

本来今日は普通に学校があるけどゼクトの見送りをすることにした
無論、学園長も容認している

今はウェールズ行きの方が成田国際空港行きの電車の中
しかも個室だ

「そう言えば、最近テオはどうなの？」

一年位会ってないからな

「お主に会いたがっておつたぞ
バクティオー
仮契約したそうじゃのう」

やっぱり知ってたか

「ああ、アーティファクトもかなり強力だったよ」

「まあヘラス帝国第三皇女と英雄がバクティオー仮契約などすれば、強力なアー
ティファクトがでるのは当然じゃろう」

それもそうか

というか、しばいアーティファクトがでたらかなり凹む

「お次は、成田〜成田〜、成田国際空港でございます
お忘れ物の無いようお願いいたします」

どうやら着いたようだ

そしてウェールズ

もうすぐゲートが開く

「そろそろだね」

「うむ」

ペアア

魔法陣が現れた

「時間のようじゃ」

「ああ、近い内にそっちに行くよ」

「うむ、待っておるぞ」

そう言つてゼクトは帰っていた

さて、私も帰るかな

私は転移魔法で学園まで帰った

一学期終了、夏休み

ネギ君がウェールズ行きを決めたようだ

しかしゲートが開かないので行くのは数週間後
それまでは修行だ

「ねーねー砌

あんたも魔法使いなんだってね
ネギ先生から聞いたよ〜?」

「ああ、まあね

何なら一回勝負するかい?」

「ふっふっふ、望む所よ!」

「(皆、私が紅き翼の一員だとは黙っていてくれ)」

「(どうしてですか?)」

「(純粹に彼女の实力を見たいからさ
因みにバラした場合は言った人を解体バラすから
その後特別訓練の参加資格をプレゼントとしよう
拒否権は無しだけ)」

「「「「「(絶対言いません!!)」」」」」

これでいい

ハルナはもう準備が出来たようだし
こちらもいけますか

「準備はいいかい?」

「いつでも!」

「では、始めようか」

「アデアット「落書帝国」

黒豹召喚！行きなさい！」

そう言つて豹のゴーレムが飛び出て来た
っ、中々速い

だがハルナにはまだ致命的な欠点がある
それは攻撃手段がアーティファクトで出したゴーレム以外ないこと
つまりハルナ本人を叩けば終りなんだが、それじゃ面白くない
ということとで暫く遊ぶ事にした

「クツクツク

砌も案外鬼畜じゃないか」

「え？嘘？砌強くない？

何で当たらないの！？」

あゝもう！こうなつたら、大鷲召喚！」

そういつて多くの大鷲を出す
そろそろ終わらせるかな

「ギル・ガ・ジル・ガン・ゲジル・ガ・ゼル

契約に従い、我に従え、風の帝王、荒れ狂え、殺戮の殺風

罪深き咎人達を、その無数の刃を持つて、切り刻め、北方の戦風

『風刃の嵐』」

辺りに無数の真空刃が巻き起こり、ハルナの作ったゴーレムを一つ
残らず駒切れにする

ハルナは気絶してしまっているようだ

当てないようにしたけど、やっぱり刺激が強かったかな

楽しいな〜

「師匠…」

砌さんって、スパルタだったんですね、師匠よりも…」

「私も初めて知ったさ…」

「なあ、あのねーちゃん大丈夫なんか？」

「え、えーと…」

しかし一人だと流石に可哀そうな気もする
では救済措置を取ろうか
私は無限一矢を止める

「刹那ー！

この特訓に参加させたいと思う人を挙げていってくれ」

「（助かった！）

では楓と古菲を！」

「「！？」」

ふむふむ、武道家の二人か
まあ妥当なところかな

「よし、それじゃあこっちに来てくれ」

「巻き込んだでござるな…」

「さすがにあれを受けたいとは思わないアルな」

「すまん

だがあれを一人で受けるのは流石に無理だ…」

それじゃ〜再開しようか

「魔法の射手・連弾・混沌の無限一矢」

「くっ、砌の魔力切れはまずあり得ない

となると残された選択肢は、私達が力尽きるか、砌に一撃入れるかだ！」

「でもこの中でどうやって砌に近づくアルか!？」

「確かに、この中で近づくのはかなり辛いでござるよ」

「ここは分散して各自砌に近づこう」

「了解ネ（でござる）！」

ん？

ほほう、散開して各自で狙うつもりか

まあここは期待通りに三つに分散させてあげるかな
そして魔法の射手を三つに分散させる

「（よし、狙い通り!）」

「はあああああ!！」

三つに分散させた瞬間、刹那が上空からこちらへ高速で接近してきた
やはり狙い通りといった顔

「神鳴流奥義、雷鳴剣！」

ドオオオオン！

（砌sideout）

（第三者side）

雷鳴剣の衝撃で轟音と砂煙が起こる
エヴァ以外は、完全に決まったと思っていた
そう、彼の弟子である刹那でさえ

「お、終わった……」

「うーん

狙いは良いけど、敵に一撃入れた位で安心し切らない方がいい
そう言う油断が命取りになる

……こんな風にね」

その言葉と共に、刹那は強い衝撃を受けた
ネギたちは砂煙の中から刹那が飛び出して来たようにしか見えない
だろう

「でもよくあの弾幕を掻い潜ったね、素直に感嘆するよ

さあ、第二ラウンドだ

今度は接近戦と行こうか」

そして砂煙が晴れると無傷の砌が立っていた

〈第三者side out〉

〈砌side〉

「今度は接近戦と行こうか」

私はそう言つて王の財宝から破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇を取りだす

私は瞬動を駆使し、刹那の背後を取る

刹那はちゃんと反応できた様で、確実に防いだ

「アデアット、「七首・十六串呂」！」

私は刹那の急所を狙つて破魔の紅薔薇で突くが

「はあ！」

ガキーン！

「っ！」

驚いたな

まさかこんなにも早く対応できるようになるとは

やはり刹那には剣を扱う才能と共に、相手の武器、戦い方に即座に対応する才能もあるみたいだ

私は弾かれた一をすぐに横薙に振るう

ギーン！

「くっ！」

匕首・十六串呂の一本で弾いたか

「でやあ！」

刹那が匕首・十六串呂の残りの六本で仕掛ける
！そうか

槍は構造上、弾かれた後は一瞬の隙が生まれる
その隙を狙ったか

フッフ、いいよ刹那

戦闘の最中に自分の実力、相手の実力、状況を見極め、自分が勝利
できる手段を模索し、実行する

今までは少し猪突猛進になりがちだったけど、それがやっと分かつ
たか

そう考えている間にも匕首・十六串呂はこちらをめがけて接近し、
反対側からは刹那の夕凧が斬りかかる

両側からの同時攻撃、か：

なかなか良い戦略だ

ただし、相手が普通のに相手だった場合、だけどね

「はっ！」

私は必滅の黄薔薇ゲイ・ボウを回転させて匕首・十六串呂を全て叩き落とす

「（よし、これでー）」

「生憎と、簡単には負けられないんでね」

ギーン！

「っ!？」

「そんな!？」

私は片方の必滅ゲイ・ボウの黄薔薇のみでヒ首・十六串呂を叩き落とし、刹那の斬戟を防いだ

刹那は驚いて動きが一瞬止まる

その隙に私は破魔ゲイ・ジャルケの紅薔薇の刃先を刹那の首元に向ける

「生憎と、不可能を可能にするから英雄と呼ばれているんでね

そう簡単に負けはしないさ

でもよくやったね

普通の相手だったら間違いないで倒していただろう」

あの時は一瞬ヒヤツとしたね

「刹那は暫く休憩

次からはもう少しレベルの高い訓練に移る」

「はい!」

さて、次は楓と古菲かな

「それじゃ、次は楓

古菲は一時休憩

早速だけどいくよー

楓とは、スピード勝負だ」

そして瞬動で楓の背後に回る

「!？」

「ルールは簡単
体術勝負だ」

そして攻撃を開始する

数十分後

死んだように倒れる

楓と、それを上から見下ろす私がいた

おお弟子よ、死んでしまうとは情けない

「拙者：まだ：死んでないで：ござ…る…」

あ、気絶した

まあ致命傷や跡に残る傷は無いし、しばらく休ませておけば目を覚
ますだろう

修行の日々(後書き)

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0903o/>

その男が行く道は

2011年6月5日15時36分発行